秋田県文化財調査報告書第240集

一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ

―― 館の上館遺跡 ――

1994・3

秋田県教育委員会

秋田県埋蔵文化財センター

一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅴ

―― 館の上館遺跡 ――

1994・3

秋田県教育委員会

館の上館遺跡全景(北東から)

帯郭上面の溝跡(北から)

出土青磁碗

出土青磁酒海壺

序

一般国道７号琴丘能代道路は秋田県沿岸北部を貫く幹線道路として計画され、秋田県教育委員会はその事業計画にそって昭和61年度から路線上の埋蔵文化財の事前発掘調査を実施して参りました。調査は能代市側より開始され、既に平成２年度までに縄文時代、平安時代の遺跡など６遺跡の発掘調査が終了し、その成果は昭和62年度、平成元年度、同４年度に４冊の報告書として刊行しております。

平成４年度は八竜町鵜川地区の館の上館遺跡が調査対象となりました。この遺跡は、本県中世の覇者安東氏の内紛を記録した『湊・檜山両家合戦覚書』に登場する「カトウド城」と目されている中世城館であり、既に昭和58年に刊行した『秋田県の中世城館』にも収載されている遺跡です。調査の結果、城館は、大小四つの郭によって構成されていることが確認され、このうち今回の調査にかかった東側の郭の周囲は６期にわたる溝で囲まれていることが判明致しました。

本書はこの館の上館遺跡の発掘調査成果をまとめたものでありますが、本書が今後の学術研究ならびに埋蔵文化財保護に役立つよう願ってやみません。

最後に本書を刊行するにあたり、調査から報告書作成に至るまでご便宜いただいた建設省東北地方建設局能代工事事務所をはじめ関係諸機関、各位に深く感謝の意を表する次第です。

平成６年３月

秋田県教育委員会
教育長　橋本　顕信

例　　言

1．本報告書は一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る館の上館遺跡の発掘調査報告書である。

2．本報告書は秋田県文化財調査報告書第167集『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ－寒川Ⅰ遺跡・寒川Ⅱ遺跡－』、および秋田県文化財調査報告書第178集『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－福田遺跡・石丁遺跡・蟹子沢遺跡・十二林遺跡－』、秋田県文化財調査報告書第230集『一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ－鴨子台遺跡・八幡台遺跡－』、秋田県文化財調査報告書第231集『一般国道7号琴丘能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－萱刈沢Ⅰ遺跡・萱刈沢Ⅱ遺跡－』に続くものである。

3．本報告書の執筆分担は以下のとおりである。

庄内昭男 … 第4章第2節、第4章第3節－（2）（3）、第4章第4節

小林　克 … 上記以外の各章各節

4．本報告書作成にあたり以下の方々からご助言、ご指導を頂いた。記して謝意を表する。

浅野晴樹、井上喜久夫、小林喜兵、高橋与衛門、武田孝義、永瀬福男、若松鉄四郎

5．土層註記中の色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帳』によった。

目　　次

序
例　言
目　次
挿図目次
表 目 次
図版目次

第1章　はじめに
　第1節　調査に至るまでの経緯 …　1
　第2節　調査の組織と構成 ……　1
第2章　遺跡の立地と環境
　第1節　遺跡の位置と周辺地形 …　2
　第2節　周辺の遺跡 ……　2
第3章　発掘調査の概要
　第1節　遺跡の概観 ……　5
　第2節　調査の方法 ……　9
　第3節　調査の経過 ……　9
第4章　調査の記録
　第1節　縄文時代後続期の遺物
　（1）土器 ……　11
　（2）石器 ……　27
　第2節　古代の遺物
　（1）土器 ……　35
　第3節　中世の遺構と遺物
　（1）検出遺構 ……　37
　（2）土器・陶磁器 ……　43
　（3）銭貨 ……　45
　第4節　近世の遺物
　（1）陶磁器 ……　45
　（2）銭貨 ……　46
第5章　まとめ
　第1節　縄文時代後続期の土器群について ……　51
　第2節　中世の遺構について ……　52

挿　図　目　次

第１図　館の上館遺跡の位置と周辺遺跡
第２図　調査区全体図
第３図　グリッド配置図
第４図　館の上館遺跡郭面配置図
第５図　遺跡の層位
第６図　縄文時代後続期の土器（１）
第７図　縄文時代後続期の土器（２）
第８図　縄文時代後続期の土器（３）
第９図　縄文時代後続期の土器（４）
第10図　縄文時代後続期の土器（５）
第11図　縄文時代後続期の土器（６）
第12図　縄文時代後続期の土器（７）
第13図　縄文時代後続期の土器（８）
第14図　縄文時代後続期の土器（９）
第15図　縄文時代後続期の土器（10）
第16図　縄文時代後続期の土器（11）
第17図　縄文時代後続期の土器（12）
第18図　縄文時代後続期の土器（13）
第19図　縄文時代後続期の土器（14）
第20図　出土石器（１）
第21図　出土石器（２）
第22図　出土石器（３）
第23図　出土石器（４）
第24図　出土石器（５）
第25図　出土石器（６）
第26図　古代の土器
第27図　帯郭上面全体図
第28図　帯郭上面溝跡土層断面図
第29図　SK01土坑平面図
第30図　SK01土坑断面図
第31図　中世の陶器（１）
第32図　中世の陶器（２）
第33図　中世の陶器（３）
第34図　中近世の陶磁器
第35図　近世の磁器・中近世の銭貨

表　目　次

第１表　縄文時代後続期の土器観察表（１）
第２表　縄文時代後続期の土器観察表（２）
第３表　縄文時代後続期の土器観察表（３）
第４表　縄文時代後続期の土器観察表（４）
第５表　縄文時代後続期の土器観察表（５）
第６表　縄文時代後続期の土器観察表（６）
第７表　縄文時代後続期の土器観察表（７）
第８表　縄文時代後続期の土器観察表（８）
第９表　縄文時代後続期の土器観察表（９）
第10表　縄文時代後続期の土器観察表（10）
第11表　縄文時代後続期の土器観察表（11）
第12表　縄文時代後続期の土器観察表（12）
第13表　縄文時代後続期の土器観察表（13）
第14表　縄文時代後続期の土器観察表（14）
第15表　出土石器観察表（１）
第16表　出土石器観察表（２）

図　版　目　次

図版　1　1　調査前遺跡全景（東→西）
　　2　調査後遺跡全景（東→西）
　　3　東側斜面での調査状況
図版　2　1　西側斜面下での調査状況
　　2　東側斜面下完掘状態（西→東）
　　3　西側斜面下完掘状態（東→西）
図版　3　1　帯郭上面溝跡SD10,SD11
　　上層断面（西→東）
　　2　帯郭上面溝跡SD10～SD15
　　重複状態（西→東）
　　3　帯郭上面溝跡SD10～SD15
　　完掘状態（西→東）
図版　4　帯郭上面溝跡SD10～SD15
　　完掘状態（北→南）
図版　5　1　東側斜面土層堆積状態
　　2　帯郭西側肩部SK01完掘状態（東→西）
　　3　帯郭西側肩部SK01完掘状態（南→北）
図版　6　古代の土器
図版　7　中世の陶器
図版　8　中世の陶器
図版　9　中近世の陶磁器・近世の磁器

第１章　はじめに

第１節　調査に至るまでの経緯

一般国道７号琴丘能代道路は秋田県沿岸北部琴丘町鹿渡地内を起点とし、能代市浅内とを結ぶ延長17.1kmの自動車専用道路として計画され、昭和58年度の事業開始から、平成４年３月には能代市側からの4.2kmが一部共用開始されるに至っている。

予定路線内には、いくつかの埋蔵文化財包蔵地がかかることが当初から予想されていた。そのため、秋田県教育委員会と事業主体者である建設省東北地方建設局能代工事事務所は協議をおこない、路線上の分布調査を実施し、現状保存の不可能な遺跡については、範囲確認調査を実施した上で発掘調査をおこない、記録保存をはかることとした。かかる協議を受けて昭和61年度には能代市側の寒川Ⅰ遺跡、寒川Ⅱ遺跡の発掘調査がおこなわれ、翌々年の昭和63年度には十二林遺跡、福田遺跡、石丁遺跡、蟹子沢遺跡が発掘調査された。八竜町側の調査は平成元年度から始まり、萱刈沢Ⅱ遺跡が調査され、翌平成２年度にはインター・チェンジ部分の鴨子台遺跡、八幡台遺跡、さらに平成３年度には萱刈沢Ⅰ遺跡が発掘調査されている。

館の上館遺跡は中世城館として周知の遺跡であり、その範囲確認調査は平成３年11月に実施された。調査の結果、路線は館の上館遺跡の東側の郭面（第Ⅰ郭）本体にはかからないものの、その周囲を巡る帯郭部分の一部が破壊されるであろうこと、また、この帯郭部分の斜面下からも中世陶器片の他、縄文を施した土器片、それに伴うとみられる石器などが出土し、調査の必要があることを確認した。この調査結果は建設省能代工事事務所にも伝えられ、平成４年６月本調査が着手された。

第２節　調査の組織と構成

１．遺跡所在地　　秋田県山本郡八竜町鵜川字館の上32－2
２．調査期間　　平成４年６月１日～９月７日
３．調査面積　　3,035㎡
４．調査主体者　　秋田県教育委員会
５．調査担当者　　小林　克（秋田県埋蔵文化財センター文化財主任）
　　小畑　巌（秋田県埋蔵文化財センター学芸主事）
６．調査事務担当者　　皆川　清（秋田県埋蔵文化財センター主査）
　　佐々木真（秋田県埋蔵文化財センター主任）
７．調査協力機関　　建設省東北地方建設局能代工事事務所、八竜町教育委員会

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　遺跡の位置と周辺地形

館の上館遺跡は、県北日本海沿岸地域の台地群のうち、最も西側に位置する「成合台地」と呼ばれる標高20～35ｍの海成段丘上に位置している。この台地は、西側を浅内低地、東側を鵜川川が形成した鵜川低地に挟まれ、幅約2.3km、長さ約８kmで八竜町大曲から能代市浅内まで延びる。その長軸方向は日本海汀線及び東側の丘陵地に平行するＮ－15°－Ｅである。

遺跡は八郎潟残存湖の北岸に接するこの成合台地の南端、米代川の河口から南に13.5km、八郎潟北岸からは北東に約2km程の地点に位置する。西側日本海汀線までは直線距離で3.5km程離れている。遺跡の経緯度は以下のとおりである。

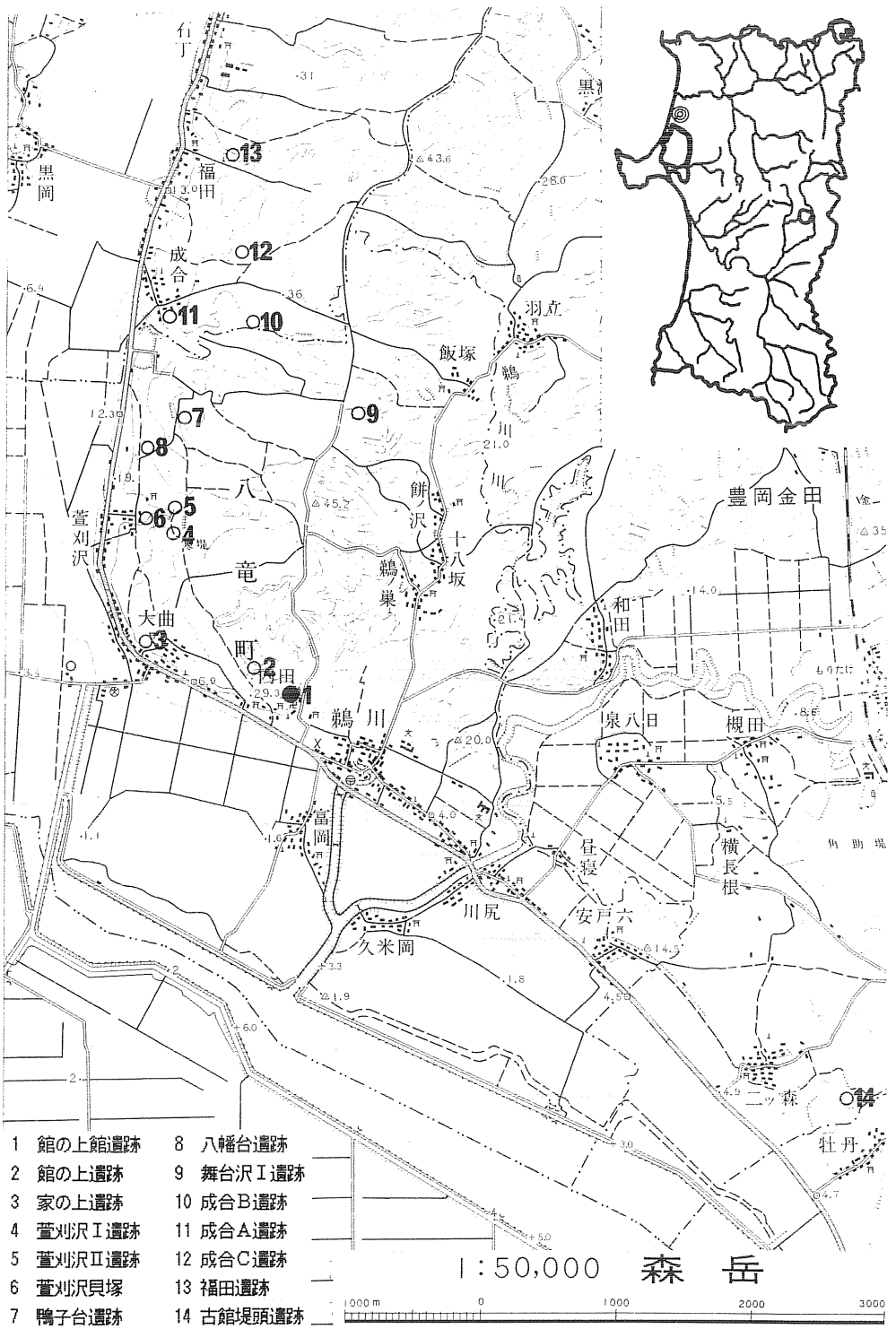
北緯 40°　6′ 00″　　東経 140°　1′ 30″

成合台地の西縁は縄文海進時の日本海汀線で、直線的な地形を呈するが、東縁は海退後に侵食した鵜川川に向かっての小侵食谷が鋸歯状に入り、侵食谷間に形成された細長い舌状台地が密に並ぶ対照的な地形を呈している。館の上館遺跡はこうした小侵食谷群のうち最も南側に位置する谷によって画された、東に張り出す舌状台地を巧みに利用してつくられた中世城館である。

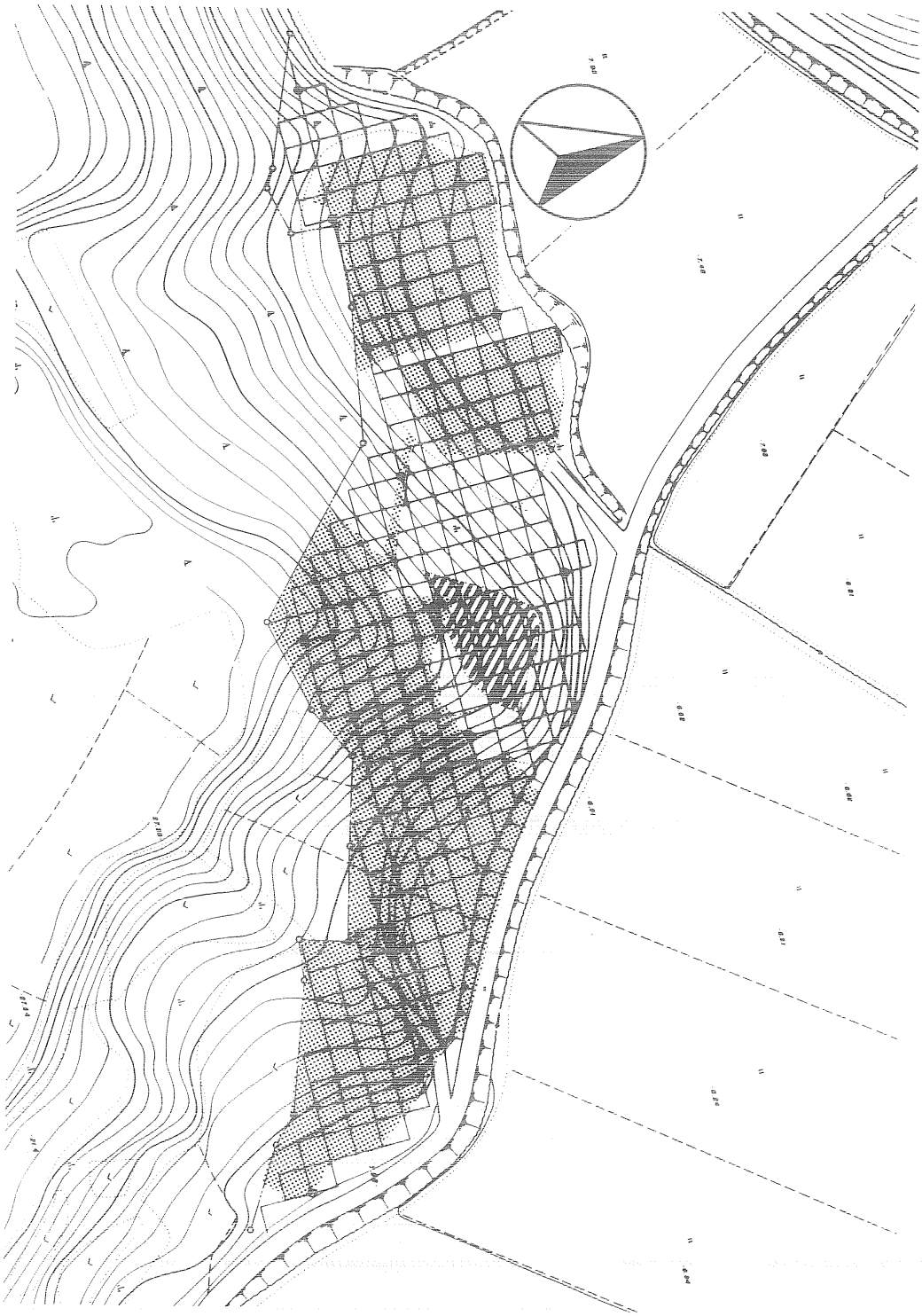
第２節　周辺の遺跡

館の上館遺跡の周辺には、琴丘能代道路建設工事に伴って発掘調査された遺跡を含め、いくつかの遺跡の存在が知られている。

旧石器時代の遺跡としては館の上館遺跡の北北西2.2kmの地点に鴨子台遺跡がある。ナイフ形石器を主とする石器群4ブロックと両面調整石器、周縁加工掻器からなる石器群1ブロックが確認されている。縄文時代の遺跡では約1.7km北西に萱刈沢貝塚、萱刈沢Ⅰ遺跡、萱刈沢Ⅱ遺跡がある。萱刈沢貝塚は縄文時代中期の円筒上層ｂ式、ｃ式を中心とする貝塚で、竪穴住居址やフラスコ状土坑中に堆積したヤマトシジミを主体とする貝層中から、成人女性および性別不明の青年人骨の他、犬の埋葬骨も出土している。萱刈沢Ⅰ遺跡、同Ⅱ遺跡は萱刈沢貝塚の東に隣接する遺跡で、前者では縄文時代後期前葉の土器捨場、後者では前期から中期にかけての竪穴住居址、フラスコ状土坑が確認されている。平安時代の遺跡としては本遺跡の北４kmに竪穴住居址16軒を確認した福田遺跡がある。



第１図　館の上館遺跡の位置と周近遺跡



第２図　調査区全体図（縮尺1/1000）

調査範囲図

耕地造成のため削平された範囲

第３章　発掘調査の概要

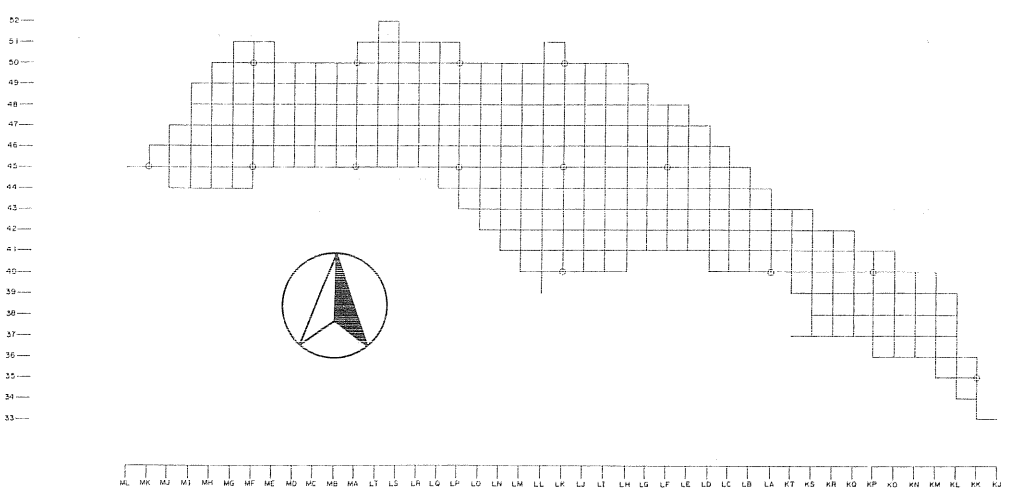
第１節　遺跡の概観

館の上館遺跡は成合台地の南端部分を空堀によって区切った４つ郭面(第４図第Ⅰ郭～第Ⅳ郭)からなる。現在確認できる空堀は３箇所にあり、そのうち、第Ⅰ郭と第Ⅲ郭の間、第Ⅱ郭と第Ⅲ郭の間の空堀は現状での基底幅７～８ｍ、郭面からの深さ３ｍ前後の大規模なものである。対して第Ⅳ郭を区切る空堀は上面での幅が２ｍ前後、深さ１ｍの溝状の堀込みが２本並列し、その間が土塁状の高まりを見せる小規模なもので、他の空堀とは構築時期に差があるように見られる。

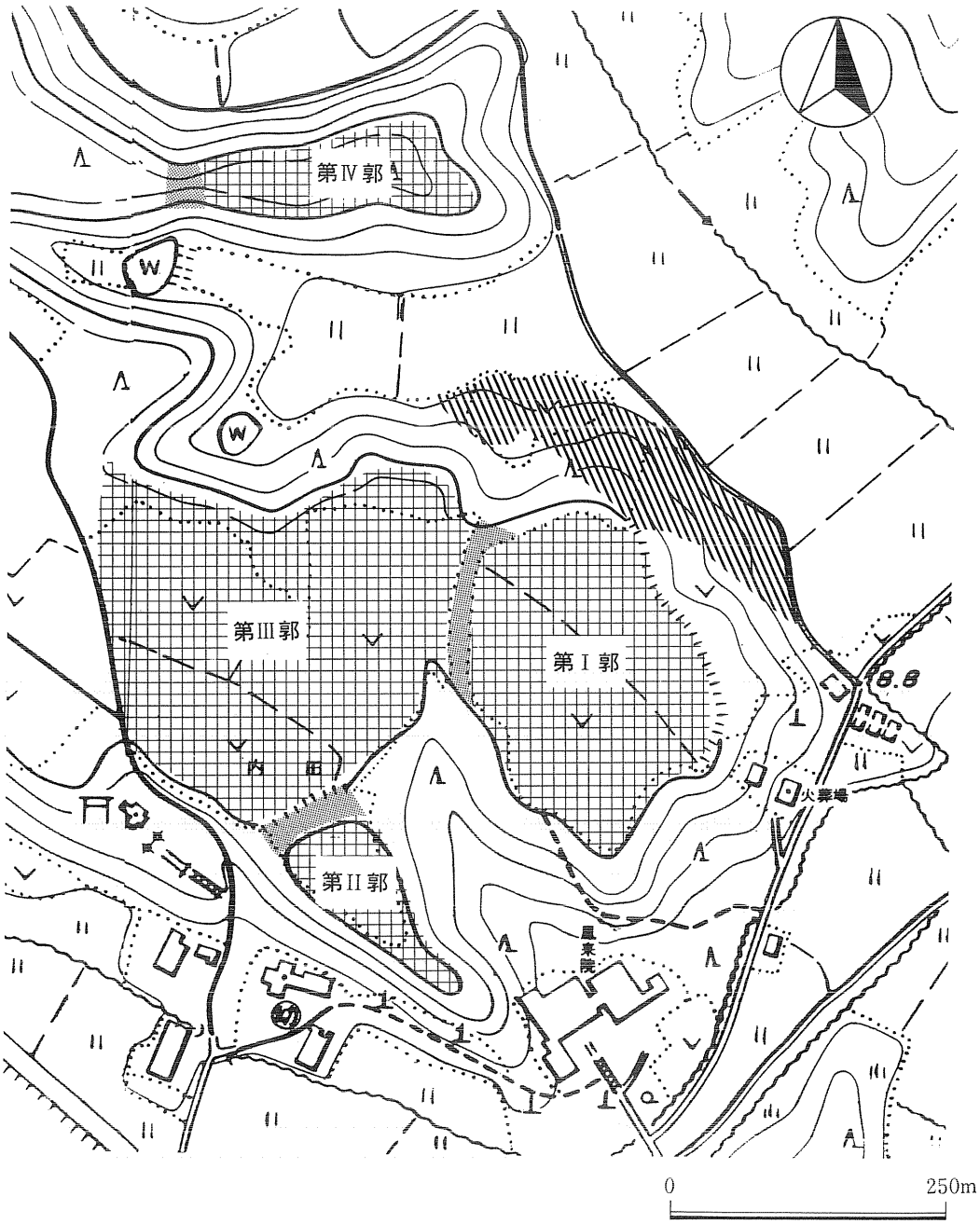
今回調査の対象となったのは第Ⅰ郭の北東側の平坦面、および斜面、斜面下の平坦部である。

第Ⅰ郭の周囲北側から東側にかけては現在畑と山林に利用されており、中世城館の周辺施設としての地形を確認できる部分は殆どないのであるが、今回調査にかかった北東側の平坦面はほぼ同じ高さで第Ⅰ郭と第Ⅲ郭の間の空堀に連続しており、第Ⅰ郭帯郭の唯一の遺存箇所である。調査の結果、この帯郭平坦面上に時期を違えて構築された６条の溝と、１基の地下式土坑が確認された。

遺跡の層位は、帯郭上面、その南東側および北西側斜面、斜面下の平坦面で異なるが、南東側斜面でみると、Ⅰ層；耕作土（盛土を含む）、Ⅱ層；褐色砂質土、Ⅲ層；暗オリーブ褐色シルト質土、Ⅳ層；黒褐色シルト～粘土、Ⅴ層；黒褐色粘土、Ⅵ層；オリーブ黒色粘土の層順がたどれる。帯郭南東側斜面での出土遺物はすべて郭上面からの転落遺物、あるいは郭面造成に伴っての削土とともに斜面下に流入したものであるが、中世陶器類はⅣ層中から、縄文時代後続期の土器はⅤ層中から出土している。



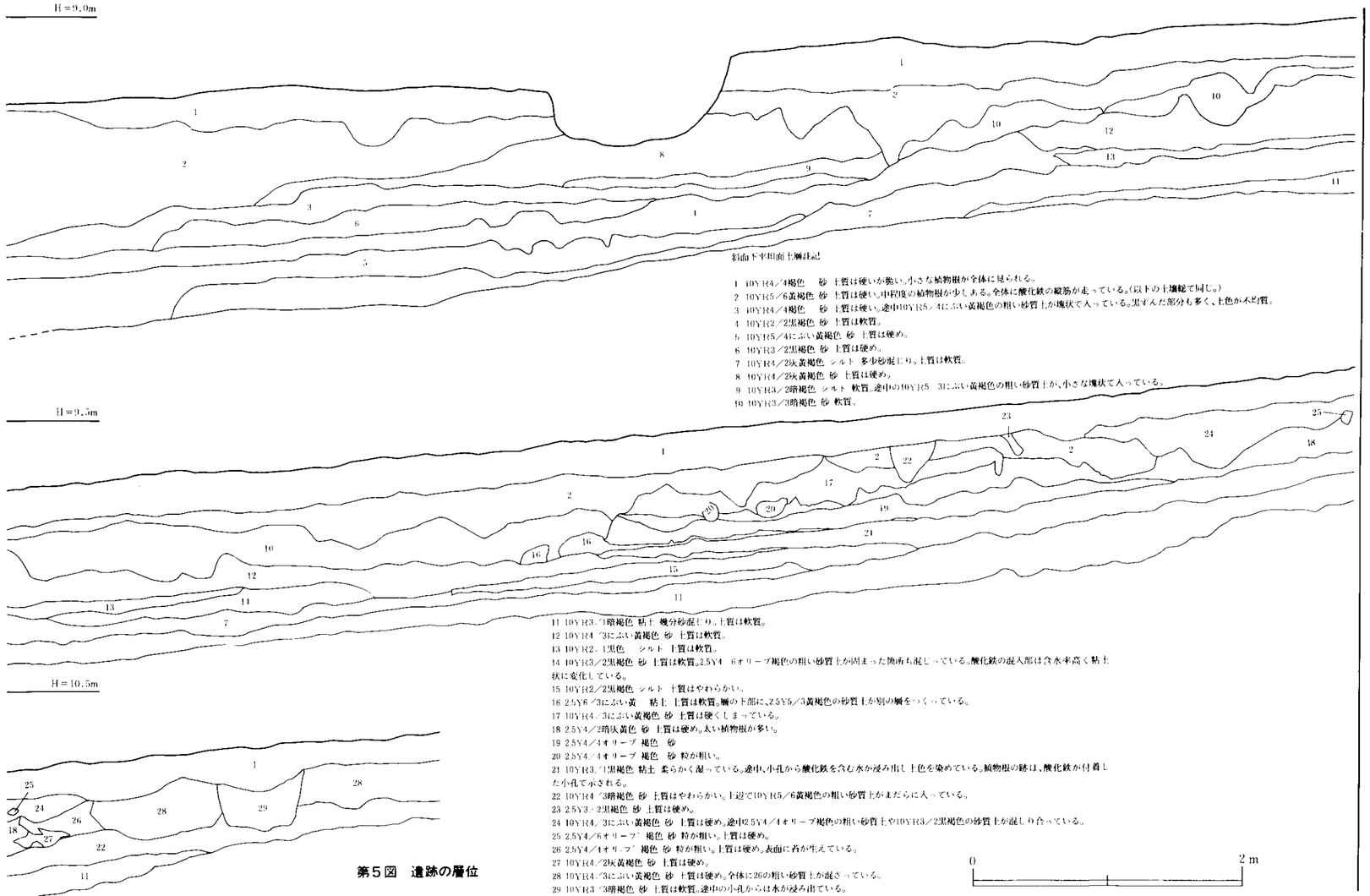
第３図　グリッド配置図



第４図　館の上遺跡郭面配置図

郭面　　空堀

今回の調査区



第5図　遺跡の層位

標高（m）	層名	層相記載
16.0	I	褐色砂質土。耕作土。I'層に漸移する。
	I'	褐色砂質土。旧耕作土。耕地造成のための盛り土。
15.0	II	褐色砂質土。酸化鉄の沈着層が下部に凝集し、この部分では赤褐色を呈する。また、部分によっては黒色を呈するが、基本的にはI、I'層同様の砂質土が主体である。
	III	暗オリーブ褐色シルト質土。砂質土を主体として粘土が混じるが、両者の混和状態は均質であり、ブロック化しての混入状態は観察されない。
	IV	黒褐色シルト～粘土。黄緑色砂質土ブロック（径10mm前後）、黄褐色粘質土（径10mm前後）を多く含む。中世陶器（珠洲系）はこの層中に含まれる。下部では砂質土ブロックは含まれず、黄褐色粘質土が細かな粒となって混じる。
14.0	V	黒褐色粘土。黄褐色土粒、微細な木炭粒を含むが全体に均質でしまっている。縄文時代晩期直後の土器片、石器片が多く含まれる層。植物遺在体も多く含まれる。
13.0	VI	オリーブ黒色粘土。保水性の強いグライ化した粘土。遺物は、殆ど含まれていない。

第２節　調査の方法

調査は調査区全域にかかるように４ｍの碁盤状の格子を組むグリッド方式によった。すなわち、調査区内に定めた基準点（路線中心杭NO.135）から座標北方向に設定された基準線と、それに直交する東西方向の基準線を二次元の座標軸のそれぞれとして両軸に４ｍ毎に刻みを設け、その刻みを通る直線の交点に打設した杭によって４ｍ四方の区画を設定した。東西、南北両基準線に設けられる刻みには、西から東に向かってＬＲ・ＬＳ・ＬＴ・ＭＡ・ＭＢ…→ＭＴ・ＮＡ・ＮＢ…→ＮＥと２文字のアルファベットと、南から北に向かって07→59と昇順する２桁の数字を振り当てて、グリッド四隅の交点にあてられるこのアルファベットと算用数字の組み合わせのうち、南東隅のものを各グリッドの呼称名とした。

粗掘り作業はこのグリッド毎に行ったが、調査区外に排土を搬出することができなかったため、北西側斜面下および南西側斜面下の平坦面の調査をおこなった後、帯郭上面の調査をおこなって既調査部分での排土処理をおこなった。

遺構は検出順に通し番号を付し、遺構種別を表すアルファベットとの組み合わせで呼称している。検出した遺構については覆土観察用のベルトを残して掘り進んでいる。遺構記録は主に実測図作成と写真撮影によっておこない、平面および土層断面を記録した。平面作図は方眼杭を用いた簡易遣り方測量でおこなっている。写真は、遺構検出時の確認状況、断面形の覆土堆積状態、遺物出土状況、完掘状態というように精査の段階毎に撮影をおこなっている。フィルムは基本的に35㎜のモノクロとリバーサルフィルムを用い、随時ネガカラーフィルムでの撮影も加えた。また、遺跡遠景撮影にはブロニー版フィルムも用いている。

遺物は、遺構内外出土遺物の全点の出土位置を簡易遣り方測量で計測することとし、取り上げ順の通し番号で遺物取り上げ台帳に記録した。記載項目は１.遺物番号、２.出土グリッド、３.出土層位(出土遺構)、４.Ｘ座標、５.Ｙ座標、６.Ｚ座標、７.種別、８.取り上げ月日、９.備考の9項目であり、うち、Ｘ座標はグリッド名を示す南東隅の座標から西への距離、Ｙ座標は同じく北への距離、Ｚ座標は標高を指す。また、遺物の取り上げに際しては、遺跡略号、遺物番号、出土グリッド(出土遺構)、出土層位、取り上げ年月日をラベルに記入している。

第３節　調査の経過

６月１日より調査を開始する。調査区の刈払い作業から開始し、遺跡遠景写真撮影などもおこなう。６月２日、北西側斜面下平坦面から粗掘作業に着手する。この区域南側の斜面に近い側では表土の厚さは薄く、10㎝前後で褐色の砂質土に到達する。表土中からは現代の鉄釘、砥石や、縄文施文土器の細片などが出土する。６月４日、北西側斜面下平坦面の北側、水田に近い部分では表土は30㎝前後あることが確認される。表土下の褐色砂質土まで耕作が及んでおり、その上面で

現代の遺物(ビニール片等)が出土しているほか、須恵器片も少量出土する。６月５日、表土下の褐色砂質土面は南から北に向かって比高１ｍ前後で傾斜していることが確認される。また、この褐色砂質土面で円形の土坑状のプランや、灰白色粘土の広がりなどが確認されるが、これらはいずれも現代の耕作による攪乱痕跡であることが後日確認される。また、褐色砂質土上面から文久永宝、擂鉢片など、近世の遺物が出土する。６月15日、木目列点文、刷毛目痕、３条以上の平行沈線文のある土器が北西側斜面下平坦面で出土する。６月19日、基盤層と思われていた褐色砂質土中から土師器片や縄文施文の土器片、石器片が出土し、この地点での包含層の成因が第Ｉ郭郭面造成時の排土流入であることが明らかになり、さらに掘り下げられることが確認された。６月25日、北西側斜面下平坦面での基盤層(青灰色粘土層)までの掘り下げを、ほぼ全域にわたって終え、６月26日、調査区を南東側斜面下へ移動する。７月２日、南東側斜面下の南端で表土下１ｍ前後の箇所で青磁酒海壺が出土する。さらに、７月６日にはLB40区で珠洲系擂鉢片、LB39区で壺の破片が出土する。７月13日、南東側斜面下の平坦面を掘り始める。珠洲系擂鉢片が出土する。７月15日、一部の作業員を帯郭上面に移動し、その部分での粗堀作業を開始する。７月20日、南東側斜面下平坦面での基盤層上面も北西側斜面下平坦面の基盤層と同じく、北側水田に近い部分では表土から１ｍ前後の深さがあり、郭面からの斜面が緩くなりながら続いていることが確認された。７月24日、南東側斜面上のLE41区を中心にした部分で、表土下２ｍに黒褐色粘土層が検出され、比較的まとまった量の縄文施文の甕形土器、浅鉢形土器、壺形土器の破片が出土する。８月６日、南東側斜面および斜面下での調査をほぼ終える。この区域でも北西側斜面下と同様に遺構の検出はなく、また、中世城館の付帯施設の確認もおこなえなかった。８月７日、帯郭上面の表土をほぼ全面にわたって30～40㎝ほど除く作業をほぼ終える。残存する帯郭の先端部分では表土下に堅くしまった砂層(潟西層)が確認されているが、第Ｉ郭本郭に近い側は全体に幾分軟質で木炭等が混じった土である。休暇明けに帯郭上面を横断する形で基盤層確認のためのトレンチをいれることとする。８月17日、帯郭上面を横断するようにほぼ東西に土層観察用のトレンチをいれる。トレンチには潟西層を大きく掘り込んだ断面が現れ、第Ｉ郭本郭に近い帯郭上面を大きく窪ませるような遺構存在が確認される。８月18日、帯郭上面の土層観察用トレンチから南側をボーリング棒によって探る。探査の結果、基盤層が帯状にうねることを確認し、数条の溝状の遺構であることが予測される。８月19日、土層観察用トレンチから南側をトレンチに直交する形でのベルトを残して掘り始める。調査中に青磁碗片、銭貨が出土する。８月26日、帯郭上面の溝跡をほぼ掘り上げ、６条の溝跡が重複してあったことを確認する。８月27日、溝跡の西側延長部、斜面に向かって曲折した部分で、溝跡を覆っていたのと同様のやや軟質の砂質土に覆われた土坑を確認し、掘り上げる。８月31日、帯郭上面の溝跡、土坑の実測図作成作業を始め、９月５日までに作図作業を終える。９月７日、遺跡遠景写真を撮影して調査を終える。

第４章　調査の記録

今回の調査で出土した遺物の帰属時期には大きく分けて、縄文時代に後続する時期、平安時代を中心とした古代、中世、近世の四つの時期がある。調査区内でのそれらの分布をみると、ある範囲をもって遍在する傾向が認められるものの、その出土位置に本来的位置が示されるというものではなく、それらは基本的に郭面からの転落遺物と考えられる。ことに中世以前の遺物については、後節の遺構に記すように、大規模な郭面の造成および作り替えの継続した営為の結果、排土とともに流下したものが相当に上るものと考えられる。

第１節　縄文時代後続期の遺物

（１）土器

その特徴から縄文時代後続期としうる土器は、館の上館遺跡第Ｉ郭帯郭の東西両肩部分、すなわちLE41区を中心にした南東側斜面中腹と、LN42区を中心とした北西側斜面上部、および北西斜面下平坦面のいっかくLR50区を中心とした区域、南東側斜面下平坦面いっかくのKS42区を中心とした区域の、４箇所で出土している。出土した土器には浅鉢、鉢、壺、蓋、甕があるが、器種によって遍在する傾向はない。また、出土土器はごく大まかに縄文時代直後の時期と天王山式期に分けられるが、これらの間でも分布上の際だった差はなく、量的に少ない天王山式期の土器をみても調査区内に散在し、集中する傾向は認められない。

浅鉢形土器（第６図１～第７図22）

浅鉢形土器には波状口縁のもの(1～4, 8～10, 19)と平縁のもの(5～7, 11, 12, 20, 22)がある。前者は口縁～体部が外反する傾向にあり口縁部と体部とで屈曲する(1～4, 19)。後者は内彎しながら立ち上がり、屈曲をもたない(5, 11, 12, 20, 22)。体部には変形工字文(4, 5, 8, 9, 13, 21)、鋸歯状沈線文(6, 7)および平行沈線文(10～12, 14～16, 18)、磨消縄文(19, 20)が施される。細い描線で変形工字文、平行沈線を施す土器には器面調整に刷毛目を用いるもの(8, 9, 14, 15, 18)も含まれ、壺形土器に特徴的な短沈線列を加える例(15, 16)もある。また磨消縄文を施す土器(19, 20)に関連して、文様帯の下限を縦位の短沈線を満たした帯状文によって画する土器(17)もある。他に全面を刷毛目で覆った土器(22)がある。

鉢形土器（第８図23～第９図41）

鉢形土器には口縁以下体部まで直線的に下りるもの(23～27, 34)、口縁上端が屈曲外傾して(28～33)体部上半に膨らみをもつもの(28～33, 35～40)がある。前者は平縁であるが(23)、後者には波状口縁のもの(28)も含まれる。体部の文様は変形工字文(23～25, 29, 34, 36～40)と、

平行沈線を基本とし(28, 30～33)反転させて連結するもの(31, 32)がある。浅鉢形土器と異なり、刷毛目調整を施すものはない。

甕形土器（第9図42～第13図98, 第17図145～152）

甕形土器には縄文時代直後の時期におかれるもの(42～98)と、交互刺突文(152)を特徴とする天王山式期におかれるもの(145～152)とがある。

縄文時代直後の甕形土器には広口壺形土器と中間的な形態を示すもの(42～47)、口縁部と体部の間に直立する頸部をもつもの(49, 50, 60)、口縁部が外反外傾し体部がその上半で膨らむもの(51～59, 61～78, 83)、口縁がごく短く外傾するもの(79～81, 84)、口縁の内傾するもの(82)がある。口縁の形状は平縁のものが圧倒的に多いが、広口壺と中間的な形態を示すもの(42～43, 46, 47)や、口縁全面を縄文施文とするもの(48)、直立する頸部をもつもの(49)に波状口縁のものがある。口唇部は縄文が施文されたり(60, 64～67, 70)、刷毛目工具の圧痕列(61, 84)、刻目列(69, 83)が施されたりするが、口縁部に縦位の刷毛目を施すものは(51～59)、口縁上端外面に縄文を施文するものがあるものの、口唇部断面は丸みを帯びるか、薄手につくられるかしており、基本的にその上面への施文はない。体部はLR縄文を横位回転施文するものが大半であるが、斜位の刷毛目調整を縄文施文前に加えたものもあり、縄文を欠く場合(83, 84)もある。

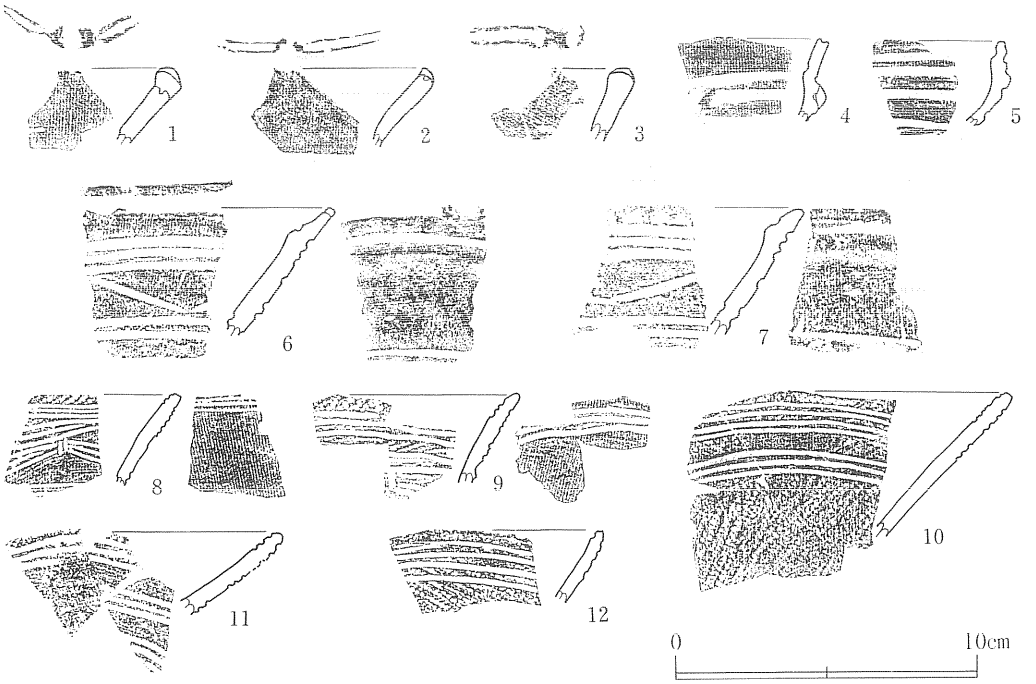
天王山式期におかれる甕形土器は内彎外傾する口縁をもち、口縁部文様帯、頸部文様帯、体部文様帯の3つの文様帯をもつことが特徴である(145, 152)。口縁部文様帯には縄文地に1～2条の沈線によって上向きの連弧文(145, 146)や、波状文(152, 153)が施され、頸部にも同じく縄文地に2条の沈線で弧線文を用いた文様(145, 147～150)や、同じく弧線文を組み合わせた磨消縄文(151～152)が描かれる。体部は2～3条の上向きの連弧文(145, 152)が施される。

壺形土器（第13図99～第16図141）

壺形土器は口頸部の外反外傾する広口のもの(99～108)、口縁部の短く直立するもの(128)、無頸のもの(129)、頸部で狭まるもの(141)がある。広口壺は全て口頸部が無文であり、頸部と体部の間の屈曲部には平行沈線および刷毛目工具の連続圧痕文(木目列点文)を施すものが多い。体上半部は刷毛目調整を施した後に体下半との間に2～4条単位の平行沈線を巡らし、縦位区画沈線を加えるなどした後にミガキ調整を施すものや、全面縄文を施文するもの、また全面ミガキ調整で無文となるものなどがある。平行沈線には刷毛目工具の連続圧痕文が施される場合があるが、これに代わって、棒状工具による連続刺突列を3段に施すもの(124～126)もある。

蓋（第16図142～144）

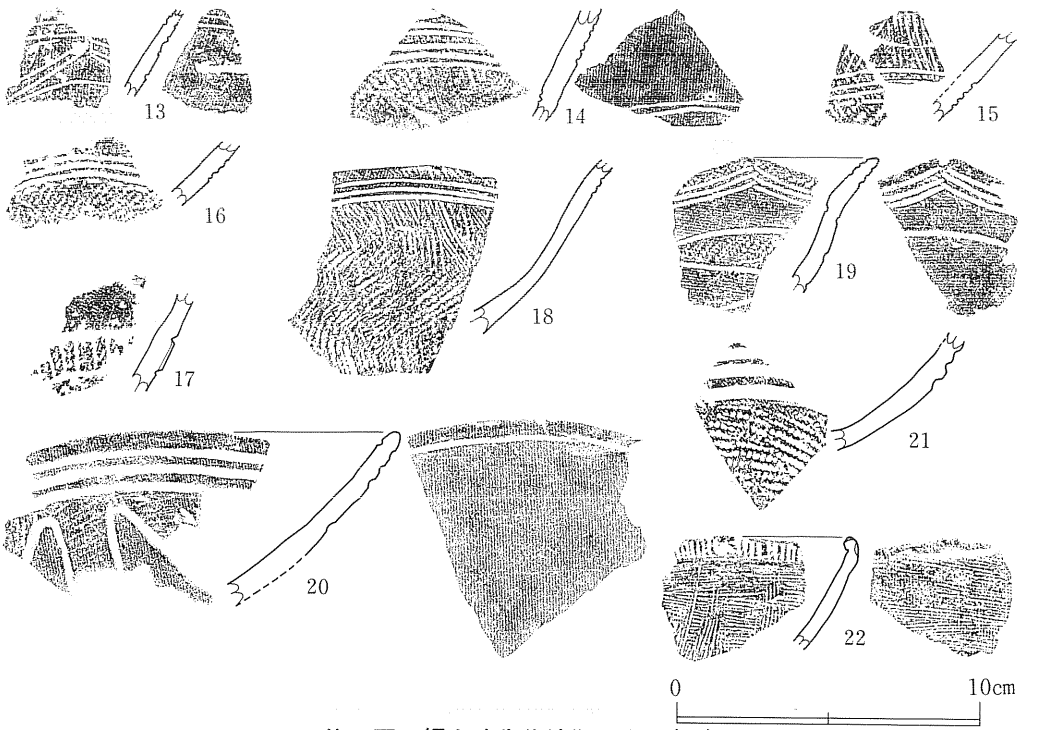
傘形となるもの(142)、台形となるもの(143, 144)がある。台形のものではその上面および側面に平行沈線による文様を施している。



第６図　縄文時代後続期の土器（１）

第１表　縄文時代後続期の土器観察表（１）

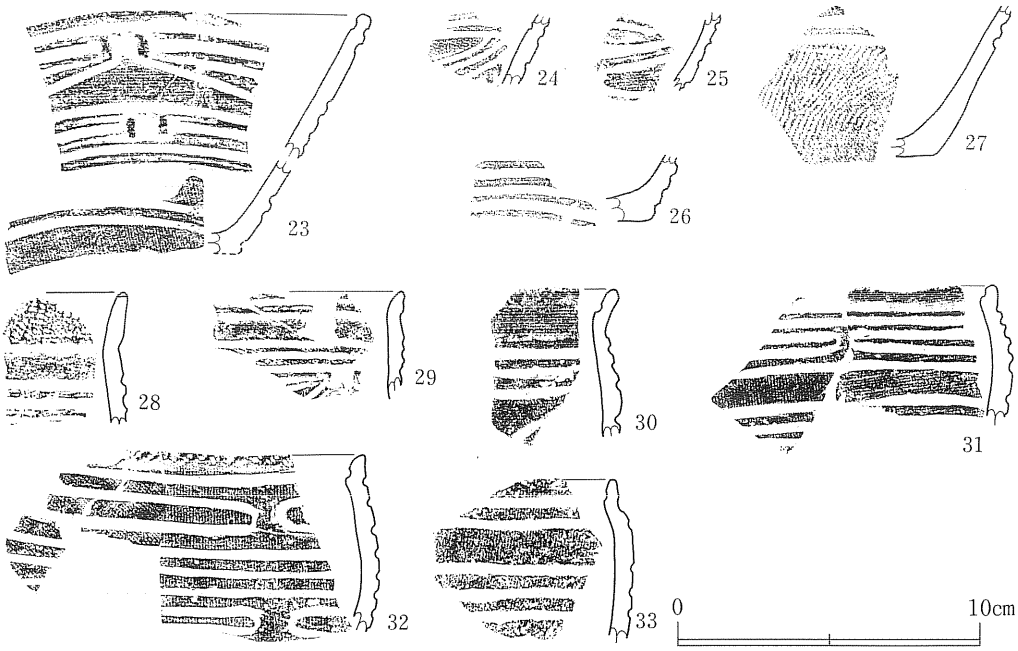
番号	出土区	器厚	器形	部位	表　面	内　面	形制上の特徴	口唇部施紋
1	LN42	6	浅鉢	口	横位のミガキによって、平滑に仕上げられている。ミガキの単位は不明。	表面同様に横位のミガキによって平滑に仕上げられている。口縁下に沈線１条がめぐる。	頂部が二又に分かれた瘤状突起となる波状口縁の浅鉢形土器。縁端部は、体部の傾斜によっては台付浅鉢となる可能性もある。口縁はごく僅かに外反し、頂部の瘤は側に張り出す。	波頂部瘤の両脇から沈線がのびる。
2	LM42	5.5	浅鉢	口	横位のミガキによって平滑に仕上げられている。口縁上端はその形に従ってミガキの方向を変えている。破片底辺の直線部は口縁下に水平にめぐる沈線のあることを示す。	表面同様、横位のミガキによって平滑に仕上げられている。ミガキの単位は幅１～４㎜。口縁下に表面の沈線に対応して沈線がめぐるらしい。	頂部が二又に分かれる波状口縁の浅鉢。１と同様、台付浅鉢となる可能性もある。口縁はごく僅かに外反する。内面の下端部のカーブから、口縁下で屈曲する可能性がある。頂部は口縁下よりやや厚くはなるものの、瘤を作らない。	頂部両脇より沈線が１条づつのびる。
3	LN42	8	浅鉢	口	横位のミガキによって平滑に仕上げられている。	剥落・摩滅し不鮮明であるが、ミガキあるいはナデが施されている。	頂部に二又に分かれた瘤をもつ波状口縁の浅鉢。１と同様、台付浅鉢となる可能性もある。瘤は内側に張り出す。	頂部脇より沈線が１条のびる。
4	LD42	5.5	浅鉢	口	変形工字文を描く沈線の描画後に横位のミガキを施して平滑に仕上げている。変形工文字は口縁波頂部の下に二個一対の粘土瘤を貼り付けたものであり、その瘤の一方が残存している。	外面の変形工字文上限の沈線よりやや上位にあたる位置に沈線１条がめぐる。沈線描画後横位のミガキによって平滑に仕上げられている。	波頂部におそらく１～３と同様の瘤状突起をもつ波状口縁の浅鉢であり、台付となる可能性もある。口縁は外側に開くが、体部との境で屈曲し、変形工字文の施される部位は外側に膨らんでいる。	波頂部は欠失しているがそこからのびる沈線１条が現存部分に認められる。
5	LR50	5.5	浅鉢	口	口縁下に２条の平行沈線を巡らし、さらにその下にも３条の沈線が施されている。口縁から体部にかけての屈曲部位、２条目、３条目の沈線の間が突出する。３条目以下の沈線は変形工字文を構成する。沈線描画後横位のナデで平滑に仕上げられている。	口縁直下に沈線１条がめぐる。沈線描画後、横位のナデによって平滑に仕上げられる。	口縁がほぼ直立し、体部は斜めに降りる浅鉢。口唇部は小さく丸まる。	なし。
6	LE41	6	浅鉢	口～体	口縁下に３条、体部半ばに２条の平行沈線が巡り、その間を鋸歯状に１条の沈線が連続して描かれる。沈線描画後ナデ調整。	口縁は外側にそがれるように作られ、口縁下に１段、段差が設けられる。口縁直下１条、体部半ばの部位（表面側の２条沈線に対応する位置）に１条の沈線が巡る。沈線描画後ナデ調整。	口縁から体部まで外傾して下りる浅鉢形土器。	口唇部にＢ突起が付される。
7	LE41	6	浅鉢	口～体	※６と同一個体			
8	LO42	5	浅鉢	口	口縁上端にはLR縄紋を横位回転施文、その下は横位の刷毛目調整を施す。その後、先端の細い工具で口縁直下に３条の平行沈線を描き、その下にも３条を単位として変形工字文を描した斜線を描く。変形工字文の結節部は窠位の２列の刻みを加える。沈線描画後横位のミガキ調整を施す。	口縁直下に３条の平行沈線が施され、沈線描画後横位のミガキ調整が施される。	変形工字文の描かれる口縁部の文様帯はおそらく屈曲外傾し、体部はやや膨らみをもちながら下りる浅鉢形土器となろう。口縁は緩い波状を呈するものと思われる。	なし。
9	LS49	5	浅鉢	口	口縁上端はLR縄紋を横位回転施文し、その下は横位の刷毛目調整を施す。口縁直下に３条、さらにその下に僅かに間隔をあけて２条の平行沈線を巡らし、その下には結節部に２列の刻みを加えた崩れた変形工字文を描くようである。沈線描画後横位のミガキ調整が施される。	口縁直下に３条の平行沈線を巡らす。沈線描画後横位のミガキ調整を施す。	口縁は緩い波状を呈し、口縁部が僅かに外反しながら立ち上がる浅鉢形土器。	なし。
10	LN42	4.5	浅鉢	口～体	LR縄紋横位回転施文後、口縁直下に４条、その下を擦り消して無文帯とし、さらに３条の平行沈線を巡らせている。	口縁下に３条の平行沈線を巡らし、沈線施文後横位のナデ調整を施す。	口縁から体部まで直線的に下りる浅鉢形土器。口縁は緩い波状を呈し、波頂部は浅く二又に分かれる。	なし。
11	LS51	5	浅鉢	口～体	口縁直下に３条、その下にやや間隔をおいて３条の平行沈線が描かれる。さらにその下にも３条の沈線が見られるが、これは波状文となろう。沈線描画後横位のナデ調整が施される。沈線間に彩色された痕跡が残る。	口縁直下に３条の平行沈線が巡る。沈線描画後ナデ調整によって平滑に仕上げられる。	ごく僅かに内彎しながら外傾して立ち上がる浅鉢形土器。口縁は平縁となる。	なし。
12	LO42	5	浅鉢	口	RL縄紋を横位回転施文後、口縁直下にごく浅い４条の平行沈線を巡らす。	口縁直下に１条の浅い沈線を巡らし、その後にナデ調整を施す。	僅かに内彎しながら外傾して立ち上がる浅鉢形土器。口縁は平縁となる。	なし。



第７図　縄文時代後続期の土器（２）

第２表　縄文時代後続期の土器観察表（２）

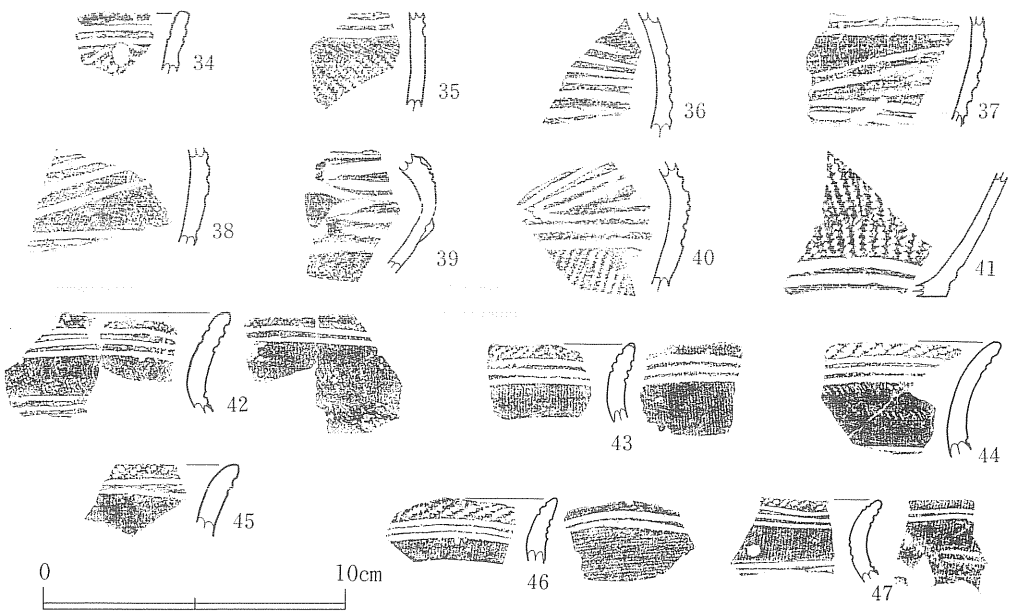
番号	出土区	器厚	器形	部位	表　面	内　面	形制上の特徴	口唇部施紋
13	LN42	5	浅鉢	体	口縁上端を欠く破片である。細かい縦位の刷毛目調整の後、口縁下に浅い２条の平行沈線を施し、さらにその下に２～３条の沈線で変形工字文を描く。沈線描画後にナデ調整が施される。	口縁下に２条の浅い平行沈線が巡る。沈線施文後ナデ調整が施される。	直線的な体部をもつ浅鉢形土器。	
14	LQ47	6	浅鉢	体	斜位に交差させて刷毛目調整を施しLR縄紋を横位回転施文した後、体部上半に施文された５条の平行沈線が観察される。	体下部に細い２条の平行沈線を巡らし、沈線施文後ミガキ調整によって平滑に仕上げられる。	体部半ばまでは直線的に外傾し、体下部で膨らみながら下りる浅鉢形土器。	
15	LN42	5.5	浅鉢	体	体上部は縦位の刷毛目調整、体下部はLR縄紋を横位回転施文した後、体上部の文様帯には３条単位の沈線を鋸歯状に施し、文様帯の下限は３条の平行沈線で画す。さにその下には10mm程の短沈線列を添わせる。	剥落しているが、横位の刷毛目調整が認められる。	直線的な体部をもつ浅鉢形土器。	
16	LN41	5.5	浅鉢	体	体下部にLR縄紋を横位回転施文後、体上部の文様帯下限に浅い３条の平行沈線を巡らし、さらにその下に６～７mmの短沈線列を添わせる。文様帯中は沈線施文後ナデ調整が施される。沈線間に塗彩痕跡が残る。	ミガキ調整によって平滑に仕上げられている。	わずかな膨らみをもつ浅鉢形土器の体部。	
17	LN41	7.5	浅鉢	体	RL縄紋を左上－右下方向で帯状に回転施文した後、その上下を先端の尖った工具で区画し、区画内に短沈線列を充填する。区画外はナデ調整によって平滑に仕上げられる。	一部剥落しているが、横位のナデ調整を施している。		
18	LE41	6	浅鉢	体	斜位の刷毛目調整を体上部の文様帯部分を中心として施した後、体下部にはLR縄紋を横位回転施文している。体上部の文様帯部分の下限は３条の平行沈線で画し、文様帯中の沈線１条も破断部分に認められる。文様帯部分は沈線描画後ミガキ調整が施される。体下部縄紋施文部分に塗彩痕跡が残される。	ミガキ調整によって平滑に仕上げられる。	体上部文様帯部分より上は直線的に外傾し、体下部から底部にかけて膨らみをもって下りる浅鉢形土器体部破片。	
19	KS42	6	浅鉢	口～体	口縁上端および体上部にLR縄紋を横位回転施文した後、口縁に沿って３条の沈線を巡らし、体上部の縄紋を開んでの沈線を描いて磨消縄紋を施す。口縁下の沈線と体部文様の間ならびに体部磨消縄紋の間は、ミガキ調整によって平滑に仕上げられる。	口縁に沿って３条の平行沈線が巡り、口縁と体部の境にあたる位置にも水平の沈線１条が巡る。	口縁が外反して立ち上がり、体部が膨らんで下りる浅鉢形土器。口縁は波状を呈し、波頂部は小さく二叉に分かれる。	なし。
20	LR50	7	浅鉢	口～体	細かなLR縄紋をごく浅く体部文様のモチーフに沿って回転施文した後、口縁上端に３条の平行沈線を、体部には左右対象となるモチーフで沈線文が描かれる。口縁上端およびモチーフ内は沈線施文後にミガキ調整が施されて平滑に仕上げられる。	口縁直下に１条の沈線が巡り、体部はミガキ調整によって平滑に仕上げられる。	やや膨らみをもって下りる平縁の浅鉢形土器。	なし。
21	LN42	8	浅鉢	体	体部ほぼ中央を３条の平行沈線が巡る。沈線下はRL縄紋を右上－左下の方向で回転施文し横走縄紋を施文している。縄紋施文部分には塗彩痕跡が残る。	横位あるいは斜位のミガキ調整。	体部が湾曲しながら降りる浅鉢形土器。台の付く可能性もある。	
22	LF41	5	浅鉢	口	口縁上端に縦位の刻目列を施し、うち一部小突起状に粘土を貼り付けた部分では下からの抉り込みが施される。この刻目列の直下から体部にかけては横位の刷毛目調整を施した後、その方向を縦位にかえて調整している。	口縁の一部に粘土貼り付けの捲れ返りがある。体部は全面横位の刷毛目調整が施される。	口縁上端は外そげ気味に作られ、体部はやや膨らみをもって下りる浅鉢形土器。	なし。



第８図　縄文時代後続期の土器（３）

第３表　縄文時代後続期の土器観察表（３）

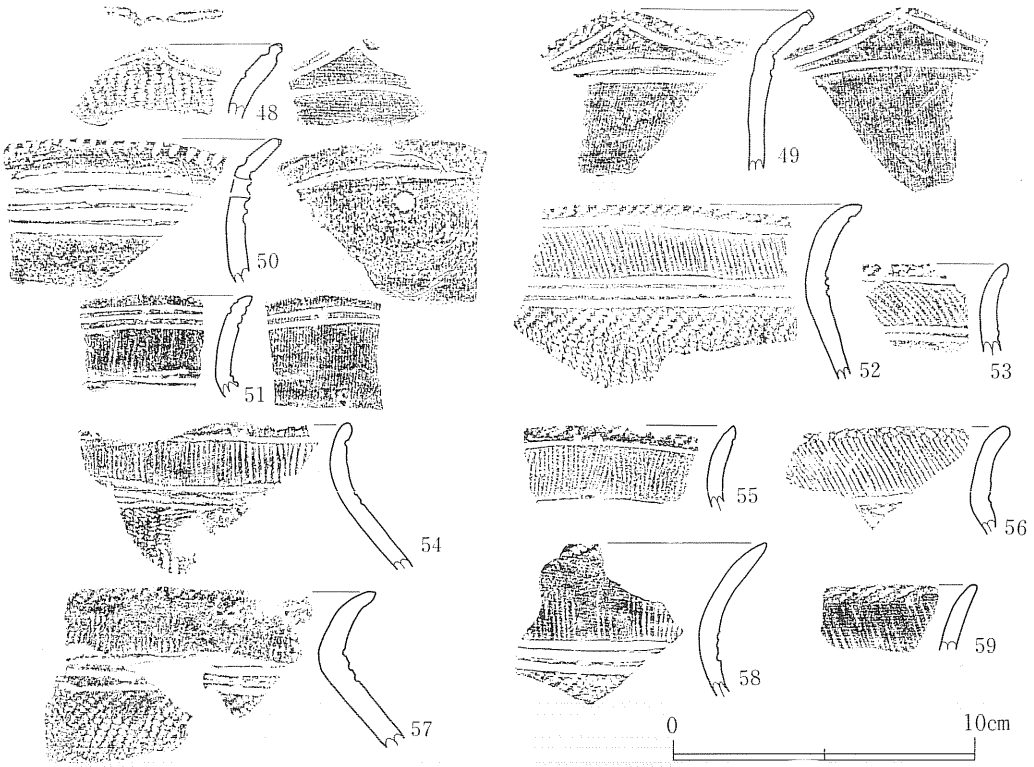
番号	出土区	器厚	器形	部位	表面	内面	形制上の特徴	口唇部施紋
23	KS42	6	鉢	□~底	断面が半円形となる沈線によって変形工字文が描かれる。沈線の描画後に横位のミガキ調整が施されて器面は平滑に仕上げられ、変形工字文の結節部には一対の粘土瘤を貼り付けている。粘土瘤間は下から抉り込まれている。底部周縁にも１条の沈線が巡り、その上にも２条の平行沈線が巡る。	口縁直下に１条の沈線を巡らせ、沈線施文後、横位のミガキ調整が施されている。	口縁から底部まで直線的に下りる鉢。	口唇部への施文はないが、ミガキが施されて断面形は丸く仕上げられる。
24	LN42	5	鉢	体	３条の沈線を単位として変形工字文が描かれる。口縁部と体部の境の屈曲部に３条の平行沈線を巡らし、同じく３条の斜行する沈線を下ろしている。沈線施文後に横位のミガキ調整。	口縁部と体部の屈曲部の境に１条の沈線を巡らしている。沈線施部後に横位のミガキ調整。	口縁と体部の境で屈曲し、屈曲部より上は外傾しながら立ち上がる。体下半部は僅かに内彎するようである。	
25	LN42	5	鉢	体	平行する２条の沈線によって変形工字文が描かれる。変形工字文は沈線を反転させて描いており、斜行する部分ではさらに１条の沈線を添わせている。	横位のナデ調整。	体部の僅かに内彎する浅鉢。	
26	LN42	6	鉢	底	おそらくは一部で結節部を作り、工字文となる４条の沈線が描かれている。沈線の描画後に丹念なミガキ調整が底面まで施され、平滑に仕上げられている。	横位のミガキ調整を施して平滑にしている。	底部から口縁まで、屈曲、彎曲をもたずに直線的に開く浅鉢形土器。	
27	不明	7.5	鉢	体	体部上半に沈線２条が観察され、この部分で工字文が作られると判断される。沈線間は施文後にミガキ調整が施される。体部下半は細かなLR縄紋が横位回転施文される。	ナデあるいはミガキ調整が施されるものと判断されるが、表面磨耗のため判然としない。	底部から体部下半が直線的に開く鉢形土器。体部上半あるいは口縁部近くで屈曲する可能性もある。	
28	LN42	6	鉢	口	口縁上部には下限を１条の沈線で画されたLR縄文が施文され、その下の幅広の無文帯を挟んでは３条の平行沈線が巡る。施文は縄紋→沈線描画→器面調整の順で進み、調整は横方向のミガキ調整が丹念に行われる。	横位のナデ調整。	口縁が屈曲外傾し、体部文様帯部分はごく僅かに膨らみながら下りる波状口縁鉢形土器。波頂部は二又に分かれるよう切れ目が入れられる。	なし。
29	LR49	5	鉢	□~体	口縁直下に２条の平行沈線を巡らせ、やや幅広い無文帯を挟んで４条の平行沈線を施文している。下位の沈線の３条目と４条目の間には粘土粒が貼り付けられて結節部が作られるが、そこから２条づつの斜線が下ろされる。結節部の間は下から抉られている。塗彩痕跡残る。	横位のナデ調整あるいはミガキ調整。	口縁上端が僅かに外反外傾し、文様帯部分が膨らみながら下りる鉢形土器。	なし。
30	MD45	5.5	鉢	□~体	口縁下にやや幅広い無文帯部分を挟んで３条の平行沈線が巡り、２条目と３条目にまたがった粘土粒貼付の結節部から斜線が下りて変形工字文を作る。沈線の描画後、沈線間は横位にミガキ調整が施されて平滑に仕上げられる。	口縁下に沈線１条を巡らした後、横位のミガキ調整。	口縁部が外反し体部上半の文様帯から膨らみながら下りる鉢形土器。	なし。
31	LN42	5.5	鉢	□~体	口縁下の文様帯に計６条の沈線が認められる。沈線は文様帯上部４条と下部２条に分かれ、うち上部２条目および３条目の沈線は反転して連続し変形工字文を作る。沈線間は描画後丹念に横位のミガキ調整が施されて平滑に仕上げられる。漆膜と思われる黒色の薄い塗膜が部分的に残る。	口唇部内側に１条の沈線が巡るほか、全体的に横位のミガキ調整が施されるが、磨耗していて残存状態は不良である。	口縁部が直立し、体部上半の文様帯部分が膨らむ鉢形土器。口唇内面に沈線が巡るため、その部分で屈曲する。	内面沈線。
32	KR42	5	鉢	□~体	口縁部下から８条の沈線による文様帯がある。沈線は２条目と３条目、７条目と８条目で反転連続し、変形工字文を作る。口縁部には浅くLR縄紋が施文され、文様帯中は沈線施文後に丹念に横位ミガキ調整が施されて平滑に仕上げられる。黒色の煤状膠着物が破片下部に認められる。	横位のミガキ調整によって平滑に仕上げられている。	口縁上端が僅かに外反りに短く立ち上がり、体部上半の文様帯が膨らむ鉢形土器。	内面沈線。
33	KS42	5	鉢	□~体	口縁下に２条、その下に幅広の無文帯を挟んで３条の平行沈線を巡らす。沈線施文後ミガキ調整が施されるが、胎土に比較的粗い砂粒を含むため、丹念なミガキ調整とはならず、やや粗めのナデ調整となる。	口縁内面に沈線が１条巡る。沈線施文後の調整は行われているようであるが、磨耗して胎土の砂粒が露出する。	口縁が内屈して短く垂直に立ち上がり、体部の文様帯部分はかすかに膨らみを帯びながらも直線的に下りる平縁の鉢形土器。	内面沈線。



第９図　縄文時代後続期の土器（４）

第４表　縄文時代後続期の土器観察表（４）

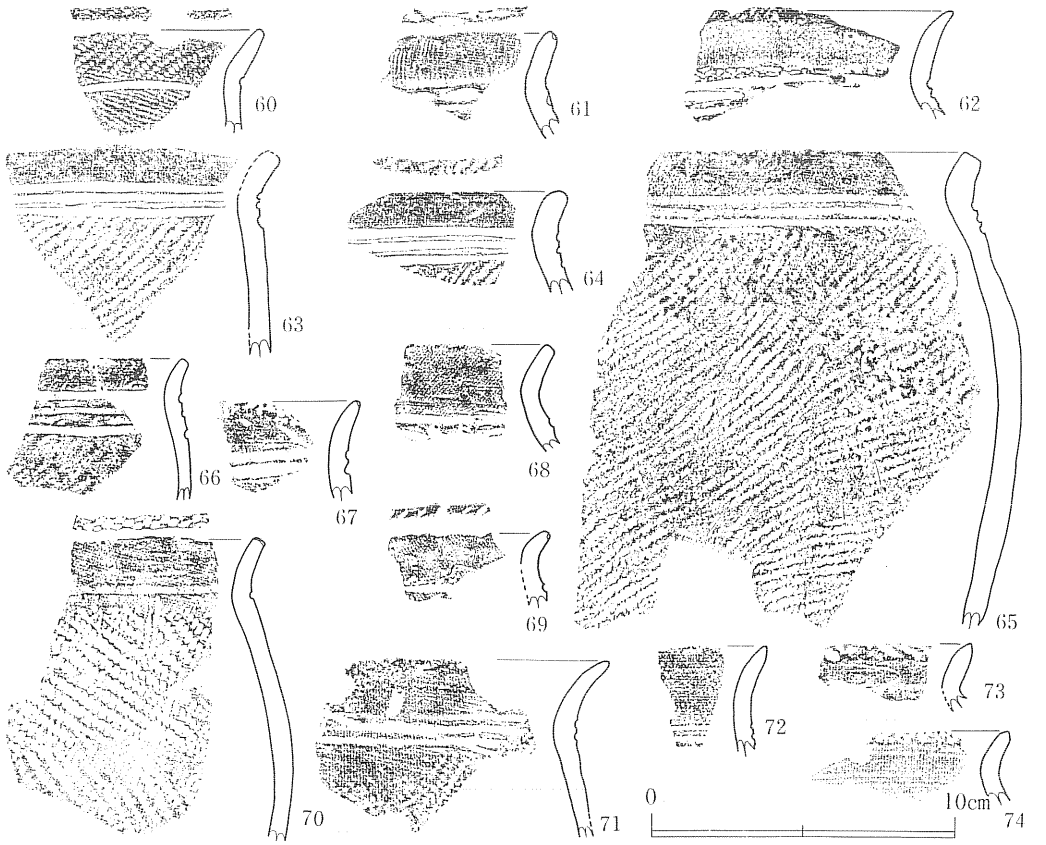
番号	出土区	器厚	器形	部位	表　　面	内　　面	形制上の特徴	口唇部施紋
34	LO42	6	鉢	口	口縁直下に２条の平行沈線が施され、その下に２条づつの沈線をハの字に描画した変形工字文が描かれる。沈線の結節部分には浅い抉り込みが施される。また、工字文の単位間には、口縁下の平行沈線に沿ってさらに１条づつの沈線が加えられるようである。沈線描画後の調整はない。	口縁下に２条の平行沈線が施される。沈線描画後僅かにナデ調整を施しているように見られる。	口縁が外傾しながら直線的に立ち上がる浅鉢。口唇部上端は直角に面取りされる。	なし。
35	LN41	5	鉢	体	体部上半の文様帯を３条の平行沈線が画し、文様帯の下はRL縄紋が横位回転施文される。縄紋施文→沈線施文→器面調整の順で施文され、一部縄紋もミガキ調整によって消されている。	横位のナデ調整。	体部が直線的に下りる鉢。	
36	LO42	5.5	鉢	体	浅い沈線によって変形工字文が描かれる。36の破片では上下平行線部とそれを連結する３条の斜線部分が認められる。沈線施文後、沈線間はナデ調整が施される。	横位あるいは斜位のナデ調整。	体部の膨らむ鉢形土器？文様帯部分が膨らむものか？	
37	LN43	5	鉢	体	※36と同一個体			
38	LN42	5.5	鉢	体	※36と同一個体			
39	KR42	5.5	鉢	体	上半に粘土瘤貼り付けによる結節部をもった変形工字文が施される。結節部は上下２段に対になって設けられる。	部分的に剥落するがミガキ調整が施される。	体部上半の文様帯部分で膨らみ、体部下半は直線的に下りる鉢形土器。	
40	LN42	5.5	鉢	体	体部上半の文様帯には４条づつの平行沈線によって変形工字文が描かれ、体部下半ではRL縄紋が左上－右下方向で回転施文されて縦走縄紋が施される。	横位のナデ調整。	体部上半の文様帯部分で大きく膨らみ、体部下半は直線的に下りる鉢形土器。	
41	LR51	5	鉢	体～底	体下半部にはRL縄紋を左上－右下の方向で回転施文し、縦走する縄紋を施している。底部近くに２条の平行沈線が巡る。	横位のミガキ調整。	体部下半は直線的に下りる。	
42	LN42	6	甕 or 壺	口	口縁部上端にLR縄紋を横位回転施文し、その後に３条の平行沈線を巡らしている。頸部、体部の境の屈曲部分にも同じく３条の平行沈線を巡らし、口縁部との間はミガキ調整によって無文とされている。漆と思われる黒色の膠着膜が部分的に残る。	口縁直下に２条の平行沈線を施し、沈線施文後にミガキ調整を施して平滑に仕上げている。	頸部が大きく絞り込まれ、口縁～頸部は外反する甕あるいは壺形土器。口縁は緩い波状となる可能性もある。	なし。
43	LQ47	6	甕 or 壺	口	口縁部上端にLR縄紋を横位回転施文し、頸部に縦位の刷毛目調整を施した後、口縁下に３条の平行沈線を施し、以下をミガキ調整によって無文とする。破片下部の破断部分にも沈線１条が認められる。沈線間に塗彩痕跡が残る。	口縁直下に３条の平行沈線を巡らし、沈線施文後ミガキ調整によって平滑に仕上げられている。	頸部が大きく絞り込まれ、口縁～頸部は外反する甕あるいは壺形土器。口縁は緩い波状となる可能性もある。	なし。
44	LN42	6.5	甕 or 壺	口	口縁上端はLR縄紋が横位回転施文され、頸部は縦位刷毛目調整が施される。後、口縁下に３条の平行沈線が巡らされ、頸部、体部の屈曲部にも１条以上の沈線が巡らされる。沈線施文後頸部は横位ミガキ調整によって無文とされる。	横位ミガキ調整で平滑に仕上げられる。	頸部が大きく絞り込まれ、口縁～頸部が外反する甕あるいは壺形土器。口縁は平縁である。	なし。
45	LN42	6.5	甕 or 壺	口	口縁上端にLR縄紋を横位回転施文し、後、口縁下に２条の平行沈線を巡らせている。沈線施文後、頸部は横位のミガキ調整によって無文とされる。	横位のミガキ調整によって平滑に仕上げられる。	頸部が大きく絞り込まれ、口縁～頸部が外反する甕もしくは壺形土器。口縁は平縁となる。	なし。
46	LN42	6.5	甕 or 壺	口	口縁上端にLR縄紋を施し、その後、口縁下に３条の沈線を、さらにその下にやや間隔をおいて最低１条の沈線を巡らす。上下段の沈線間は施文後に横位のミガキ調整によって無文とされる。沈線間には塗彩痕跡が残る。	口縁直下に２条の沈線を巡らせ、沈線施文後に横位のミガキ調整によって平滑に仕上げている。	頸部で大きく絞り込まれ、口縁～頸部が外反する甕あるいは壺形土器。口縁は緩い波状を呈し、波頂部には浅い切り込みが入れられて二又に分かれる。	なし。
47	LS51	5	甕 or 壺	口	口縁上端にはLR縄紋、頸部には縦位の刷毛目調整を施す。その後に口縁下に３条の沈線を頸部と体部の境にも２条の沈線を巡らせ、上下段の沈線間を横位のミガキ調整によって無文としている。	口縁直下に２条の沈線を沿わせ、その後にナデ調整を行って平滑にしている。	頸部で大きく絞り込まれ、口縁～頸部が外反する甕ないし壺形土器。波状口縁となる。	なし。



第10図　縄文時代後続期の土器（５）

第５表　縄文時代後続期の土器観察表（５）

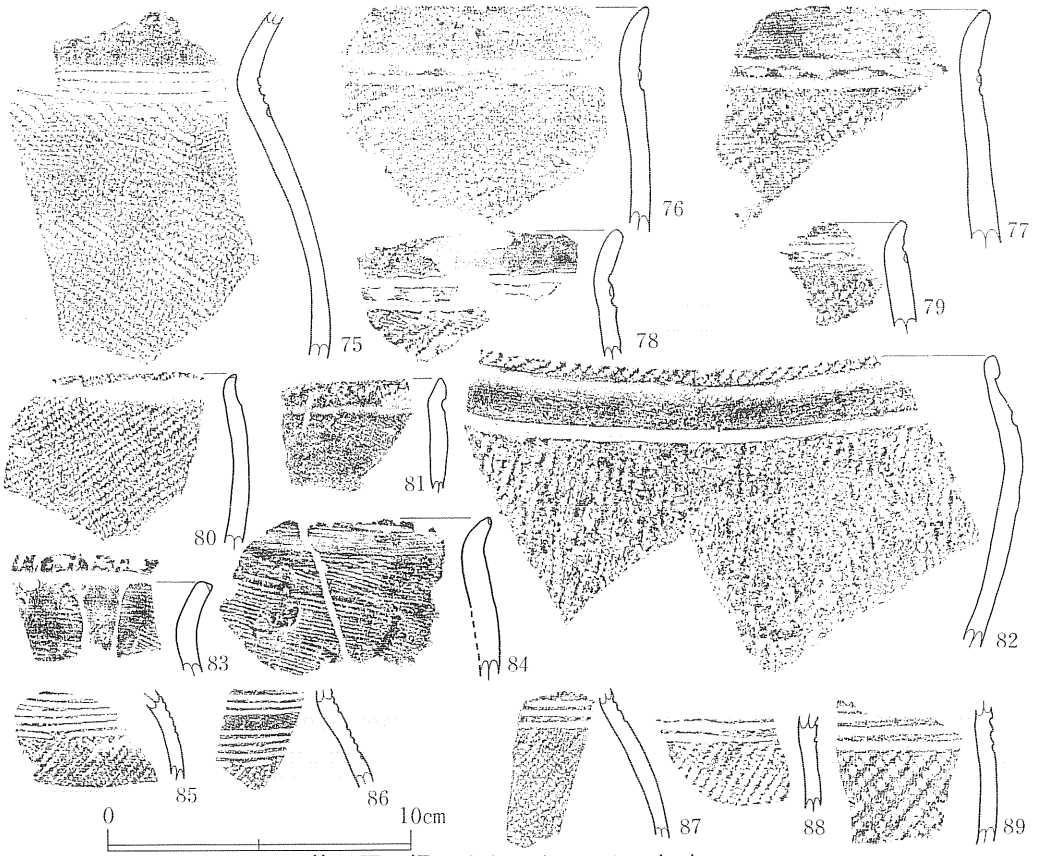
番号	出土区	器厚	器形	部位	表　面	内　面	形制上の特徴	口唇部施紋
48	LE41	6	甕	口	RL縄紋を左上－右下の方向で回転施文し縦走する縄紋を表し、後に口縁部に沿って１条の沈線を巡らす。	口縁に沿って1条、さらにその下に水平に１条の沈線を巡らし、その後横位のナデあるいはミガキ調整を行って全体に平滑に仕上げている。	口縁部が外傾する甕。頸部で「く」の字形に屈曲し、体部は膨らみながら下りるものであろう。	なし。
49	LN42	5	甕	口～頸	口縁上端にRL縄紋を横位に施文し、後、口縁に沿って１条、さらにその下に２条の沈線を水平に巡らせている。沈線施文後、口縁下部から頸部にかけては横位のミガキ調整によって無文とされる。	口縁に沿って１条、さらにその下に水平に１条の沈線を巡らせ、その後に横位のミガキ調整によって器面を平滑に仕上げている。	口縁部が屈曲外傾し、頸部は内傾しながら立ち上がる甕形土器。体部は再び屈曲して膨らみながら下りるであろう。	なし。
50	LN42	5.5	甕	口～頸	器面全体にナデ調整した後、口縁上端にはやや斜めに傾けた工具によって刻目列を施し、口縁と頸部の境に４条の平行沈線を巡らす。頸上部には蓋固定用の孔が焼成前に穿たれている。	ナデ調整を行った後口縁と頸部の境に１条の沈線を施し、施文後、再度沈線の縁のみにナデ調整を施している。	口縁部が屈曲外傾し、頸部はやや内傾しながら立ち上がる甕形土器。体部は再度屈曲して膨らみながら下りるであろう。	なし。
51	LN42	5	甕	口	口縁～頸部に縦位の刷毛目調整を施した後、口縁下に３条の平行沈線、頸部と体部の境にも３条の沈線を施している。沈線施文後、浅いナデ調整を施す。	口縁直下に２条の平行沈線を施し、沈線施文後、横位の浅いミガキ調整を施している。	口縁が外反外傾し、頸部と体部の境で屈曲する甕形土器。口縁は平縁となる。	なし。
52	LS51	6	甕	口～体	口縁上端にはLR縄紋を横位回転施文し、頸部以下体部にかけて縦位の刷毛目調整を施した後、体部は再度LR縄紋を横位あるいは右上－左下の方向で回転施文する。以上の地紋施文後に口縁下に沈線１条、頸部と体部の境にも３条の沈線を巡らす。	横位のミガキ調整によって平滑に仕上げられる。	口縁～頸部が外反外傾し、頸部と体部の境で屈曲し、体部半ばで膨らむ甕形土器。	なし。
53	LO42	5	甕	口	口縁上端にLR縄紋を浅く横位回転施文し、頸部には刷毛目調整を斜位に施す。その後に、口縁下部に１条の沈線を、頸部と体部の境に３条の沈線を巡らす。	横位のナデ調整によって平滑に仕上げられる。	口縁～頸部が外反外傾し、頸部と体部が屈曲する甕形土器。	なし。
54	LN41	6	甕	口～体	口縁上端にLR縄紋を横位回転施文し、頸部は縦位の刷毛目調整を施す。体部にもLR縄紋を右上－左下の方向で回転施文する。その後に口縁直下に１条、頸部と体部の境に３条の浅い沈線を巡らせている。	口縁上端近くは横位のミガキ調整、それより下ではケズリ調整に近いナデ調整を施す。	口縁～頸部が外反外傾する甕形土器。体部半ばに膨らみをもつであろう。	なし。
55	LE41	5	甕	口	口縁上端にLR縄紋を横位回転施文し、頸部には縦位の刷毛目調整を施す。その後、口縁下部に１条、頸部と体部の境にも最低１条の沈線を巡らせている。	横位のミガキ調整によって平滑に仕上げられている。	口縁が外反外傾し、頸部と体部の境で屈曲する甕形土器。	なし。
56	LE41	5	甕	口	口縁上端にLR縄紋を横位回転施文し、頸部には斜位に刷毛目調整を施す。その後、口縁下部に１条の沈線を巡らす。	横位のミガキ調整によって平滑に仕上げられている。	口縁～頸部が外反外傾する甕形土器。	なし。
57	KS43	6.5	甕	口～体	口縁上部は横位の刷毛目調整を行い、その後上端にLR縄紋を横位回転施文する。頸部は縦位の刷毛目調整を行って、体部はLR縄紋を横位ないし右上－左下の方向で回転施文する。頸部と体部の境には３条の平行沈線が施されている。	横位の刷毛目調整を施した後、横位のナデ調整で平滑に仕上げている。	口縁～頸部の外反外傾する甕形土器。体部の半ばに膨らみをもつであろう。	なし。
58	LE42	5.5	甕	口～体	口縁上端はLR縄紋を横位回転施文。頸部は縦位の刷毛目調整。体部は横位の刷毛目調整の上にLR縄紋を横位回転施文。頸部と体部の境には３条の平行沈線を巡らす。	横位のミガキ調整によって平滑に仕上げられている。	口縁が外反外傾する甕形土器。体部半ばで膨らみをもつであろう。	なし。
59	LF42	5.5	甕	口	口縁上端にLR縄紋を横位回転施文し、頸部は斜位の刷毛目調整が施され、その上から浅くナデ調整が行われる。	横位の刷毛目調整の後、浅いナデ調整。	口縁～頸部の外反外傾する甕形土器。外反の度合は緩い。	なし。



第11図　縄文時代後続期の土器（６）

第６表　縄文時代後続期の土器観察表（６）

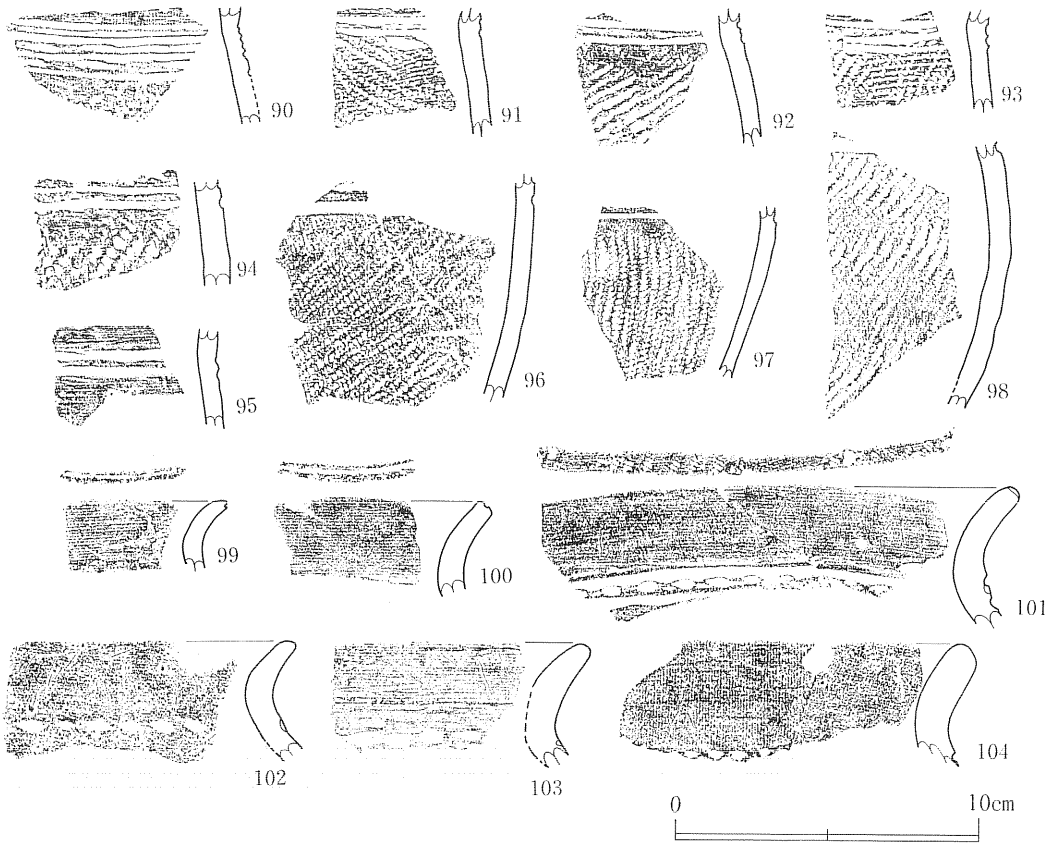
番号	出土区	器厚	器形	部位	表　面	内　面	形制上の特徴	口唇部施紋
60	KT43	6	甕	口～頸	口縁部にはLR縄紋を横位回転施文し、頸部は刷毛目調整を斜位に施している。口縁部と頸部の境には沈線１条が巡らされる。	横位のナデ調整によって平滑に仕上げられる。	口縁は外傾するが、外反はしない。頸部は内傾気味に直立する。体部との境でもう一段屈曲するであろう。	LR縄紋を横位回転施文する。
61	KR42	7	甕	口	口縁部は縦位の刷毛目調整を施し、頸部との境には２条の平行沈線を巡らす。沈線間には刷毛目工具の圧痕列を施文している。	横位の刷毛目調整の後ナデ調整。	口縁部が外傾する甕形土器。口縁は外傾するが外反はしない。	刷毛目工具による圧痕列が施される。
62	LN42	7	甕	口～体	口縁から頸部まで横位のナデ調整を施し、頸部と体部の屈曲部から下はLR縄紋を横位回転施文する。屈曲部ではその後に３条の平行沈線を巡らす。煤が付着し、一部内面にも及ぶ。	横位のナデないしミガキ調整によって平滑に仕上げられる。	口縁～頸部の外反外傾する甕形土器。	なし。
63	KR43	8	甕	口～体	口縁部と体部の屈曲部から下にLR縄紋を横位回転施文し、屈曲部には３条の平行沈線を巡らす。口縁部は横位ナデ調整を施す。	口縁部内面は剥落している。体部内面は横位のナデ調整。	口縁が僅かに外反外傾して立ち上がり、体部は彎曲しながら下りる甕形土器。	なし。
64	KR43	8.5	甕	口	体部はLR縄紋を横位回転施文し、屈曲部には３条の平行沈線を巡らす。口縁部は横位のナデ調整を施す。	横位のナデ調整。	口縁部が僅かに外反外傾して立ち上がる甕形土器。	LR縄紋を回転施文。
65	KR43	8.5	甕	口～体	体部はLR縄紋を横位回転施文し、屈曲部には３条の平行沈線を巡らす。口縁部は横位のナデ調整。	横位のナデ調整。	口縁部が僅かに外反外傾する甕形土器。体部上半に膨らみをもって下りる。	LR縄紋を横位回転施文。
66	MC49	5.5	甕	口～体	体部はLR縄紋を横位回転施文。頸屈曲部に３条の平行沈線を巡らす。口縁部は縦位の刷毛目調整ののち、横位のナデ調整。	横位のナデ調整。	口縁部の僅かに外反外傾する甕形土器。薄手のつくりであり、小形のものかとも思われる。	LR縄紋の横位回転施文。
67	LN42	7.5	甕	口	口縁と体部の境に２条の平行沈線を巡らし、口縁部は横位のナデ調整を施す。体部にはおそらく斜縄紋が施されるものであろう。	横位のナデ調整。	口縁部の外傾する甕形土器。	LR縄紋を横位回転施文する。
68	LN42	7	甕	口	口縁と体部境の屈曲部のやや下に２条の平行沈線を巡らし、口縁部は横位のナデ調整を施す。	横位のナデ調整。	口縁が外傾外反する甕形土器。	なし。
69	KR42	6.5	甕	口	体上部に沈線が１条巡る。口縁部は横位ナデ調整。	横位のナデ調整。	口縁の短く外傾外反する甕形土器。	7mm幅の粗面をおいて斜位の縄目を施す。
70	不明	6.5	甕	口	口縁部と体部の境に沈線１条を巡らし、口縁部は横位のナデ調整、体部はRL縄紋を横位回転施文。	横位のナデ調整。	口縁部の僅かに外傾外反する甕形土器。	RL縄紋横位回転施文。
71	KR42	6	甕	口～体	横位の刷毛目調整を施した後、体部にはLR縄紋を横位回転施文し、口縁と体部の境に２条の平行沈線を施す。口縁部は横位のナデ調整。	上部に横位刷毛目調整を施した後、横位のナデ調整を施す。	口縁部の外傾外反する甕形土器。口唇が薄くなる特徴がある。	なし。
72	MB45	6.5	甕	口	体上部に３条の平行沈線を巡らし、口縁部は横位ナデ調整。	横位の刷毛目調整の後、横位ナデ調整。	口縁部の外傾外反する甕形土器。口唇部の尖る特徴がある。	なし。
73	LO42	7	甕	口	横位ナデ調整を行った後、口縁上端外面にRL縄紋を横位回転施文する。	横位のナデ調整。	口縁部が「く」の字に屈曲外傾する甕形土器。	なし。
74	KR42	6	甕	口	口縁部は横位のナデ調整。口縁上端外面にLR縄紋を回転施文する。	横位のナデ調整。	口縁の外反外傾する甕形土器。	なし。



第12図　縄文時代後続期の土器（７）

第７表　縄文時代後続期の土器観察表（７）

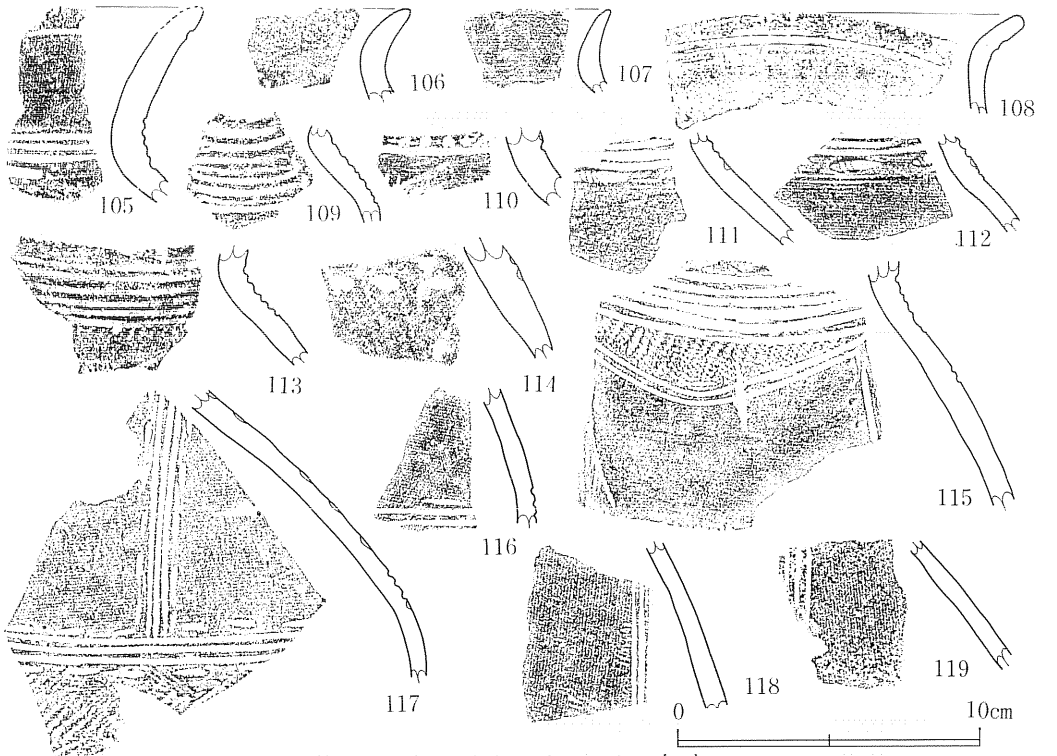
番号	出土区	器厚	器形	部位	表　面	内　面	形制上の特徴	口唇部施紋
75	LQ47	6.5	甕	口～体	体部は横位の刷毛目調整の後、RL縄紋を横位回転施文する。口縁部は縦位の刷毛目調整を施して、体部との境に３条の平行沈線を巡らした後、さらに沈線下部に木目列点文を施す。	口縁部分は横位の刷毛目調整を施し、その後に体部も含めて横位のナデ調整を施す。	口縁上端を欠失する。口縁部が外傾外反する甕形土器。	なし。
76	KR42	7.5	甕	口～体	体部は横位の刷毛目調整を施した後、LR縄紋を横位回転施文する。口縁と体部の境には２条の平行沈線を巡らし、沈線間に木目列点文を施す。口縁部は横位のナデ調整が施される。	横位のナデ調整。	口縁部の外傾外反する甕形土器。口縁と体部の屈曲の度合は緩い。	なし。
77	KR42	7.5	甕	口～体	※76と同一個体			
78	LD41	7	甕	口～体	体部には横位の刷毛目調整を施した後、LR縄紋を横位回転施文する。口縁と体部の境に２条の平行沈線を巡らし、沈線間に木目列点文を施文する。口縁部は横位のナデ調整。	横位のナデ調整。	口縁部の外傾外反する甕形土器。口縁部と体部との屈曲の度合は緩い。	なし。
79	不明	6.5	甕	口	体部にはLR縄紋を横位回転施文し、口縁と体部の境に２条の平行沈線を巡らす。沈線間には木目列点文を施す。口縁部は横位のナデ調整を施す。	ナデ調整。	口縁部のごく短く外傾外反する甕形土器。	なし。
80	LE41	5.5	甕	口～体	口縁部に横位ナデ調整を施し、体部と口縁上端にLR縄紋を横位回転施文する。	横位ミガキないしナデ調整。	口縁部が短く内屈し、上端は外反させた甕形土器。体部は緩く膨出する。口縁上端を外反させた器に粘土を外側に貼り付けている。	なし。
81	LG42	6	甕	口～体	口縁部下に浅く沈線１条を巡らし、その後全面に横位のナデ調整を施す。	横位のナデ調整。	口縁部を短く屈曲外傾させた小形の甕形土器。	なし。
82	KR42	6.5	甕	口～体	体部はLR縄紋を右上－左下の方向で回転施文し、縦走する縄紋を表す。口縁部と体部の境には沈線１条を巡らし、口縁上端にもLR縄紋を横位回転施文した後、口縁部に横位ミガキ調整を施す。	横位のナデ調整。	口縁部の内傾する甕形土器。口縁上端は粘土を貼り付けて肥厚させる。	なし。
83	LO42	7	甕	口	横位刷毛目調整を施し、その後に浅くナデ調整をする。	横位の刷毛目調整を施した後、横位のナデ調整。	口縁部の外反外傾する甕形土器。	6mm前後の間隔で斜位の刻目が施される。
84	LR50	8	甕	口～体	横位の刷毛目調整。口縁部ではほぼ水平に調整される。	口縁部は横位のナデ調整。体部は斜位の刷毛目調整を行った後、横位のナデ調整を施す。	口縁部の短く外傾する甕形土器。	刷毛目調整のへら状工具を6mm前後の間隔で押し当て、刻目を施す。
85	LE42	5	甕	体	体部はLR縄紋を横位回転施文する。体上部に６条の平行沈線を密に施し、さらのその下に長さ20mm程の短沈線列を施す。	比較的緻密なミガキ調整が施される。	肩部から体上部にかけて膨らむ甕形土器体部破片。	
86	不明	5	甕	体	体部はLR縄紋を横位回転施文し、肩部から体上部にかけて２段にわたって平行沈線が施される。上段では３条以上、下段では４条の沈線が施され、下段の沈線のさらに下では長さ10mm程の短沈線列が施される。	横位のミガキ調整によって平滑に仕上げられる。	体部中央付近に膨らみを持つ甕形土器であろうか？肩部～体上部はなで肩となる。	
87	LD41	6	甕	体	体部はLR縄紋を横位回転施文し、口縁部と体部との境に３条の平行沈線を巡らす。	横位の刷毛目調整の後、横位ナデ調整。		
88	LD42	6	甕	体	体部にLR縄紋を横位回転施文し、口縁部と体部との境に３条の平行沈線を巡らす。	ケズリに近い横位～斜位のナデ調整。		
89	LO42	6	甕	体	体部にはLR縄紋を横位回転施文し、口縁部との境に３条の平行沈線を巡らす。	横位のナデ調整。		



第13図　縄文時代後続期の土器（８）

第８表　縄文時代後続期の土器観察表（８）

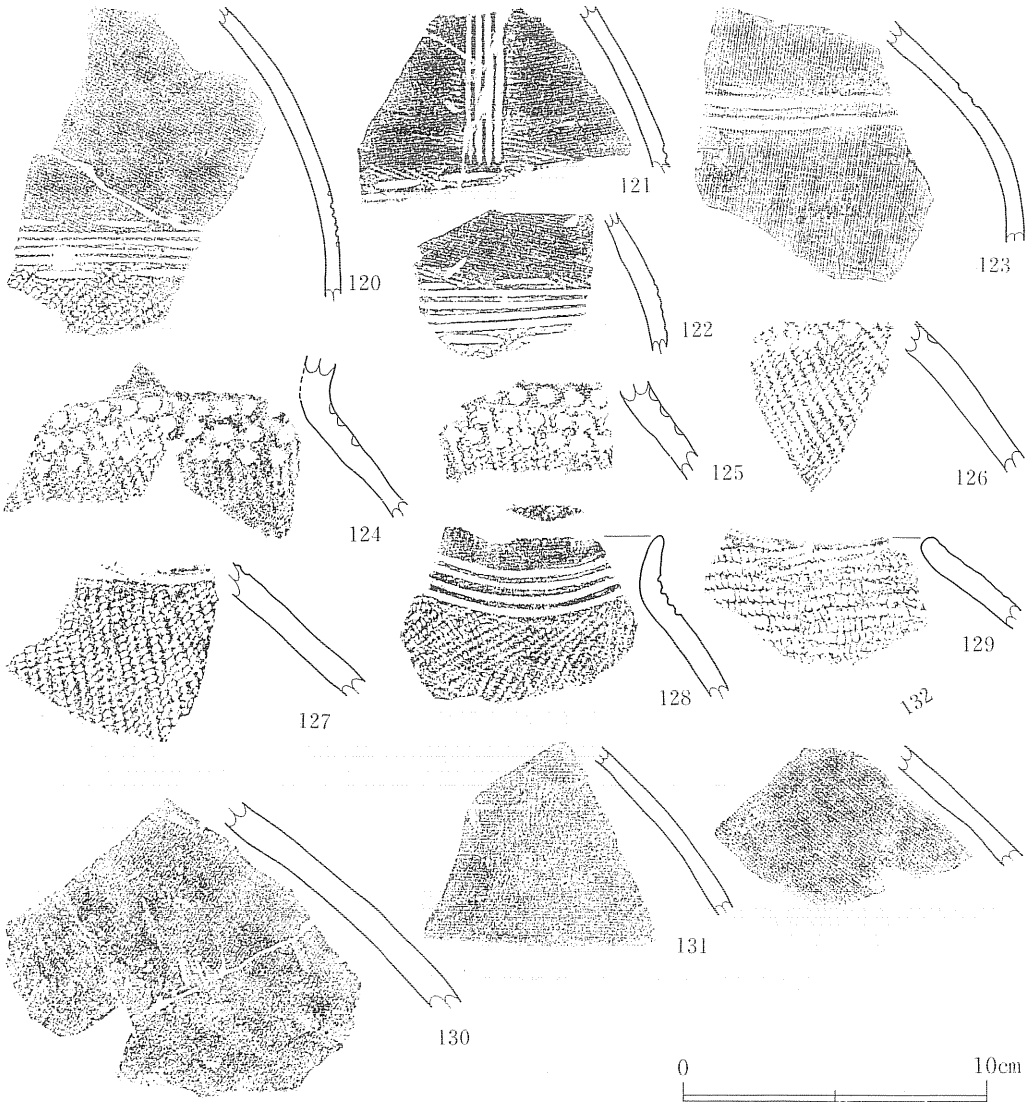
番号	出土区	器厚	器形	部位	表　面	内　面	形制上の特徴	口唇部施紋
90	KR42	6.5	甕	体	口縁～体部には横位の刷毛目調整を施し、その後体部にはLR縄紋を横位回転施文する。口縁部との境に４条の平行沈線を巡らす。沈線間のうち下２段には木目列点文を施文する。	横位～斜位の刷毛目調整の後、横位ナデ調整。		
91	KS42	7.5	甕	体	体部は横位の刷毛目調整の後、RL縄紋を横位回転施文する。口縁部との境には３条の平行沈線を巡らし、その下に木目列点文を施す。	横位のナデ調整。		
92	LN43	7.5	甕	体	体部にはLR縄紋を横位回転施文し、口縁部との境に２条の平行沈線を施す。	横位ナデ調整。		
93	LO42	6	甕	体	体部は横位の刷毛目調整の後LR縄紋を横位回転施文する。口縁部と体部との境には３条の平行沈線を巡らす。	横位のケズリに近いナデ調整。		
94	LN42	8	甕	体	体部はLR縄紋を横位回転施文し、口縁部との境に２条の平行沈線を巡らす。	横位のナデ調整。	口縁部から体部へは屈曲せずに下りるであろう。	
95	LE41	7.5	甕	体	口縁～体部にかけて横位の刷毛目調整を施した後、口縁部、体部の境に２条の平行沈線を巡らす。	ナデ調整。		
96	KR43	7.5	甕	体	体部にはLR縄紋を横位回転施文し、口縁部との境に２条の平行沈線を巡らす。	横位のナデ調整。	口縁部から体部へは屈曲がないままに下りる深鉢に近い形を示すであろう。	
97	KS42	5	甕	体	体部にはRL縄紋を左上－右下の方向で回転施文し、口縁部との境に２条の平行線を巡らす。	横位のミガキ調整。	口縁から体部にかけては屈曲なく下りるものと思われる。	
98	KR43	7.5	甕	体	体部にはLR縄紋を横位回転施文し、口縁部との境に１条の沈線を巡らす。	横位のナデ調整。	沈線の施文部位に屈曲は認められない。	
99	KS42	7	壺	口	横位の刷毛目調整の後、ナデ調整を施す。	ナデ調整を施す。	口縁～頸部の外反外傾する壺形土器。体部との境で屈曲するであろう。	浅い１条の沈線が施される。
100	LR50	8.5	壺	口	横位のミガキ調整。	横位のミガキ調整。	口縁～頸部の外反外傾する壺形土器。体部との境で屈曲するであろう。	１条の沈線を施す。
101	LN42	8.5	壺	口	体部との境に２条の沈線を、沈線間に木目列点文を施した後、口縁～頸部に横位のミガキ調整を施している。沈線は木目列点文と同じ工具の角を用い、小刻みに止めながら施文しており、細かな蛇腹状の圧痕が残る。	横位のミガキ調整。	口縁～頸部の外反外する壺形土器。	口唇上に木目列点と同じ工具による刻目を各位にはどこすが、30mm程度の間隔をあけて施文部と無分部を分けている。
102	LR42	8	壺	口	体部との境に木目列点文を施す。その後の器面調整は本来ミガキが行われたものとの思われるが、摩滅が著しく判然としない。	表面同様、摩滅して器面調整は判然としない。	口縁～頸部の外反外傾斜する壺形土器。体部との境で屈曲するものと思われる。	なし。
103	KR42	10.5	壺	口	体部との境に木目列点文を２段にわたって施し、その後に横位のミガキ調整を施す。	横位のミガキ調整を施す。	口縁～頸部の外反外傾する壺形土器。体部との境で屈曲するものと思われる。	なし。
104	LE41	12	壺	口	体部との境に木目列点文を施し、その後に横位のミガキ調整を施す。	横位のナデあるいはミガキ調整。	口縁～頸部の外傾外反する壺形土器。口唇部と口縁外面との境が不明確なほど口唇部は丸く器面調整される。	なし。



第14図　縄文時代後続期の土器（９）

第９表　縄文時代後続期の土器観察表（９）

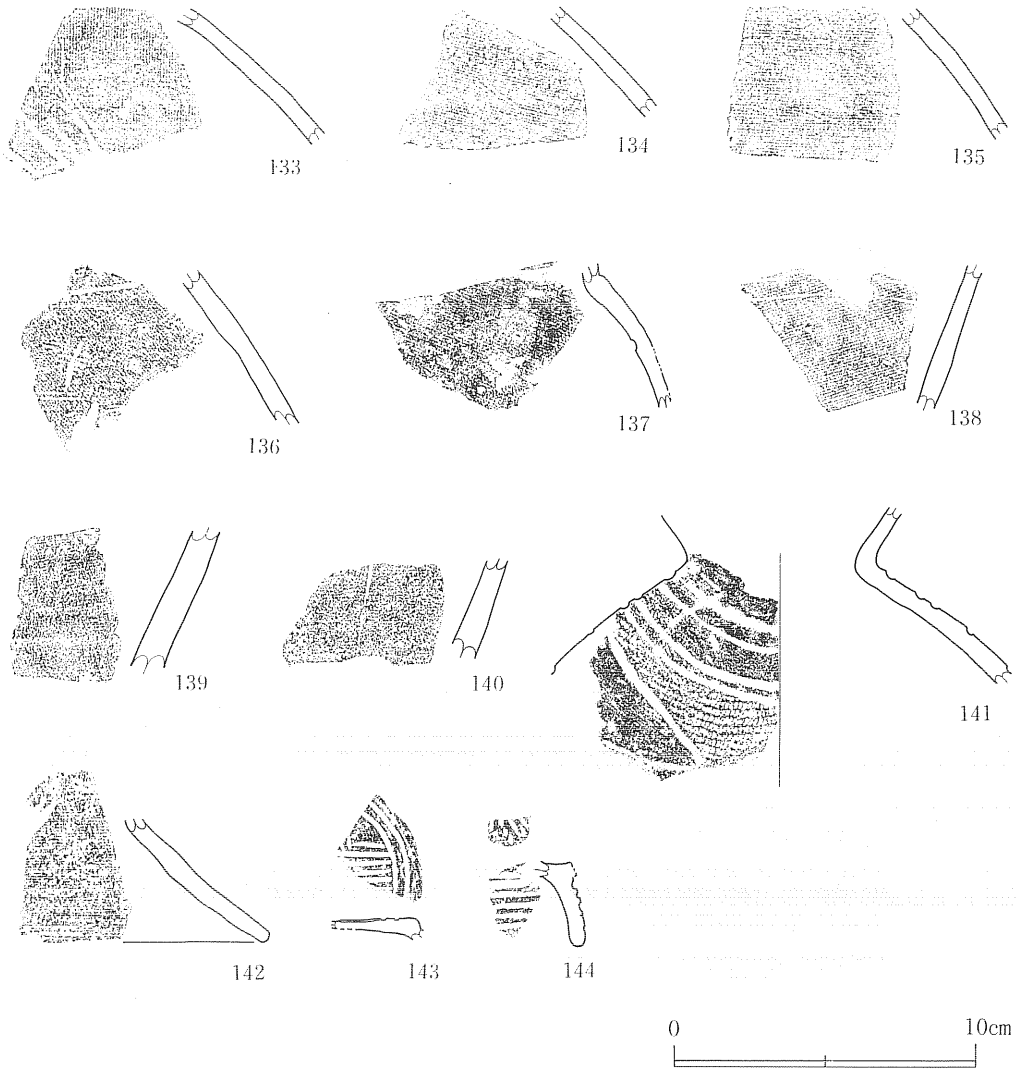
番号	出土区	器厚	器形	部位	表　面	内　面	形制上の特徴	口唇部施紋
105	LO42	9.5	壺	口	口縁直下に１条の沈線を施し、体部との境には３条の平行沈線、その下に木目列点文を施す。その後横位のミガキ調整が施される。	横位のミガキ調整が施される。	口縁～頸部の外反外傾する壺形土器。他に比べ、口縁～頸部までが長い。	なし。
106	KS42	8.5	壺	口	体部との境に列点文が施される。磨耗しており、器面調整の状態は不明。	磨耗して器面調整の状態は不明。	口縁～頸部の外反外傾する壺形土器。頸部から口縁上端に向かうに従い薄く作られる。	なし。
107	LS49	5.5	壺	口	横位のミガキ調整が施される。	横位のナデないしミガキ調整が施される。	口縁～頸部の屈曲外傾する壺形土器。頸部から口縁上端に向かうに従い薄く作られる。	なし。
108	LE41	6	壺	口	口縁下に浅い沈線を２条重複させて施した後、横位のナデ調整を施す。	横位のナデ調整。	口縁～頸部の屈曲外傾する壺形土器。他に比べ口径が大きい。	なし。
109	LN42	7	壺	体	頸部との境に１条の沈線を巡らし、以下に工字文を描く。工字文は偏平な楕円文を上下から沈線で挟み込んで構成する。	浅い横位の刷毛目調整を施す。	体上部の張る小形の壺形土器。頸部は垂直に立ち上がるものであろうか？形制としては古いタイプ。	
110	LN42	9.5	壺	体	頸部との境に２条の平行沈線を施し、中に竹管状工具による刺突文を施す。施文後、横位のミガキ調整を施す。	横位のミガキ調整。	頸部との境で屈曲する壺形土器。	
111	LR50	6.5	壺	体	器面に刷毛目調整を施した後、頸部の屈曲部に３条の平行沈線を施し、その下に木目列点文を施文する。その後に横位のミガキ調整を施す。途彩痕跡が沈線下に残されている。	横位のミガキないしナデ調整。		
112	LN42	6	壺	体	※111と同一個体			
113	KR42	7.5	壺	体	頸部との境近くに７条の平行沈線が浅く施される。施文後に器面調整が行われるが、磨耗が著しく判別し得ない。	横位のナデ調整。		
114	KR42	10	壺	体	頸部との境の下、体上部に木目列点文が２段に渡って施される。その後に施される調整は、器面が磨耗しており不明。	横位のミガキ調整。		
115	KS43	7.5	壺	体	体上部にLR縄紋を横位回転施文した後、頸部との境に６条の平行沈線を施し、それに直交させて２条の沈線を垂下させる。垂線の脇には先端の尖った工具による刺突列を施す。さらに縄紋部分は上向き２条の弧線で区画される。区画外は横位のミガキ調整によって平滑に仕上げられる。	横位の刷毛目調整の後、浅いナデ調整を施す。		
116	LN42	6	壺	体	体部上半の文様帯下限を画する３条の沈線とその上位に施文される短沈線列、それらに直交して描かれる垂線が認められる。沈線施文後にミガキ調整を施す。	斜位の刷毛目調整の後、浅いナデ調整。		
117	不明	6	壺	体	横位の刷毛目調整の後、体下部にはLR縄紋を横位回転施文する。その後３条の平行沈線を体半ばに巡らし、頸部との境からも同じく３条の沈線を垂下させる。体半ばの平行沈線、垂下する平行沈線ともその両脇に木目列点文を施す。その後体半ばの平行沈線より上位は横位のミガキ調整が施される。沈線の中及び木目列点文中には塗彩痕跡が残される。	横位のケズリに近いナデ調整。		
118	LN42	5.5	壺	体	横位の刷毛目調整の後、頸部との境から３条の沈線を垂下させる。体半ばにも３条程度の平行沈線が巡るものとなろう。沈線施文後、横位のミガキ調整が施される。	横位のミガキ調整。		
119	LN42	5	壺	体	刷毛目調整が行われているかどうかは判然としない。頸部との境からの３条の沈線が施された後、ミガキ調整が施されている。	斜位の刷毛目調整の後、横位のミガキ調整。		



第15図　縄文時代後続期の土器(10)

第10表　縄文時代後続期の土器観察表(10)

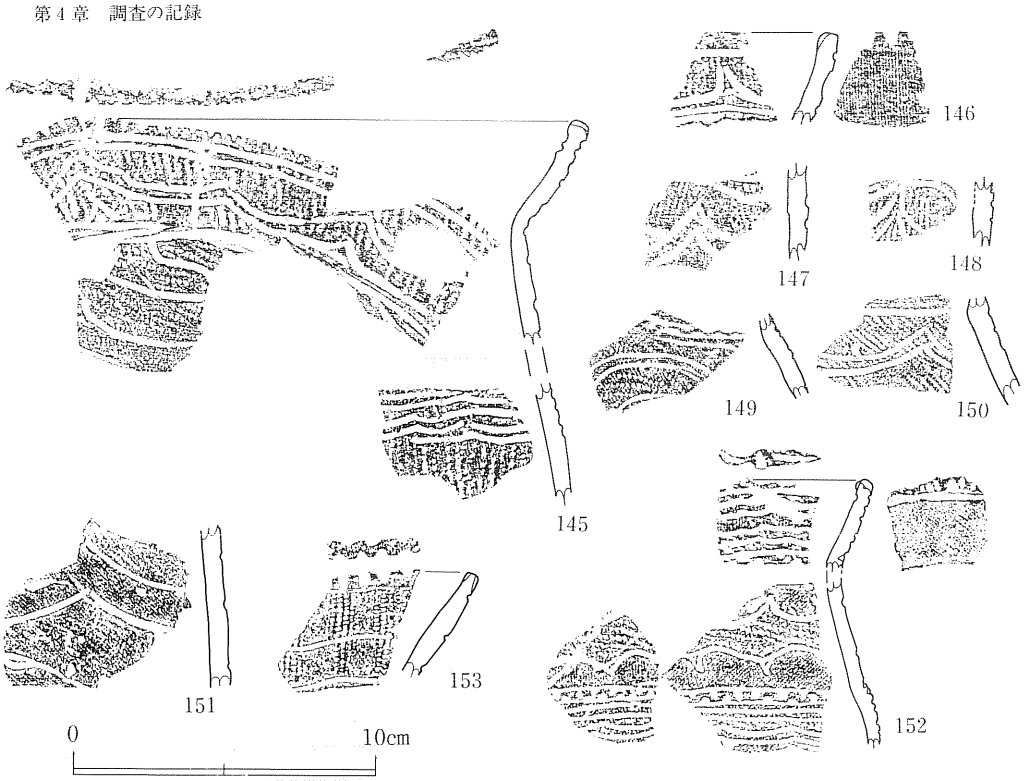
番号	出土区	器厚	器形	部位	表　面	内　面	形制上の特徴	口唇部施紋
120	LM42	5.5	壺	体	横位の刷毛目調整の後、体下部はLR縄文を横位回転施文する。後、体半ばには４条の平行沈線を巡らし、その上下に木目状撚文を施す。又、４条の沈線と頸部との境から体半ばの沈線までトろす。沈線施文後、浅いナデ調整を施す。	横位の刷毛目調整の後、横位のミガキないしナデ調整を施す。		
121	LN42	5	壺	体	※120と同一個体。			
122	LN42	5.5	壺	体	※120と同一個体。			
123	KR42	6	壺	体	横位の刷毛目調整の後、体半ばに２条の平行沈線を巡らし、さらに横位のミガキ調整を施している。	斜位の刷毛目調整の後、浅いミガキ調整。		
124	LE42	8.5	壺	体	体部にはRL縄紋を横位回転施文し、頸部との境に先端のやや丸い工具によって３段の刺突列を施す。	横位のミガキ調整。		
125	LE41	8	壺	体	※124と同一個体。			
126	LE41	8	壺	体	※124と同一個体。			
127	LS50	7.5	壺	体	全面にRL縄文を横位回転施文し、頸部との境に浅い１条の沈線を巡らす。	横位のミガキ調整。		
128	KR42	8	壺	体	体部にLR縄文を横位回転施文し、頸部の屈曲部分には４条の平行沈線を巡らす。口縁～頸部にかけては沈線施文後横位のナデ調整を施して平滑に仕上げる。	横位のミガキ調整。	口縁部が短く垂直に立ち上がる鉢状器。	なし。
129	LE44	7.5	壺	口～体	口縁直下からLR縄紋を左上－右下の方向で回転施文する。	口唇部分は横位のミガキ調整、以下は横位のナデ調整。	無頸壺。全体は球形となろう。	なし。
130	KR42	8	壺	体	斜位の刷毛目調整の後、横位のミガキ調整。	摩滅が著しいが、横位のナデ調整が施される。		
131	LN42	6.5	壺	体	横位の刷毛目調整の後、同じく横位のミガキ調整。	横位の刷毛目調整の後、横位のミガキ調整。		
132	KR42	5.5	壺	体	斜位の刷毛目調整の後、横位のミガキ調整。	横位の刷毛目調整の後、横位のナデ調整。		



第16図　縄文時代後続期の土器(11)

第11表　縄文時代後続期の土器観察表(11)

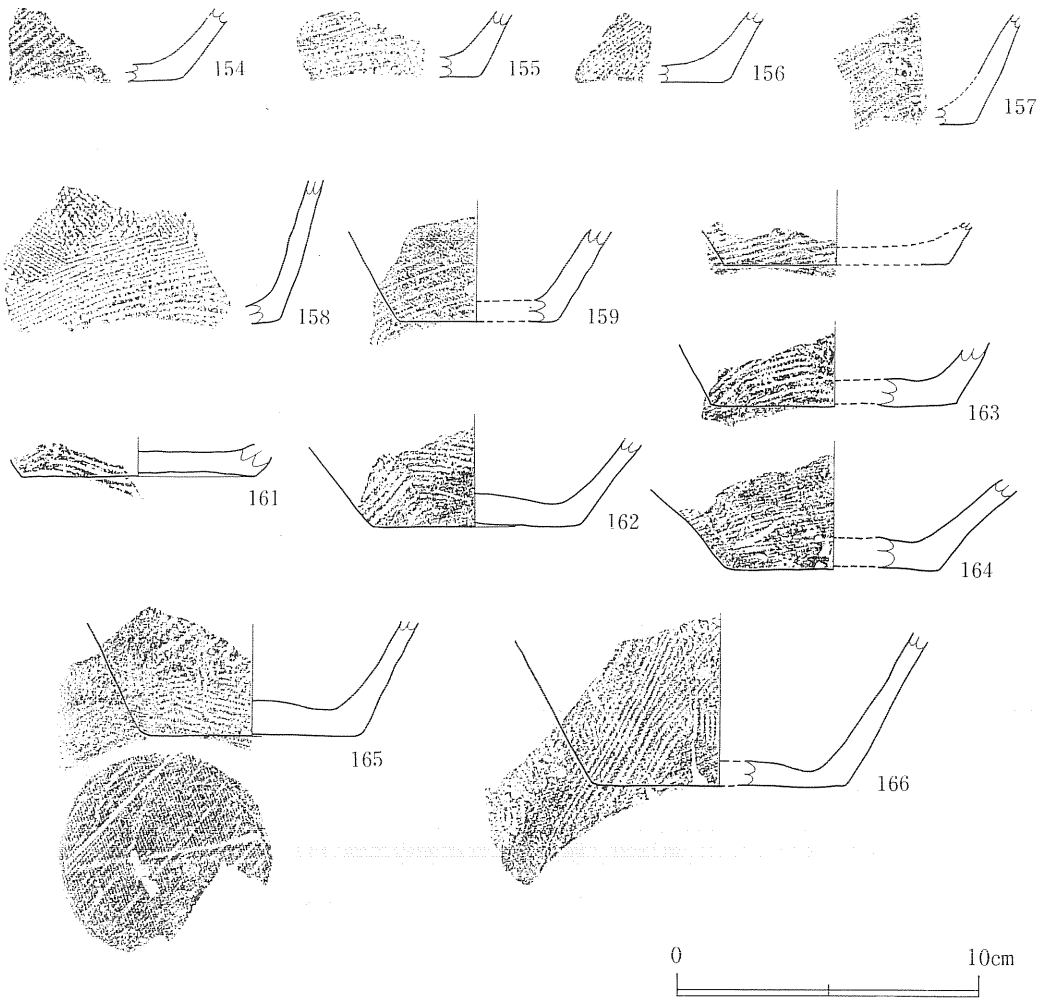
番号	出土区	器厚	器形	部位	表面	内面	形制上の特徴	口唇部施紋
133	LN42	5.5	壺	体	横位の刷毛目調整の後、横位のミガキ調整。	横位のミガキ調整。		
134	LN42	5.5	壺	体	斜位の刷毛目調整の後、横位のミガキ調整。	斜位のミガキ調整。		
135	LN42	5.5	壺	体	斜位の刷毛目調整の後、横位のミガキ調整。	縦位の刷毛目調整の後、横位のミガキ調整。		
136	LE41	7	壺	体	斜位の刷毛目調整の後、横位のナデ調整。	横位の刷毛目調整の後、横位のナデ調整。		
137	KS43	6.5	壺	体	頸部との境に１条の沈線を巡らした後、ナデ調整を施す。	横位のナデ調整。		
138	LE42	6	壺	体	横位のミガキ調整。ミガキ調整以前にへら状工具で器面を削ったものか、横位の調整痕が残る。	横位のナデ調整。		
139	LO42	9.5	壺	体	横位のナデ調整。	横位のナデ調整。		
140	LE42	7	壺	体	横位のナデ調整。ナデ調整以前に縦位のケズリ調整が行われたものか？	横位のナデ調整。		
141	LR51	5.5	壺	頸～体	体上部にLR縄紋を左上－右下の方向で回転施文する。頸部との境から少し離れて１条、さらにその下にやや間隔をおいて２条の平行沈線を巡らし、その下には変形工字文状の反転する沈線を描いて、縄紋を区画する。沈線施文後に、ミガキ調整を施して区画外を消す。	口縁～頸部内側は横位のナデ調整。体部の内面は指頭によって整形した後ナデ調整を施す。	頸部は「くｊの字に屈曲し、体部は丸みをもって下りる小形の壺形土器。	
142	LN42	6.5	蓋	蓋縁	横位のナデ調整を施す。	横位の刷毛目調整の後、横位のナデ調整を施す。	外反して開く傘形の蓋。	
143	LS51	4.5	蓋	上部	２条の沈線で上面縁に沿って円を描き、その中部に５条の沈線を重ねて十字形の構図での文様を描く。沈線施文後、ナデ調整が施される。	ナデ調整。	台形の蓋。	
144	LN42	5.5	蓋	側面	側面には５条の平行沈線が施され、上面には２条の平行沈線と刺突文が施される。	ナデ調整。	台形の蓋。側面は彎曲し、上面縁はやや外側に張り出す。	



第17図　縄文時代後続期の土器(12)

第12表　縄文時代後続期の土器観察表(12)

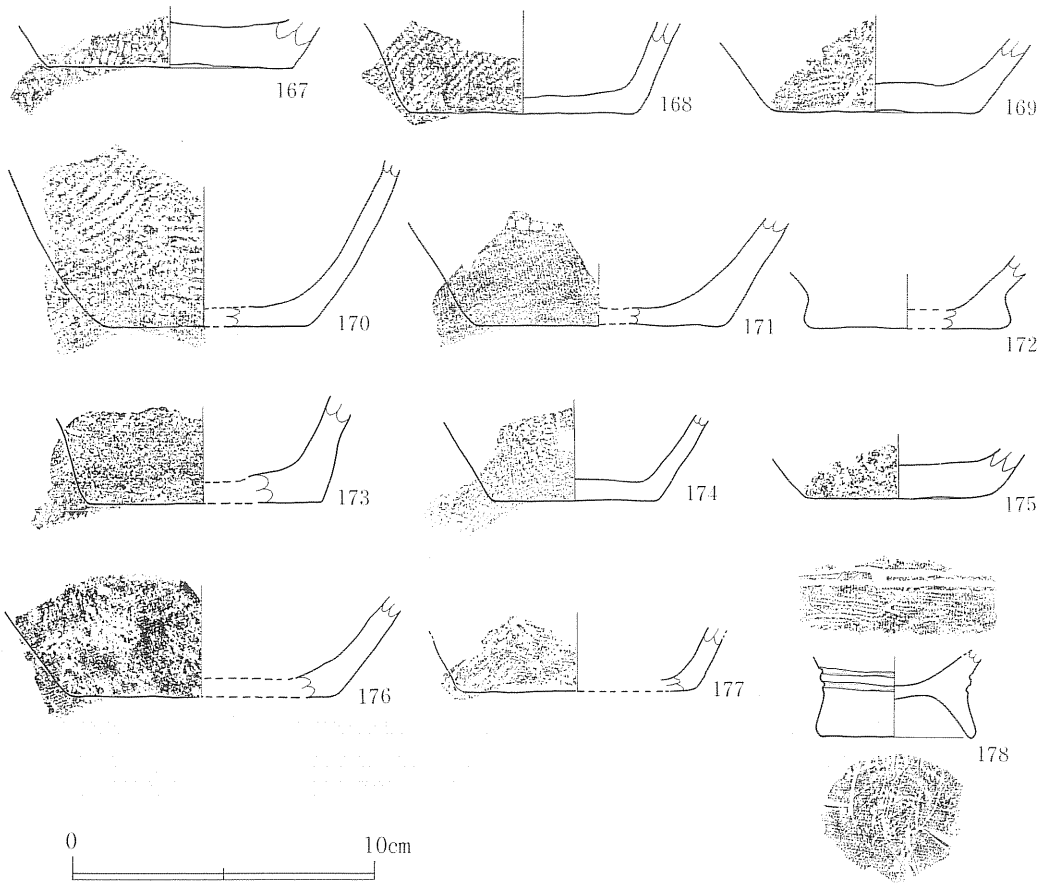
番号	出土区	器厚	器形	部位	表　面	内　面	形制上の特徴	口唇部施紋
145	KS42	6	甕	口～頸	口縁部文様帯には地紋としてRL縄紋を右上－左下の方向で回転施文する。その後、上端には刻目を施し、文様帯上下限は２条づつの平行沈線によって区画し、内部に２条沈線で上向きの連弧文を描く。文様帯下限の沈線からも山形の沈線が連弧文の接続部に向かって伸びる。頸部の文様帯はRL縄紋を左上－右下の方向で回転し横走縄紋を施文した後、左右に大きな振幅をもって描く沈線が描かれる。体部はRL縄紋を左上－右下の方向で回転して縦走縄紋を表し、その上部、頸部との境に近い部分に２条の平行沈線、さらにその下に短い振幅の上向き連弧文を３条の沈線で描く。	口縁上端に刻目を施し、その直下に２条の平行沈線を口縁に合わせて波状に描く。沈線施文後ナデ調整が施される。	口縁部が外傾内彎しながら立ち上がり、頸部はやや内傾して下りる甕形土器。口縁上にはおそらく８箇所に小突起が付けられ、突起上は縦位に刻まれる。体部は頸部との境にさらに１段屈曲をもって膨らむものとなろう。	なし。
146	LK42	6.5	甕	口	RL縄紋を右上－左下の方向で回転し縦走縄紋を施文した後、口縁直下に１条の沈線を施し、その下に偏平な上向きの連弧文を描き、文様帯下限にも１条の沈線を巡らしている。	口縁上端に刻目列を施し、その後に横位のナデ調整を施す。	口縁が内彎外傾しながら立ち上がる甕形土器。	なし。
147	LD41	6	甕	頸	RL縄紋を右上－左下の方向で回転して縦走縄紋を施文し、２条沈線によって連弧文を施している。	横位のナデ調整を施す。	甕形土器の頸部あるいは体部の破片。	
148	LD41	6.5	甕？	体	地紋としてLR縄紋を右上－左下の方向で施文し、１～２条の沈線を用いて連弧文あるいは入り組み文風のモチーフを描く。	ナデ調整を施す。	甕形土器の体部破片と判断されるが、小片であり詳細は不明。	
149	LE41	6.5	甕	体	頸部との境を交互刺突文で画し、体部にはRLの横走縄紋を施し、さらに２条沈線で弧状のモチーフの区画文を描く。	摩滅が著しく器面調整の判別不能。	頸部との境で屈曲し、膨らみをもって下りる体部の甕形土器。ほぼ直立する頸部を有するものと思われ、口縁部は屈曲内彎外傾するであろう。	
150	LF42	7	甕	体	RL縄紋を横位回転施文した後、口縁部との屈曲部に１条の沈線を巡らし、その下に２条沈線によって上向きの連弧文を描く。	横位のナデ調整を施す。	口縁部が屈曲外傾し、体部半ばに膨らみをもつ甕形土器となろう。	
151	LK40	5.5	甕	体	RL縄紋をほぼ横位に回転施文し、その後に弧線を組み合せてのモチーフを描く。文様の全体はあるいは重菱文風のものとなるかもしれない。沈線施文後沈線間はナデ調整によってすり消されている。	ナデ調整を施す。	甕形土器の体部破片と判断されるが、直立する頸部の破片であるか、あるいは内側に傾いた体部上半の破片であるか判別し得ない。	
152	LD44	5.5	甕	口	口縁部の文様帯は上限を１条の沈線で、下限を２条の平行沈線と沈線間に上下から交互に加えた刺突文（交互刺突文）によって画し、極めて緩い振幅の２条沈線で上部には上向きの連弧文、下部には下向きの連弧文を施す。頸部にはその半ばにRL縄紋を右上－左下の方向で回転施文し、その上下をそれぞれ上向き、下向きの連弧文によって画し、区画の外はナデ調整を施している。頸部と体部の境も交互刺突文によって区画され、体上端には２条の平行沈線を施してその下におそらくRL縄紋を地紋として最低３条の沈線による連弧文が施されている。	口縁上端に刻目が施され、その下を１条の沈線が巡る。沈線施文後にナデ調整が行われる。	長頸の甕形土器。口縁上には頂部に縦位の刻目を施した突起が付けられる。口縁は内彎外傾し、頸部境で屈曲し頸部は直立する。体部もまた頸部との境で屈曲し、その上部に緩い膨らみをもつ。	１条の沈線が巡る。
153	不明	6.5	甕	口	口縁部上端に刻目を施し、口縁全体にRLの縦走縄紋を縞状に施す。その後に口縁直下に１条、頸部あるいは体部との境に１条の沈線を巡らし、縄紋上にごく緩い波状沈線を施す。	横位のナデ調整後、口縁上端に刻目列を施す。	口縁の外傾する甕形土器。外傾の仕方は内彎するというよりは直線的であるが、口縁部の器厚自体は中膨れとなる。	なし。



第18図　縄文時代後続期の土器(13)

第13表　縄文時代後続期の土器観察表(13)

番号	出土区	器厚	器形	部位	表　面	内　面	形制上の特徴	口唇部施紋
154	LS51	7	甕	底	底部近くに斜位の刷毛目調整を施す。	横位のナデ調整。		
155	LO42	7	甕	底	底部近くに斜位の刷毛目調整を施す。底面も刷毛目調整の後、ナデ調整によって平滑に仕上げている。	横位のミガキ調整。		
156	LR50	7	甕	底	底部近くに斜位刷毛目調整。底面も刷毛目調整の後、ナデ調整。	横位のナデ調整。		
157	LR50	7	甕	底	斜位の刷毛目調整。横位のナデ調整。	ナデ調整。		
158	LN43	6	甕	体～底	体部～底部にかけて斜位の刷毛目調整を施す。刷毛目調整は体部と底部近くではその方向を変えている。体部はその後LR縄紋を横位回転施文する。底面は刷毛目調整の後、ナデ調整。	横位のミガキ調整。		
159	LS48	6.5	甕	底	斜位の刷毛目調整の後、ナデ調整。底面はナデ調整。	横位のナデ調整。		
160	LD41	8	甕	底	底部近くは斜位の刷毛目調整。底面はナデ調整。	剥落しており、不明。		
161	LN42	7	甕	底	底部近くは横位の刷毛目調整。底面はナデないしミガキ調整。	ミガキ調整。	底部中央がやや厚くなる。	
162	LN41	7.5	甕	底	底部近くは横位の刷毛目調整。底面はナデ調整。	ナデないしミガキ調整。		
163	KR42	9	甕	底	底部近くは横位の刷毛目調整。底面はナデ調整。	横位のミガキ調整。		
164	LF41	9	甕	底	底部近くは横位の刷毛目調整。底面も刷毛目調整の後、ナデ調整。	横位のミガキ調整。		
165	KS43	8	甕	体～底	底部近くは横位の刷毛目調整。体部はLR縄紋を横位回転施文。箆葉を敷いて成形しており、底面にその圧痕が残る。底面の調整は刷毛目調整を縁近くに施し、その後にナデ調整を加えている。	横位のナデないしミガキ調整。	底部中央がやや厚くなる。	
166	LN42	6.5	甕	体～底	体部にはLR縄紋を横位回転施文。底部近くは斜位の刷毛目調整。底面はナデ調整。	横位のミガキ調整。		



第19図　縄文時代後続期の土器(14)

第14表　縄文時代後続期の土器観察表(14)

番号	出土区	器厚	器形	部位	表　　面	内　　面	形制上の特徴	口唇部施紋
167	LD41	14	甕	底	底部近くはRL縄紋を横位回転施文。底面はナデ調整。	ナデ調整。		
168	LE42	6	甕	体~底	体部～底部にかけてLR縄紋を横位回転施文。底面はナデないしミガキ調整。	横位のナデないしミガキ調整。		
169	LN42	9	甕	体~底	底部近くは横位の刷毛目調整。底面はナデないしミガキ調整。	ナデ調整。	底部中央がやや厚くなる。	
170	LR51	7	甕	体~底	体部はLR縄紋を横位回転施文し、底部近くはナデ調整。底面はナデないしミガキ調整。	横位のミガキ調整。		
171	KR43	8	甕	体~底	体部には縄紋(LR縦位回転？)を施し、底部近くはナデ調整される。	横位のナデ調整。		
172	LN42	7.5	甕	底	横位のナデ調整。底部縁の張り出し部分は指頭で押さえて成形しており、その圧痕が残されている。	横位のナデなしいミガキ調整。		
173	LN42	10	甕	底	斜位の刷毛目調整の後、横位のナデ調整。底面はナデ調整。	横位のナデ調整。		
174	LE42	6.5	甕	体~底	底部近くには斜位の刷毛目調整を施し、体部～底部にかけてLR縄紋を施す。底部近くでは縄紋の回転方向は一定しない。	横位のミガキ調整。		
175	LE41	10.5	甕	底	摩耗が著しく不明。	摩耗が著しく不明。		
176	KT42	8.5	甕	底	摩耗が著しく不明。	摩耗が著しく不明。		
177	LN41	6	甕	底	摩耗が著しいが斜位の刷毛目調整痕が僅かに認められる。	横位のナデ調整。		
178	LN48	6.5	甕	台	体部との境に２条の平行沈線を巡らし、台部表面は横位の刷毛目調整の後、浅いミガキ調整。内面は横位のミガキ調整。	体部内面は横位のナデないしミガキ調整。		

（２）石器

前項（１）の土器に伴うと判断される石器には、石鏃、石錐、石匙、掻器、石篦、二次加工ある剥片、石核および磨製石斧、凹石がある。出土位置はほぼ、前項（１）の土器の出土位置と重なるが、帯郭北西斜面下の平坦面中央でも数点出土している。

石鏃（第20図１～４）　４点が出土している。有茎のもの２点、柳葉形のもの２点であり、いずれも黒色～灰白色の頁岩あるいは硬質頁岩を用いて製作されている。両面から丹念な押圧剥離を施して素材の加工をおこなうが、１，３，４では片面中央に素材剥片の主要剥離面の一部が残されている。

石錐（第20図５～11）　７点が出土している。黒色～灰色頁岩あるいは黄白色瑪瑙を用いて製作されている。１点は本体部分から錐部にかけて両面からの押圧剥離で丹念な整形をおこなって製作されているが、他の６点は縦長あるいは一端の尖った剥片を素材として、錐部先端に片面のみの剥離を加えて製作されている。

石匙（第20図12・13、第21図14・15）　４点が出土している。縦型１点、横型２点および横型石匙の撮部分の破片１点である。灰～黒色の頁岩を使用し、撮部は両面から、刃となる部分はおもに片面からの加工を施している。

掻器（第21図16～19）　４点が出土している。黒褐色～暗灰色の頁岩あるいは白色瑪瑙の薄手の縦長剥片を使用し、その側縁および端部に両面からの加工を施して刃部に作り上げている。

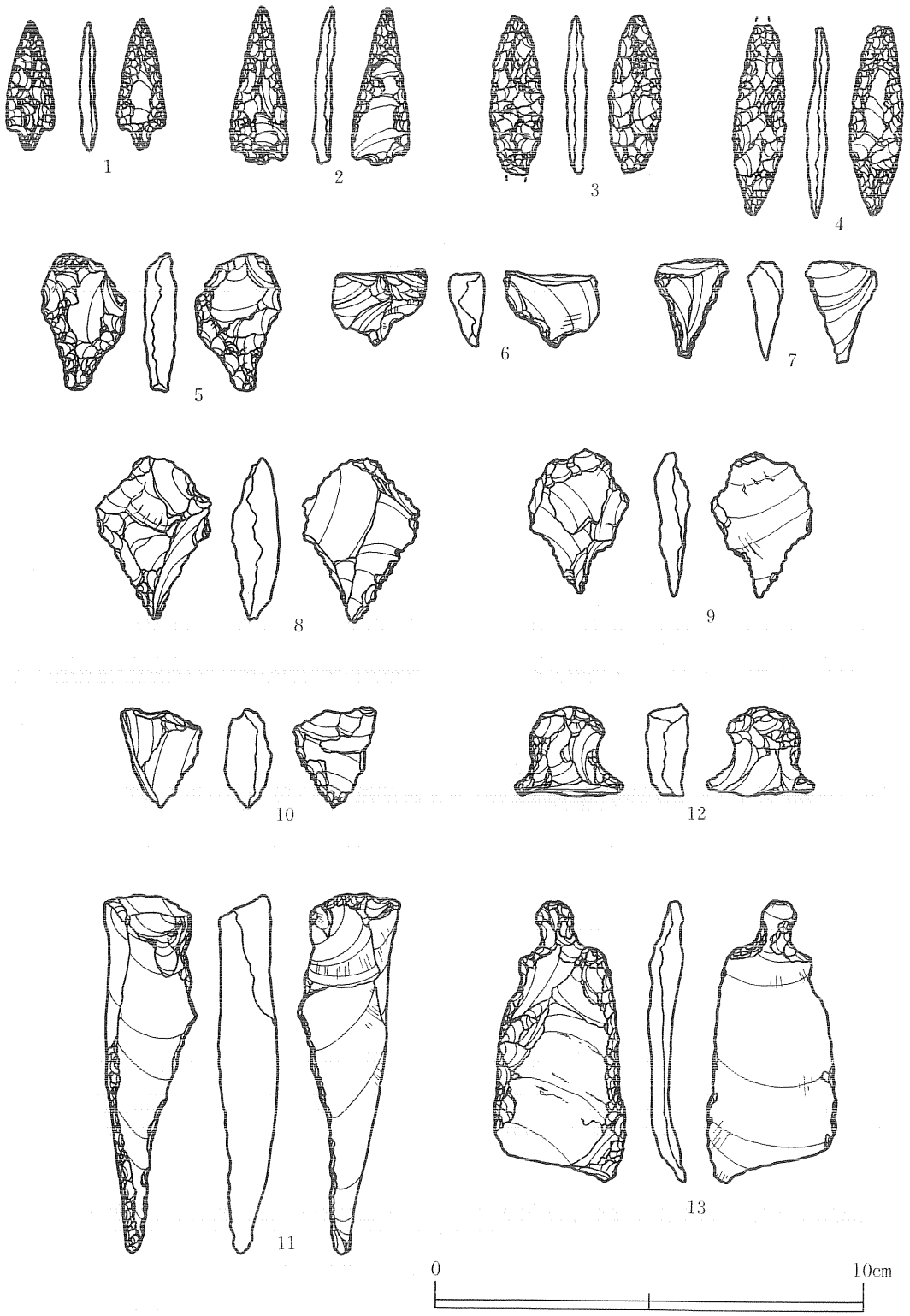
石篦（第21図20・21）　２点が出土している。灰白色～黄白色の頁岩製の肉厚な剥片を素材として用い、主としてその背面に加工を施して整形している。

二次加工ある剥片（第22図22～第24図43）　灰白色～暗灰色の頁岩製剥片を素材とし、その一部に加工を施したり、素材の両面を粗い剥離で加工した石器22点が出土している。中には楔形石器とし得るような例や、両面加工石器からとられた大形の剥片も含まれている。

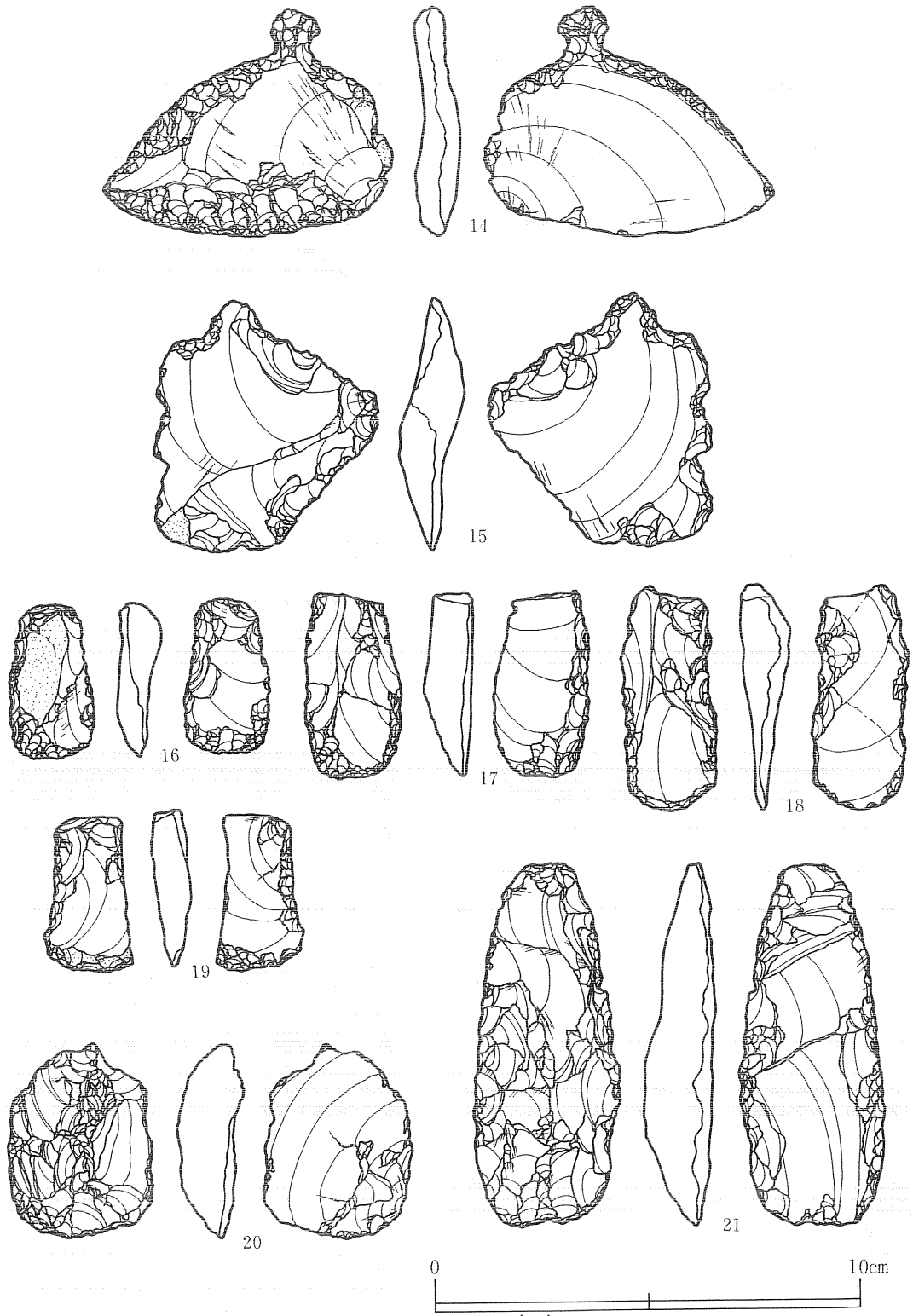
石核（第24図44～48）　５点が出土している。いずれも灰色～黒色の頁岩ないし珪質頁岩製の石核であり、小形の剥片が剥離されている。45～48は最終段階まで剥離された石核である。

磨製石斧（第25図49・50）　２点が出土している。49は硬質の緑色凝灰岩、50は蛇紋岩製である。いずれも器体中央部から基部を失った折損品である。49は使用による損耗と刃部再生の結果、刃縁が直線的なものとなっている。

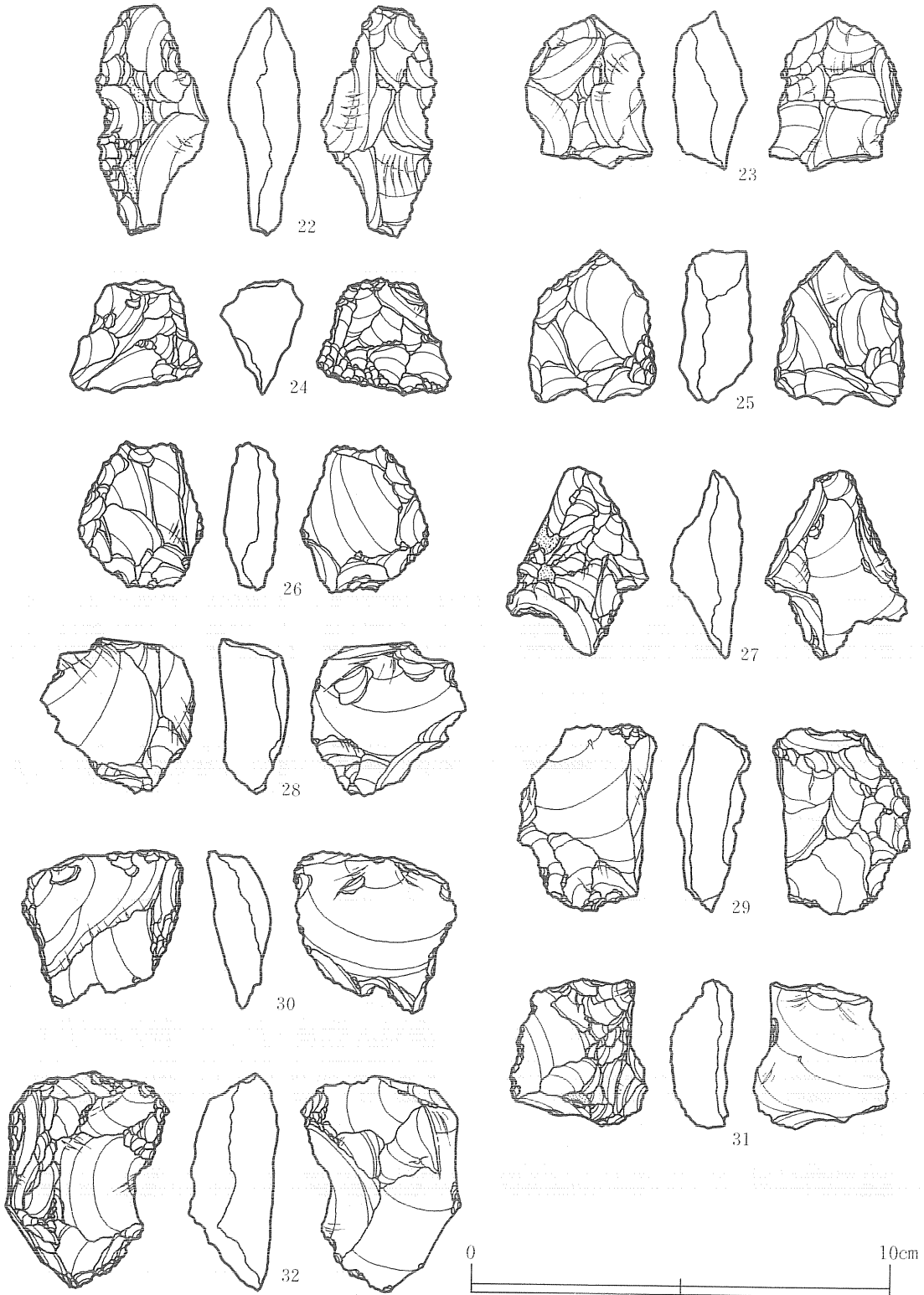
凹石（第25図51）　１点が確認された。泥岩製の偏平礫片面に３箇所の凹みが認められる。破断面近くの１箇所が最も深く抉れている。また、一側縁に折損後の加撃痕を残し、さらに凹みのある面と反対側に被熱による煤状の炭化物の膠着が認められる。



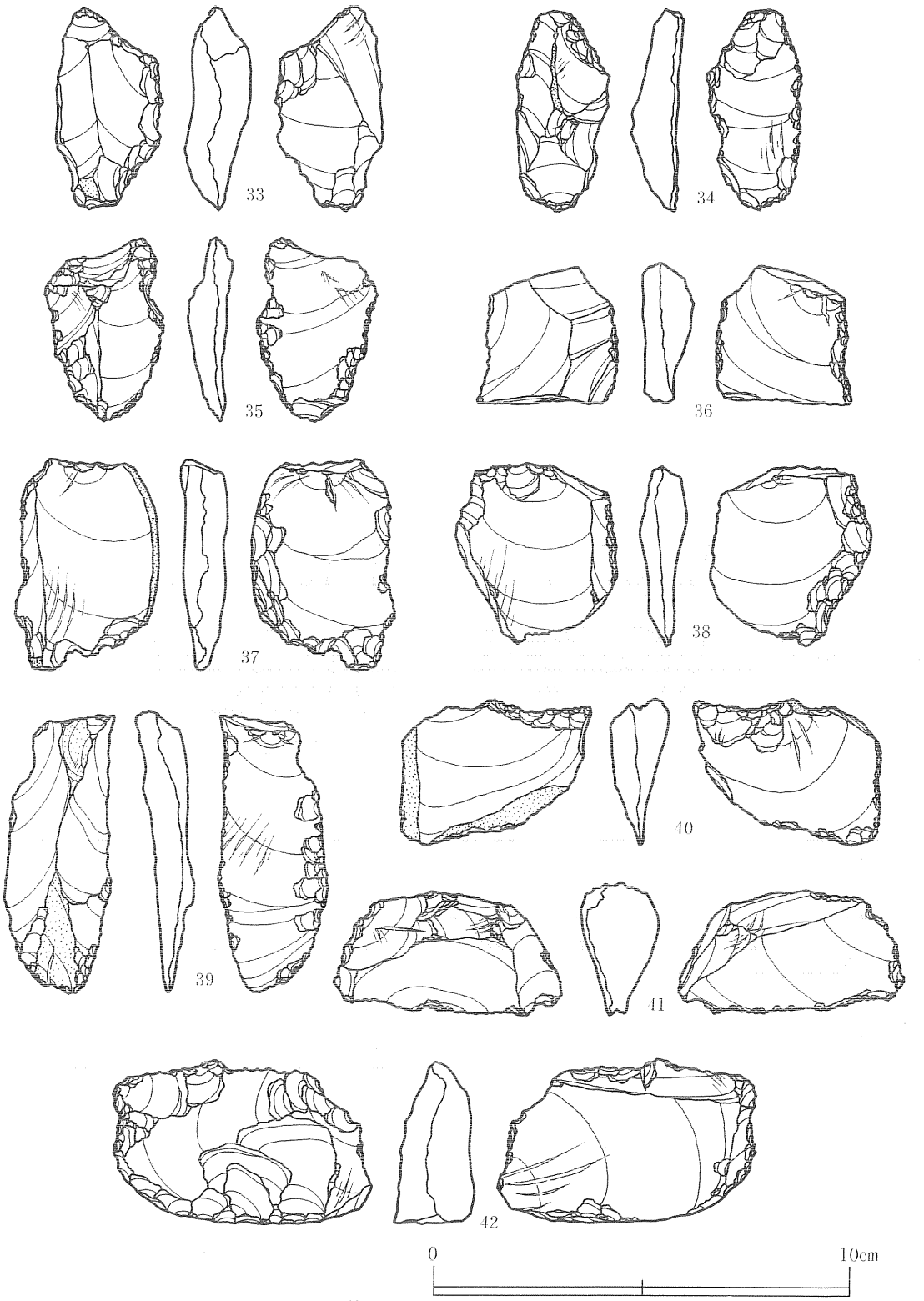
第20図　出土石器（１）



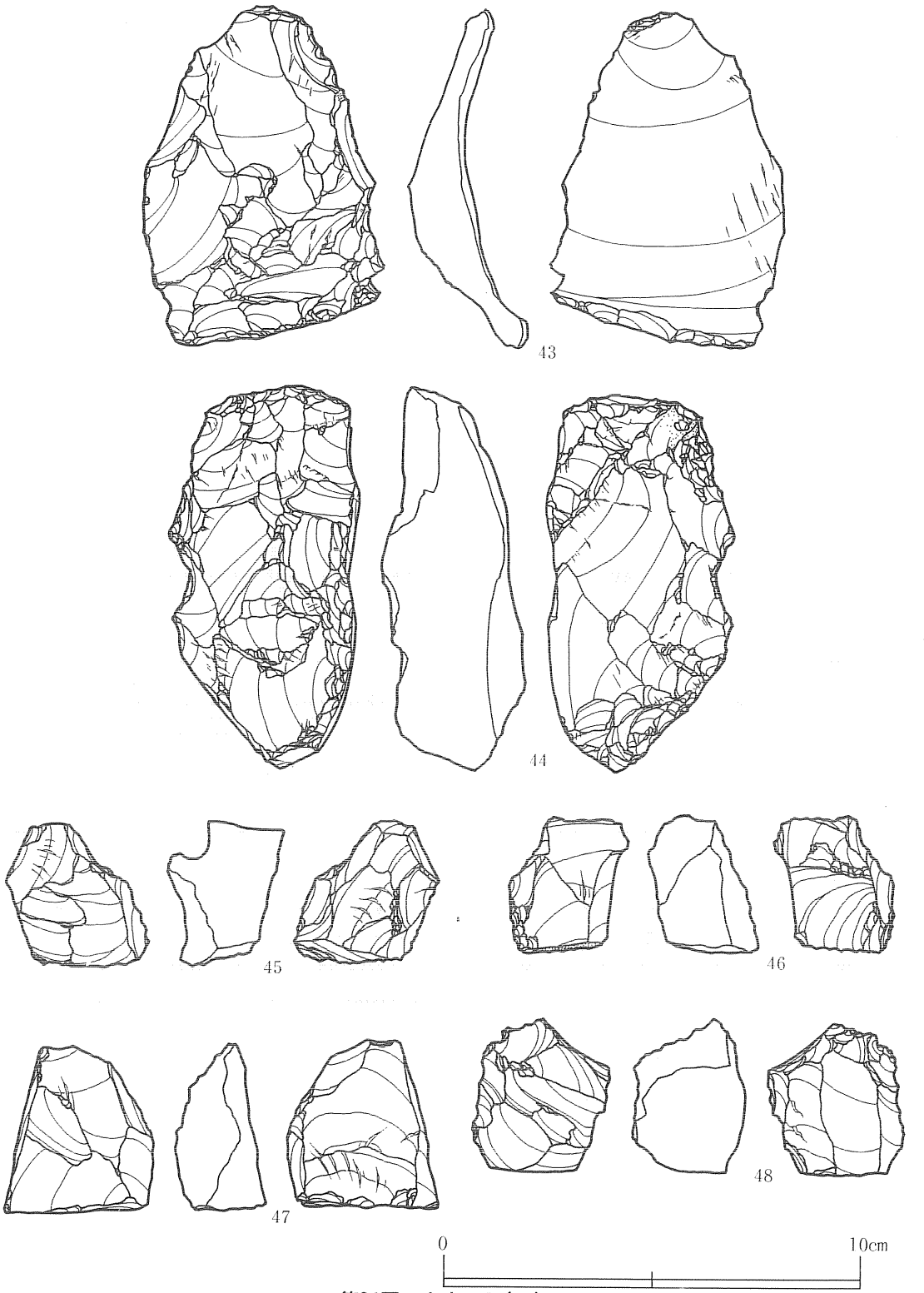
第21図　出土石器（２）



第22図　出土石器（３）



第23図　出土石器（４）



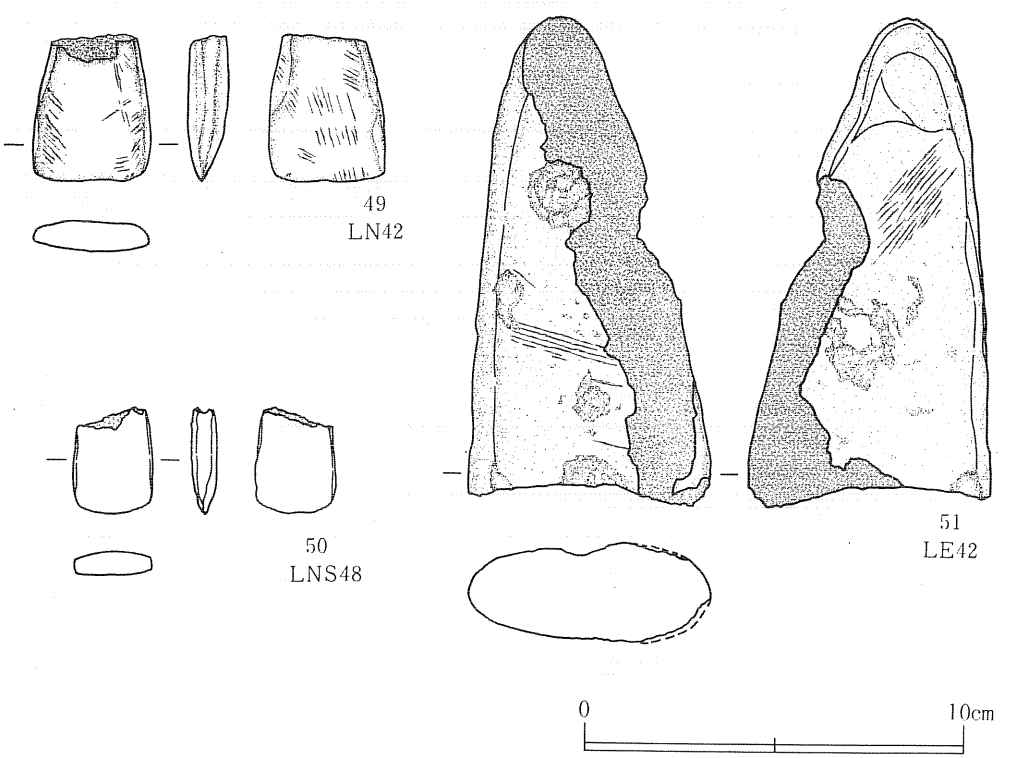
第24図　出土石器（５）

第15表　出土石器観察表（１）

図番号	グリッド	種　別	観　察
1	LN42	石鏃	灰白色珪質頁岩。有茎。一面（平坦になる方）に素材の腹面を残す。
2	LN41	石鏃	灰色頁岩。有茎。一面（平坦になる方）に素材の腹面を残す。茎部欠損。
3	LN42	石鏃	灰白色頁岩。柳葉形。鋸歯縁。一面の先端に素材礫面を残す。
4	LO42	石鏃	黒色珪質頁岩。柳葉形。先端部損。
5	MB47	石錐	黒色頁岩。錐部先端は折損。撮部から錐部にかけての両側縁を両面から加工して整形し、錐部を作り出す。
6	LS50	石錐	灰色珪質頁岩。剥片の一部（右下側末端）を利用し、右側縁側に小さな錐部を作り出す。錐部は折損。
7	LR50	石錐	黄白色瑪瑙。打面側に礫皮面を残す剥片先端に腹面からの加工を施して錐部を作り出した石器。加工は腹面からのみに限られる。
8	LO41	石錐	黒色珪質頁。節離面を多く含む剥片であり、錐器状に加工された石器。剥片の一方を折断した後、折断縁と鋭角に交わる側縁表裏面に二次加工を施して尖端部を作り出す。
9	表採	石錐	黄白色瑪瑙。錐器状石器。末端右下縁を折断し、折断縁と鋭角に交わる縁の腹面側から背面に向けて二次加工を施して、打面反対側に尖端部を作り出した石器。
10	LP47	石錐	灰白色瑪瑙。肉厚剥片の先端腹面側に連続した細かな剥離を施し、錐器状に加工した石器。
11	LO42	石錐	黒灰色頁岩。断面三角形の剥片の下半部に細部加工を施して錐部を作り出している。加工は左側縁側では背面から腹面に向けて、右側縁側では中央を腹面から背面に向けて、下部を背面から腹面に向けて加工している。
12	LD41	石匙	灰白色頁岩。縦型石匙の撮部の破片。素材の打面が頭部に残り、その両側を抉り込んで撮部を作り出している。
13	LS51	石匙	灰白色珪質頁岩。縦型石匙。素材の打面側に撮部を設ける。細部加工は、撮部の抉部については素材腹面側でもなされるものの、本体部分では背面側に限られる。
14	MC45	石匙	黒色珪質頁岩。横型石匙。撮部から右側縁にかけて素材剥片の礫皮面が残る。撮部及び上縁は表裏両面の加工、下縁は素材の背面のみの加工。素材の打面は右側縁下部。
15	LM42	石匙	黄灰白色珪質頁岩。素材剥片周縁を粗雑な剥離によって整形し、その末端左側に撮部を作り出す。撮部の作り出しは左側は両面とも、右側は主に背面から腹面に向かっての剥離を施している。右下縁は腹面から背面への剥離を施している。
16	LE41	掻器	暗灰色頁岩。礫皮面を残す縦長剥片の側縁及び末端に細部加工を施して石器としている。細部加工は右側縁は背面から腹面に向けて、左側縁は腹面から背面へ向けて、末端は背面腹面ともに加工して刃部を作り出している。素材の打面は残されている。
17	LO42	掻器	灰白色瑪瑙。一側縁を折断した剥片の他方の縁に背面側から細かな細部加工を施して掻器に加工している。
18	LO43	掻器	白色瑪瑙。横長剥片の一端に加工を施して刃部を作り出している。刃部の加工は素材の腹面側から背面側に向けて行われており、基部側の側縁（素材の打面側及末端側）にも粗い剥離が加えられている。基部端は素材剥片の一方を背面からの加撃で折断したままの状態が残されている。
19	LE41	掻器	黒褐色珪質頁岩。左側縁及び末端に細部加工を施して刃部を作り出している。右側縁は節離面がそのままに残され、又、素材の打面も残されている。
20	MB48	石篦	灰白色頁岩。肉厚幅広の剥片を素材とし、その背面に整形のための剥離を施す。腹面側には加工を施さない。
21	LB40	石篦	黄灰色頁岩。肉厚の横長剥片を素材とし、その背面に整形の加工を施す。腹面側の両側縁にも平坦な剥離が連続的に施されるが、中央部までは及んでいない。
22	LN42	二次加工剥片	灰色頁岩。肉厚の剥片の両面ともに粗く大きな剥離を加えた尖頭器状石器の未製品？素材の形状は大きく変えられている。
23	LO42	二次加工剥片	暗灰色珪質頁岩。素材剥片の両面を粗い剥離によって加工した石器。一部の加工には折断も行われている。
24	MA46	二次加工剥片	暗灰色珪質頁岩。両極剥法による細かな連続剥離が裏面上下端に残される。楔形石器？
25	LQ49	二次加工剥片	灰色頁岩。肉厚の素材を用い、四周から粗い剥離を施している。図左面右縁が鋭く作り出されている。
26	LS51	二次加工剥片	灰色頁岩。礫皮面を残す剥片を素材とし、その一側縁側に背面、腹面交互の剥離を加えて刃部を作り出す。素材の他方の側縁は無加工のまま礫皮面をとどめる。
27	LN40	二次加工剥片	灰白色頁岩。肉厚剥片の下端の腹面側に４面、背面側に２面の剥離を加えた石器。素材の打面は残される。
28	LE41	二次加工剥片	灰白色頁岩。肉厚幅広の剥片を素材とし、その下端側に背面から数回の剥離を加えて、刃縁を作りだした石器。素材の打面はそのままに残される。
29	LE41	二次加工剥片	黒色珪岩。肉厚剥片の背面側末端に二次加工を施した石器。素材の打面は残る。
30	LS49	二次加工剥片	灰白色頁岩。比較的肉厚の剥片の両側縁及び下縁に粗い二次加工を施す。両側縁は腹面から背面に向かって、下縁は背面からと腹面からとの加工が一面づつ施される。打面は残される。
31	LN42	二次加工剥片	暗褐～黒色頁岩。肉厚の剥片の下半を折断した石器。左側縁側は刃部が認められる。
32	LR49	二次加工剥片	黒色頁岩。肉厚の剥片の右側に背面側からの加撃で大きな平坦面を作り出し、そこを打面として剥離を背面側に施した石器。背面側の加工も右肩の突出部以外は大きな剥離面をなす。素材の打面を残す。
33	LE41	二次加工剥片	黄灰色頁岩。右側縁の背面、腹面に二次加工剥片加工が施される。素材の打面側は折断されている。
34	MB47	二次加工剥片	灰色頁岩。肉厚の縦長剥片の腹面側両側縁に細部加工を施した石器。
35	LF42	二次加工剥片	灰色頁岩。比較的薄手の縦長剥片を切断し、側縁に二次加工を施した石器。加工は右側縁腹面側で顕著であるが、背面側でも右側縁上部や左側縁に部分的に施されている。
36	LR48	二次加工剥片	灰色頁岩。打面を残す縦長剥片の両側縁に背面から腹面に向かって連続した小剥離を施す。末端側は折断されている。
37	KS42	二次加工剥片	黄灰色頁岩。打面を残す縦長剥片の両側縁から末端にかけて二次加工を施す。左側縁は腹面から背面に向けて、礫皮面を残す右側縁は背面から腹面に向けて、末端は背面、腹面両面に剥離を施している。
38	LE41	二次加工剥片	黒～灰色珪質頁岩。両側縁に礫皮面を残す縦長剥片に二次加工を施す。左側縁側は背面から腹面側に向かって比較的粗い剥離を施し、右側縁は腹面から背面に向かって細かな剥離を連続して施している。末端は折断されている。

第16表　出土石器観察表（２）

図番号	グリッド	種　別	観　　察
39	LD41	二次加工剥片	灰色珪岩。礫皮面を残した縦長剥片の側縁に細部加工を施した石器。加工は左側縁の腹面に顕著であるが、右側縁背面側下端近くにも施されている。素材の打面を残す。
40	LM42	二次加工剥片	灰～黄灰色頁岩。末端に礫皮面を残す横長剥片の打面右側の縁に背面、腹面ともに加工を施す。背面側の加工は連続した剥離。
41	LR49	二次加工剥片	暗灰色頁岩。打面側を折り取った肉厚剥片の腹面側に細かな連続剥離を加えた石器。
42	LN43	二次加工剥片	灰色頁岩。下端から左側縁にかけて礫皮面を残す剥片の打面側を折断し、その折断面に背面側からの細部加工を施している。
43	KS40	二次加工剥片	灰色頁岩。両面加工石器の側縁から加撃してとられた剥片。上下端には石核の裏面側が残される。背面に残された先行剥離面から剥片がとられた石核は円盤状のものと推定される。
44	MC48	石核	灰色頁岩。剥片の剥離は石核の四周から行われているが、ことに左側縁は両面からの錯向する剥離によって小形の剥片がとられている。
45	LD41	石核	黒色珪質頁岩。礫皮面残さず。
46	LE42	石核	灰～暗灰色珪質頁岩。礫皮面を残す。
47	LD41	石核	暗灰色頁岩。礫皮面残す。
48	MG49	石核	灰～灰白色珪質頁岩。礫皮面残す。



第25図　出土石器（６）

第２節　古代の遺物

（１）土器

須恵器

器種は坏・甕である。

＜坏＞（第26図１・２）

１は体部から底部にかけての小破片であり、底部の切り離しは回転ヘラ切りである。２も底部の破片であり、底辺に沿って高台がついている。底部の切り離しは回転ヘラ切りで高台周辺にナデが施されている。

＜甕＞（第26図３～12）

器形は判然としないが、中形あるいは大形の甕の胴部破片と推定される。

ここでは器の表面および内面にみとめられる器面調整痕によって分類した。

ａ：表面には横および斜め方向の平行直線状の叩き目、内面に斜めあるいは同心円状の当て具痕がみられる。３は胴部上位の破片であり、４・５・６は胴部中位の破片である。(註１) なお６の平行直線状叩き目には、直交する木目痕がみえる。

ｂ：表面には斜め方向の平行直線状の叩き目、内面は刷毛目状の調整痕がみられる。７は胴部上位の破片である。

ｃ：表面には斜め方向の平行直線状の叩き目を交差させており、内面は幾分凹凸がみられるが、ナデ調整されている。８は胴部上位の破片である。平行直線状叩き目には、直交する木目がみられる。

ｄ：表面には斜め方向の平行直線状の叩き目が見られ、叩き目の方向をかえて綾杉状あるいは格子状にしている。内面はナデ調整されている。９・10は胴部中位の破片である。

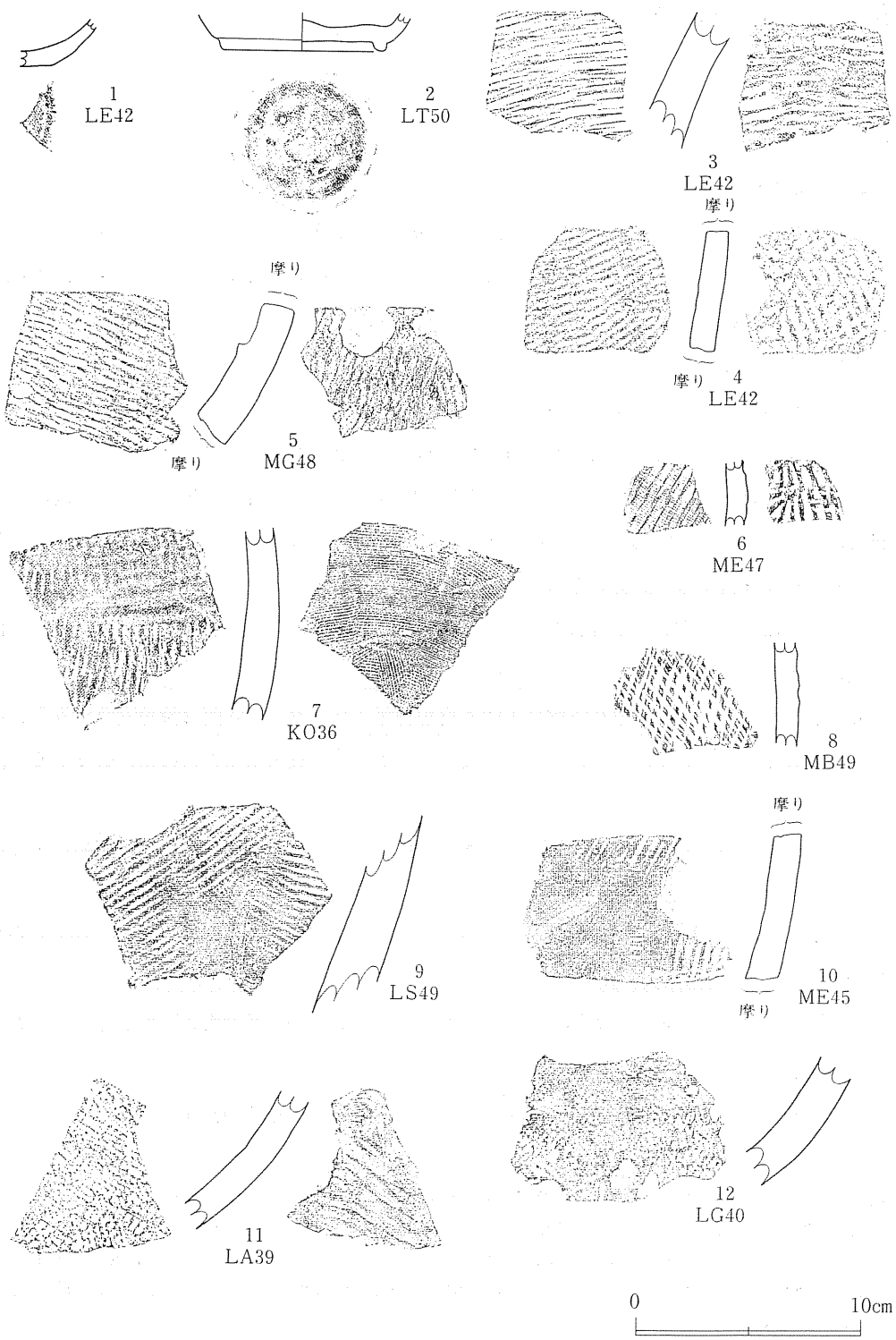
ｆ：表面に細かい格子状の叩き目が、内面には同心円状の当て具痕がみられる。11は丸底を呈する底部の破片と思われる。

ｇ：表面には細かい格子状の叩き目がみられるが、内面は指ナデ調整されている。12も丸底を呈する底部の破片とみられる。

以上須恵器坏及び甕については、８世紀後半から９世紀代の年代が推定される。(註２)

(註1) ４・５・10の断面がいずれも摩られており、破片を砥石に転用したと思われる。

(註2) 小松正夫『第18回古代城柵官衙遺跡検討会資料－秋田城跡とその周辺地域の土器様相』を参考にし、坏については体部がやや丸みをもつこと、高台にナデ調整がされていることから、８世紀後半の年代を想定した。甕類はいずれも胴部の一部であり、器面調整に際だった特徴がみられないことから坏の年代とほぼ同時期と想定した。


1
LE42
2
LT50
3
LE42
摩り
摩り
4
LE42
摩り
摩り
5
MG48
6
ME47
7
KO36
8
MB49
9
LS49
摩り
10
ME45
摩り
11
LA39
12
LG40
0
10cm

第26図　古代の土器

第３節　中世の遺構と遺物

（１）検出遺構

館の上館遺跡第Ⅰ郭北端の帯郭部分で、溝跡６条と、土坑1基を確認した。溝跡は北側からSD10、SD11、SD12、SD13、SD14、SD15とし、土坑についてはSK01の番号をふり当てた。

調査以前、この帯郭部分は館の上館第Ⅰ郭から突きだした狭小な平坦部として見ていたが、調査の結果、上記の溝跡が第Ⅰ郭外縁から順次内側に向かって作り替えられ、城館の廃絶とともに埋没した結果、狭い平坦面として残されたものであることが確認された。

重複する溝跡の関係は、SD10～SD14までは溝跡本体に切り合い関係が確認され、その順に新しい。また、SD15については直接の切り合い関係はなかったものの、溝の構築を考慮すれば溝跡中で最も新しいものと判断された。また、溝跡の北側にはごく狭い平坦面があり、溝跡同様に郭面造成に伴って形成されたことが推測されたが、上面での遺構確認はなかった。

SD10

帯郭上面の最も外側を巡る。基底面での幅1.3ｍ、確認面からの深さ0.65ｍを測る。南側に沿ってSD11が重複しており上面幅は不明であるが、基底面から僅かに残る立ち上がりの延長で復元すればおそらく３ｍ前後の幅はあったであろう。断面形は偏平な逆台形を呈する。溝跡の東側延長は帯郭の付け根に沿って彎曲するが、一部屈曲する部分もある。また、調査区の東端近くではSD14から屈曲して斜面へ向かう溝跡によって切られている。西側延長はSK01のさらに西側の段状に巡る平坦面へと連続する。

SD11

SD10に重複してその南側を巡る。基底面での幅0.9ｍ、確認面からの深さ0.6ｍを測る。南側の縁をSD12によって切られているが、基底面の立ち上がりから上面幅は2.5ｍ前後に復元される。断面形はSD10同様、偏平な逆台形を呈する。SD11はSD10にほぼ沿うように巡り、溝の掘り方の大半はSD10の覆土内につくられている。東側延長はSD10の掘り方をほぼそのまま利用している。

SD12

SD11の南側を巡る溝跡。西側のほとんどがSD13に切られており、東側部分のみの確認である。基底面での幅1.1ｍ、確認面からの深さ0.6ｍ、上面幅1.6ｍを測る。断面形は逆台形を呈するが、西側に向かうに従いSD10、SD11同様、偏平な逆台形に移行する。

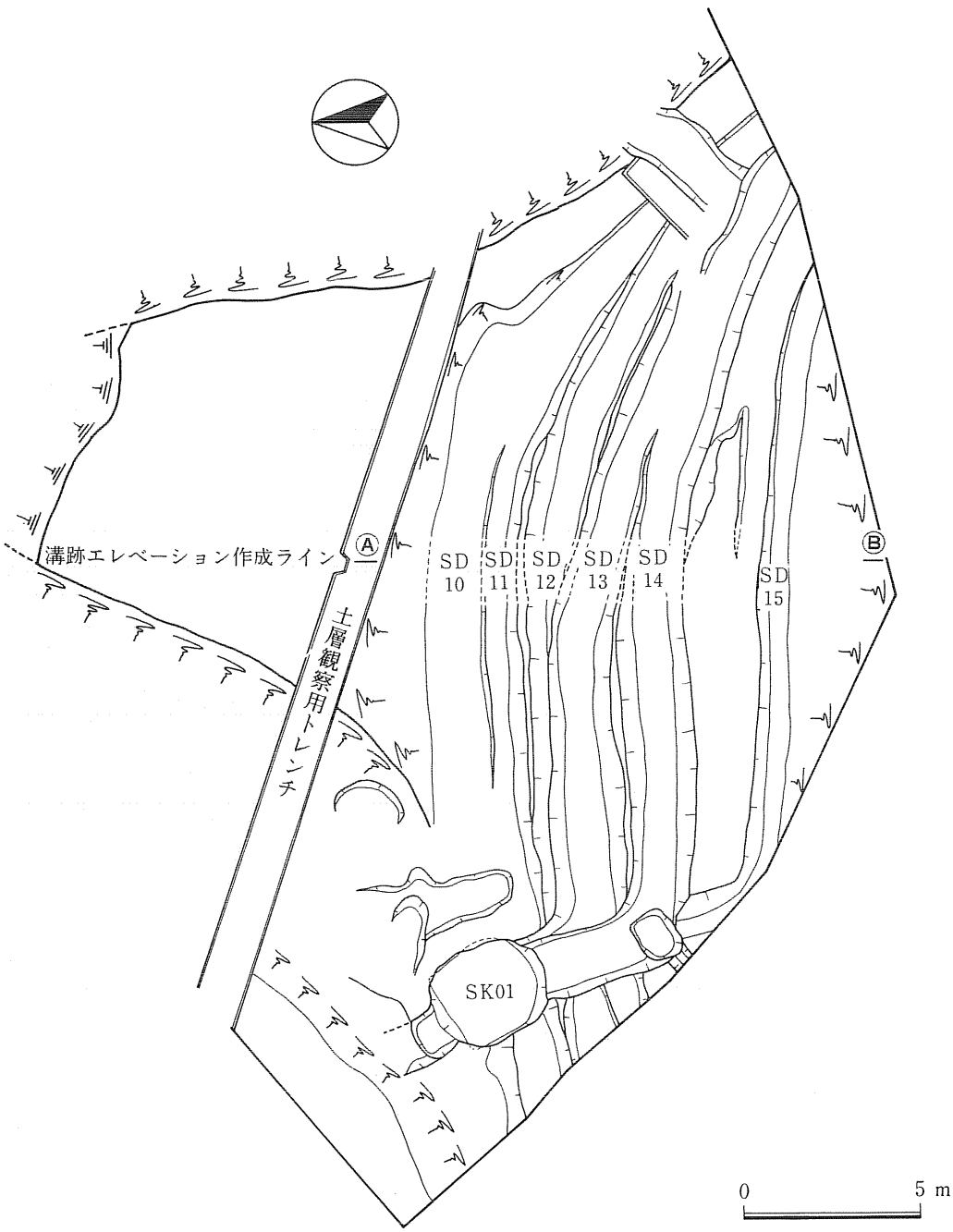
SD13

SD12の南側を巡る溝跡。西側ではSD12の掘り方をそのまま使ってつくられており、また東端部はSD14にその大半を切られている。基底面での幅0.94ｍ、確認面からの深さ1.06ｍ、南側にSD14が重なるが、基底面からの立ち上がりで復元できる上面幅は2.1ｍ前後と推定される。断面形は逆台形を呈する。溝の延長西端は屈曲して斜面へ向い、さらにそれを越えて段状の平

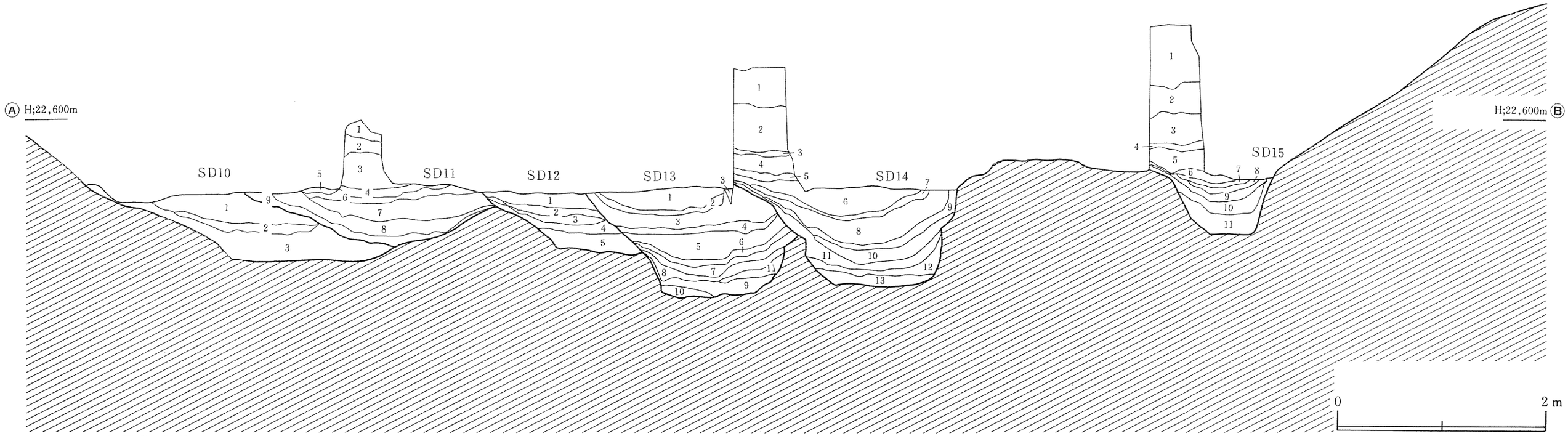
坦面へも続いている。

SD14

SD13の南側を巡る溝跡。重複し合う溝跡５条のうちでは最も南側を巡る。基底面での幅0.9m、



第27図　帯郭上面全体図



帯郭上面溝跡土層註記

ＳＤ10　1　10YR5／8黄褐色　砂　土質は硬いが脆い。微細な植物根が多く、10YR6／8明黄褐色の砂質土と全体に混じりあい、2.5Y5／6黄褐色の粗い砂質土も小さな塊状で混入している。

2　10YR5／6黄褐色　砂　土質は硬くしまっている。小さな粘土塊が全体に混じっている。

3　10YR5／6黄褐色　砂　SD10の２とほぼ同じ土質だがわずかに青味が強い。

ＳＤ11　1　10YR5／6黄褐色　砂　土質はやわらかく脆い。植物根が多い。

2　10YR5／8黄褐色　砂　土質は軟質で植物根が多い。10YR6／8明褐色の砂質土と混じっている。

3　10YR5／6黄褐色　砂　土質は軟質で植物根が多い 2.5Y7／4浅黄色の塊状の砂質土や10YR5／6黄褐色の粒状の粘質土などが全体に混じっている。

4　10YR5／6黄褐色　砂　土質は軟質で植物根が少しみられる。粘質土が多く混入している。

5　10YR3／3暗褐色　シルト　土質は軟質。10YR5／6黄褐色の砂質土が少し混じっている。

6　10YR5／6黄褐色　砂　土質はSD11の４とほぼ同じだが粘質土の黄味が強い。植物根が少しみられる。

7　10YR5／6黄褐色　砂　土質は軟質。粒状の粘質土が多く混入している。2.5Y4／6オリーブ褐色の砂も塊状で多く混じるため、SD11の６よりわずかに青味が強い。

8　10YR5／6黄褐色　砂　土質はSD11の７とほぼ同じだが2.5Y4／6オリーブ褐色の砂より粘質土の方が混入率が高い為、幾分赤みがかっている。植物根が少しみられる。

9　2.5Y4／6オリーブ　砂　土質は軟質。10YR4／6褐色の粘質土の粒が全体にちらばり、10YR6／8明黄褐色の脆い砂質土も少し混じっている。

ＳＤ12　1　10YR5／6黄褐色　砂　土質は硬質。微細な植物根が多い。10YR6／8明褐色の砂質土も少し混じっている。

2　10YR4／6褐色　砂　土質は硬質。10YR5／6黄褐色の粘土が全体に細かくちらばり、10YR5／8黄褐色の砂質土が帯状で混じっている。

3　10YR5／6黄褐色　砂　土質は硬質。7.5YR5／6明褐色の粘質土が全体に大量にちらばっている。10YR4／4オリーブ褐色の砂質土が塊で少量混入している。

4　10YR4／6褐色　砂　土質は硬質。10YR5／6黄褐色と10YR4／3にぶい黄褐色の粘質土が層状に混じっている。

5　10YR4／6褐色　砂　土質は硬質。全体に不均質で、7.5YR5／4にぶい褐色の粘質土と、2.5Y4／5オリーブ褐色の砂質土とが入り混じっている。途中、7.5YR5／8明褐色の砂質土の塊が入っている。

ＳＤ13　1　10YR5／6黄褐色　砂　土質はかたいが脆い。植物根はほとんど見られない。

2　10YR3／3暗褐色　シルト　土質はやわらかい。層の半ばまではＳＤ13の1とほとんど同じ土質。

3　10YR5／6黄褐色　砂　土質は軟質。N1.5／0黒色の砂質土の小さな粒がまばらに散っている。7.5YR5／6明褐色の粘質土が多く、2.5Y4／6オリーブ褐色の砂質土と混じりあっている。

4　10YR5／6黄褐色　砂　土質は軟質。2.5Y4／6オリーブ褐色の砂質土が少し塊状で混じっている。

5　10YR5／6黄褐色　砂　植物根の多い部分は土質がやわらかい。10YR2／3黒褐色のシルトが小さな粒でまばらに散らばり、7.5Y5／6の粘質土と2.5Y4／6の砂質土とが入り混じっている。7.5YR5／8の砂質土も小さい砂の塊で若干量存在する。

6　10YR5／6黄褐色　砂　土質はSD13の５とほとんど同じだが、わずかに2.5YR4／6の砂質土の占める割合が大きい。N1.5／0の小さな粒も見られる。植物根が多い。

7　10YR4／6褐色　砂　土質はSD13の６とほとんど同じだが、7.5Y5／6の粘質土の占める割合がわずかに大きい。2.5Y4／6の砂質土が大きな塊状で混入している。植物根多し。

8　10YR4／6褐色　砂　土質はSD13の７とほとんど同じだが、7.5Y5／6の粘質土の占める割合が幾分小さい。白色粉状の貝化石が全体にちらばっている。

9　10YR4／6褐色　砂　土質硬くしまっている。10YR4／3にぶい黄褐色のシルトが混じっている。SD13の８より青味の強い土色である。微細な植物根あり。

10　10YR5／6黄褐色　砂　土質は硬くしまっている。10YR3／2黒褐色のシルトの粒が見られる。

11　10YR4／6褐色　砂　土質はやわらかく、微細な植物根がある。SD13の8とほぼ同じ土色。

ＳＤ14　1　10YR4／4褐色　砂～シルト質土。軟質で脆い。植物根の多い表土層。

2　10YR6／6明黄褐色　砂質土　比較的よくしまる。白色粒(貝類の遺存体)が多く混じる。植物の混入は１層に比べ少ない。

3　10YR6／8明黄褐色　硬くしまった砂質土。２層よりも粗い。

4　10YR4／6褐色　砂～シルト質土。比較的よくしまっている。砂質土をベースとして暗褐色の粘土ブロックを混入する。

5　10YR5／6黄褐色　砂質土　性状は4層に近いが、粘土ブロックはより細かなものである。

6　10YR5／6黄褐色　砂質土　軟質で脆い。粘土ブロックが細かくおよそ半分の面積割合で混じる。

7　10YR4／6褐色　砂質土　比較的硬くしまった土。青味がかった砂質土が主体で、下部に褐色粘土ブロックを混入。

8　10YR4／4褐色　砂～シルト質土　やや軟質。青味がかった砂をベースとし、粘土ブロック、黒褐色シルト質土を混入。

9　10YR5／6黄褐色　砂質土　比較的しまる。粘土ブロックの混入は小量。

10　10YR5／8黄褐色　砂質土　軟質。粘土ブロックが半量以上混入。黒褐色シルト上部に少量混じる。

11　10YR6／8明黄褐色　砂～シルト質土　比較的よくしまっている。粘土ブロックが2／3以上混入。

12　10YR4／6褐色　砂質土　青味がかった砂を主体とし、粘土ブロックの混入はほとんどない。軟質。

13　10YR4／6褐色　シルト質　比較的しまっている。粘土ブロック、黒褐色シルト、青味がかった砂がほぼ等量づつ混じる

※青味がかった砂(オリーブ褐色の砂)、砂質土上部の粘土層由来の黄褐色粘土ブロック、それに少量の黒褐色シルトが少しづつ混入割合を変えて堆積する。

ＳＤ15　1　10YR4／6褐色　砂～シルト質土　軟質で脆い。植物根の多い表土層。

2　10YR3／4暗褐色　シルト質土　比較的しまっている。植物根多い。

3　10YR6／8明黄褐色　砂～シルト質土　よくしまっている。白色粒、砂ブロックを含む。

4　10YR5／6黄褐色　砂～シルト質土　軟質。

5　10YR5／6黄褐色　粘土～シルト質土　比較的よくしまる。粘土ブロックの混入割合半量以上。

6　10YR4／6褐色　砂～シルト質土　きわめて硬くしまっている。粘土極小ブロックが砂質土中に混入。一時的な生活面を示すか？

7　10YR5／8黄褐色　砂～シルト質土　比較的硬くしまる。粘土ブロックが半量程混入。

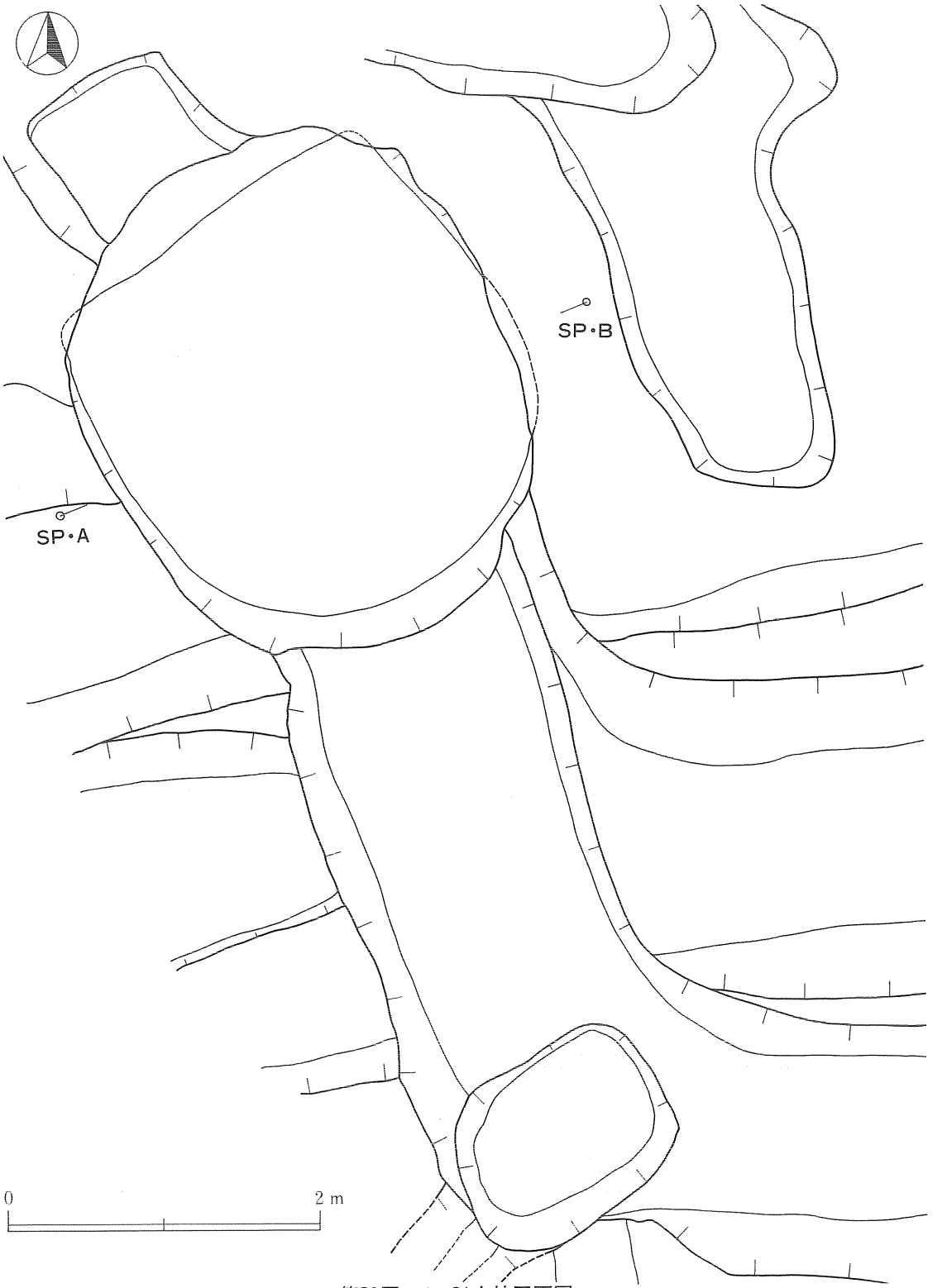
8　10YR4／4褐色　砂質土　孔隙僅かにあって軟質。粘土ブロックが少量混じる。

9　10YR5／6黄褐色　シルト～粘土　比較的硬くしまる。粘土ブロックの混入割合多く2／3以上。

10　10YR5／6黄褐色　砂～シルト　軟質　粘土ブロックが細かく1／2以下で混入。

11　10YR4／6褐色　砂　比較的よくしまる。粘土ブロックの混入なし。

第28図　帯郭上面溝跡土層断面図



第29図　SK01土坑平面図

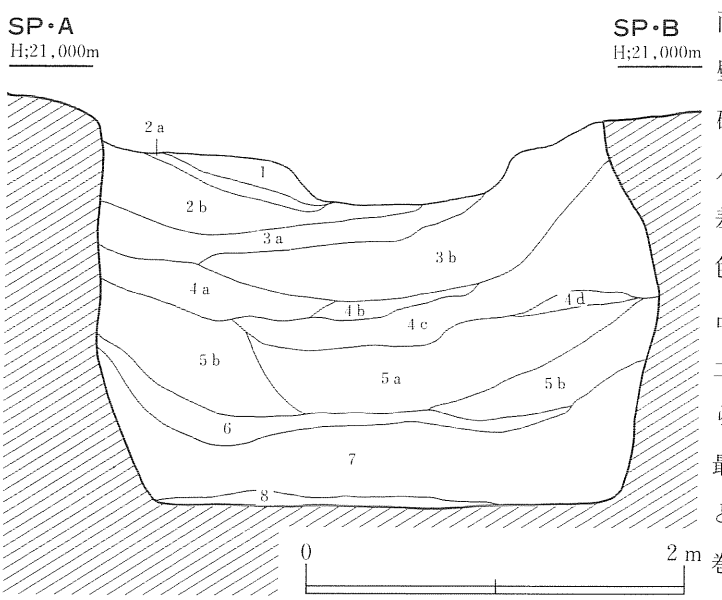
確認面からの深さ0.96ｍ、上面幅2.4ｍを測る。断面形はSD13とほぼ同様の逆台形を呈する。SD14西端はSD13同様、屈曲して斜面へ向かっており、さらに西側の段状の平坦面へも続いている。また、東端でも屈曲して斜面へ向かう部分が確認された。西端の屈曲部は帯郭西肩部分に位置するSK01と重なるが、後述するようにSK01は本来地下式坑であったと考えられ、その直接の重複関係は確認できなかった。

SD15

SD14の南側を巡る溝跡。西端はSD14の西端屈曲部に連結しており、それより先はSD14の掘り方に重なる。SD14の連結部溝底には1.4×1.1ｍ、深さ0.2ｍの土坑状の掘り込みがある。SD15の南側は現在残る第Ｉ郭からの急崖に連続する。

SK01（第29図、第30図）

帯郭上面西肩部分、SD14の屈曲部分に重なる位置にある。斜面に向いた側に幅１ｍ、長さ0.7ｍ、深さ0.15ｍの入口が付き、入口側の壁および両側壁が直線、奥壁は円弧となってまわる。両側壁間は2.6ｍ、入口側の壁と最奥部との間は2.7ｍ、確認面からの深さ２ｍを測り、入口部分との間には0.25ｍの差がある。遺構内の埋土は褐色～黄褐色の砂質土によって占められてり、基本的に地山土の崩落土である。遺構外からの流入土は極端に少なく、最下層に薄層をなす暗褐色土と埋没中に砂質土ブロックを巻き込んで流入した暗褐色土に限られる。このことから、本遺構は本来その上部が開口していたものではなく、天井部をもった掘り抜き式の地下式坑であったと判断される。溝跡との関係では、少なくとも本土坑の埋没後にSD14が構築されたような痕跡は確認



ＳＫ０１土層註記
1　10YR5／6 黄褐色 砂質土 地山炭化物混じりの砂質土をベースとする。褐色～暗褐色土が部分的に混じる。
2 a10YR4／6 褐色土 砂質土 他の混入土が少なく、比較的均質。
2 b10YR4／6 褐色土 砂質土 壁際では、黄褐色砂質土に漸移する。また地山土ブロック径40～70mmが混じる。
3 a10YR4／4～4／6 褐色土 砂質土 ごく少量オリーブ褐色の砂質土ブロックが混じる。地山ブロックの大形のもの径150mm前後が壁際に多い。
3 b10YR5／6 黄褐色 砂質土 地山崩落土からなる。下部で褐色の砂質土が縞状堆積を見せる。
4 a10YR5／6 黄褐色 砂質土 地山炭化物混じりの砂質土をベースとする。比較的均質。
4 b10YR3／4 暗褐色 シルト やや粘性を帯びる。黄褐色砂質土およびオリーブ褐色砂質土がブロック状に混じる。
4 c10YR5／6 黄褐色 砂質土 均質で地山土（含炭化物）をベースとする。
4 d10YR4／6 褐色 砂質土 ブロック状に黄褐色地山土が含まれる。
5 a10YR5／6 黄褐色 砂質土 地山土に含まれる炭化物を含む。中央に暗褐色土が縞状に混じる。
5 b10YR6／8 明黄褐色 砂質土 地山土に含まれる炭化物は全くなく均質。
6　10YR5／6～4／6 黄褐色～褐色 砂質土 上下層に比較しやや暗い色調。
7　10YR5／8 黄褐色 砂質土 上部および中央部で地山土に含まれる炭化物が多い。壁際では少ない。
8　10YR3／4 暗褐色土 シルト やや粘質 開口時の流入土がある。

第30図　SK01土坑断面図

されず、おそらく両者は極めて近い時期に営まれていたものであろうと推測される。

（２）土器・陶磁器

須恵器系陶器

壺・甕・擂鉢・鉢があり、器形および器面の調整痕の観察から第２節に掲げた須恵器とは別に分類した。

＜壺・甕＞（第31図１～９）

１の壺をのぞいた他は、破片であるため壺か甕かの器形の判断ができない。

１は器面に轆轤水挽き痕が残り、特に内面において線状痕として顕著に残っている。器面の厚さは上下で５㎜前後の差がある。

そのほかの破片については、器の表面と内面にみとめられる調整痕で分類した。

ａ：表面および内面に轆轤水挽き痕だけがみられる。２・３は胴部下半の破片である。

ｂ：表面には横方向の平行直線状の叩き目、内面には円形に凹む当て具痕がみられる。４は胴部上半の破片である。

ｃ：表面の調整はナデだけであり、内面には円形に凹む当て具痕がみられる。５は胴部中位の破片と思われる。

ｄ：表面には斜め方向の平行直線状の叩き目が施されている。内面は幾分凹んでいるが、ナデ調整されている。６・７は胴部下半の破片である。

ｅ：表面には横方向に平行直線状の叩き目がみられるが、内面は平滑にミガキ調整されている。８は平底の底部破片であり、底面もミガキ調整されている。９も底部破片であり、切り離しは静止糸切りである。表面は轆轤調整痕がのこり、内面はすられ平滑である。

＜擂鉢＞（第32図１～７、第33図８～14）

口縁部と体部、底部の破片である。

いずれも器表面は轆轤水挽きで調整され、内面には櫛状の工具でひかれた卸し目がみられる。

１～７は口唇内側が斜めに面取りされており、そこに櫛目波状文が施されている。その口唇部の下は３㎝前後の隙間をあけて、卸し目がすきまなく引かれている。卸し目の幅は２～３㎝である。

８～13は体部破片である。８は一条の幅が３㎝で卸し目の間隔があいているが、他の９～13は交差して詰まっている。12・13は底辺部に近く、使用によって内面が平滑にすられている。(註３)

14は底部破片であり、底部の切り離しは静止糸切りで、内面は使用によって平滑にすられている。

＜鉢＞（第33図15）

内外面に轆轤水挽きの痕跡がみられる。内側に卸し目はない。15は体部破片である。

以上の須恵器系陶器の壺・甕・擂鉢・鉢は珠洲焼きの年代と対応させて15世紀後半頃と推定される。(註４)

瓦質土器

＜手あぶり＞（第33図16）

褐色を呈する素焼きの土器で口縁部の破片である。口唇部には蓮弁状の、口頸部には算木状の帯がめぐる。

瓦質土器の年代は中世城館の出土例と対応させて16・17世紀頃と推定される。(註５)

輸入陶磁器

＜碗＞（第34図１～５）

いずれも中国産の青磁破片であり、灰色の素地に薄く釉薬がかかる。それぞれの釉薬の色は１と５が苔色、２・３・４が山葵色を呈している。

１は体部の破片であり、２～５は高台のついた底部破片である。１の表面には、蓮弁文がみられる。５の内側見込みに文様が見られるが、形状は判然としない。なお高台は垂直に立ち上がり内側を削っている。高台の内側には釉薬が施されていない。

＜皿＞（第34図６）

中国産の青磁であるが、灰かぶりにより透明度の高い発色をしていない。高台がやや内側に入りこんでおり、内面体部上位には筋状の鎬文がみられる。

＜酒海壷＞（第34図７）

中国産の青磁であり、灰色の素地に1.5㎜の厚さで淡水色を呈する釉薬がかかり、貫入がみえる。蓋と身からなる酒海壷の身のほうであり、広口壷の口縁部と体部の破片であるとみられる。口縁部は上縁を平にさらに内外側から面取りしている。底部は欠損しているが、二重高台となっている。なお体部には縦方向に鎬文がはいる。

以上の碗・皿は中国明代の15世紀に製作年代が推定され、酒海壷に付いては14世紀の製作年代が推定される。(註６)

施釉陶器

＜小皿＞（第34図８・９）

素地は灰色で口唇部内側に薄緑色の釉薬がかかっている。口縁部が短く斜めに外傾し、口縁端部が外反する端反皿である。９は底部に回転糸切りによる切り離しの痕跡が残る。

＜卸し皿＞（第34図10）

素地は灰色で口縁部内外に苔色の釉薬がかかっている。内側底面に卸し目がみられる。卸し目は一定の幅をもつ櫛状のものを引いたのちに、棒状のものを引いて交差させたものである。底部の切り離しは回転糸切りである。

＜茶碗＞（第34図12）

素地は灰色で、漆黒の釉薬が内面全体に、外面体部上位にかかっている。

他に第34図11は内外面に黄褐色の釉薬がかかるが、器種が不明のものである。

以上の小皿・卸し皿・茶碗破片の産地は瀬戸で、15世紀代の年代が推定される。

（３）銭貨

＜銭貨＞（第35図10・11）

10は篆書体で宣和通寶と判読できる。量目は2.47ｇである。

11は篆書体で皇宋通寶と判読できる。量目は2.81ｇである。

第４節　近世の遺物

（１）陶磁器

施釉陶器

＜鉢＞（第34図13）

内外共に灰褐色の釉薬がかかっているが、内面は白い釉薬による波状の流しがけがみられる。

鉢の産地は唐津で18世紀代の年代が推定される。(註７)

染付磁器

白磁の素地に藍色で文様を付したもので、茶碗・皿・鉢に大別できる。

＜茶碗＞（第35図１～５）

１～３は口縁部の破片であり、４・５は体部および底部の破片である。文様は１・２の網目のものと、４・５の植物・山水にわかれる。

＜丸皿＞（第35図６・７）

７は口径に比して小さい高台がつく。文様は内面の口縁部に線描だけである。

また内側見込みに蛇の目剥ぎの痕跡がのこっている。６は高台が大きく、内面には山水文がえがかれている。

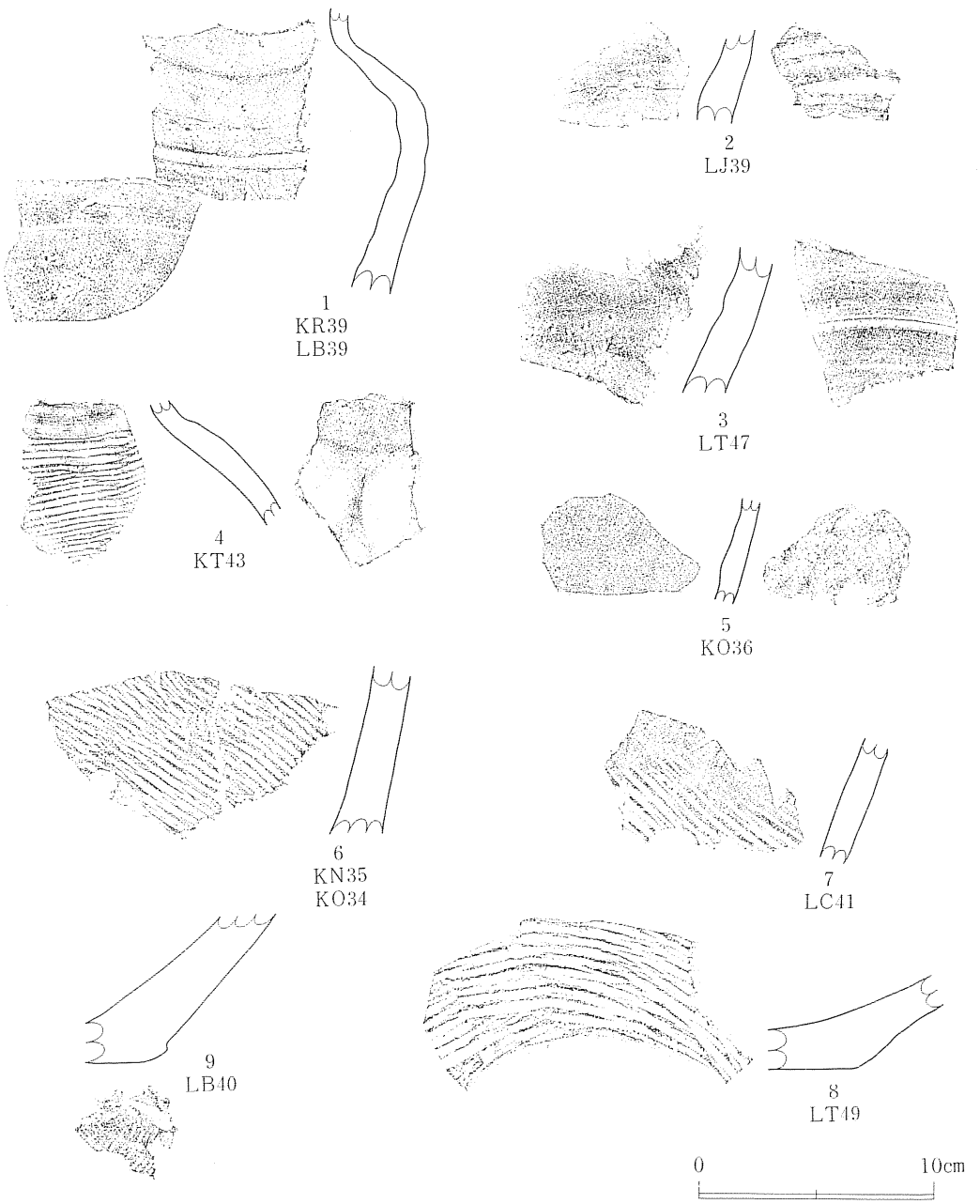
＜鉢＞（第35図８・９）

８は口縁部の破片であり、口唇の内側に帯状の文様帯がある。９は底部破片であり、内側に線文様がわずかにみえる。

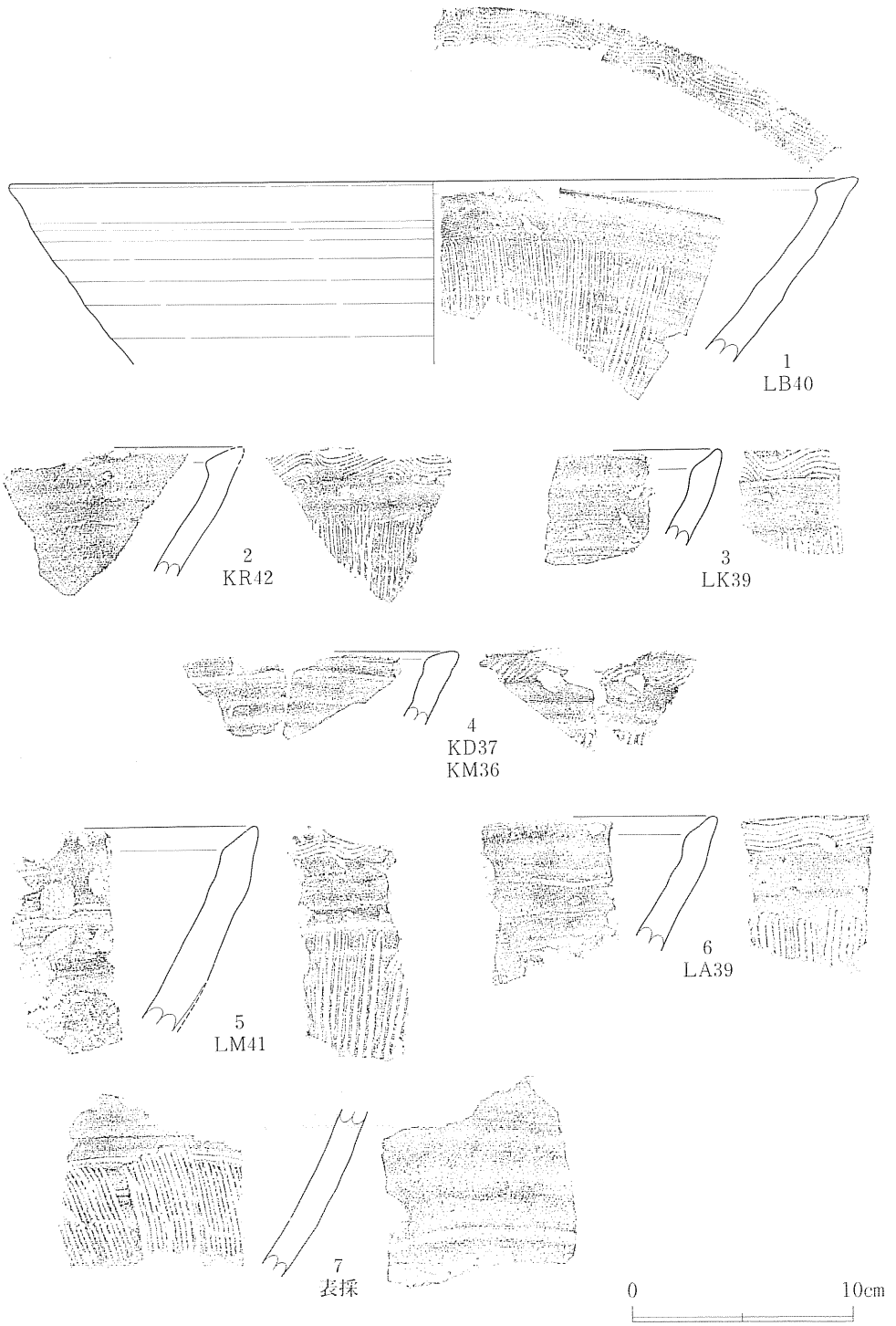
丸皿の産地は伊万里で、17世紀中頃の年代が推定される[註８]。その他の磁器の産地は不明であり、年代は18世紀以降と推定される。

（２）銭貨

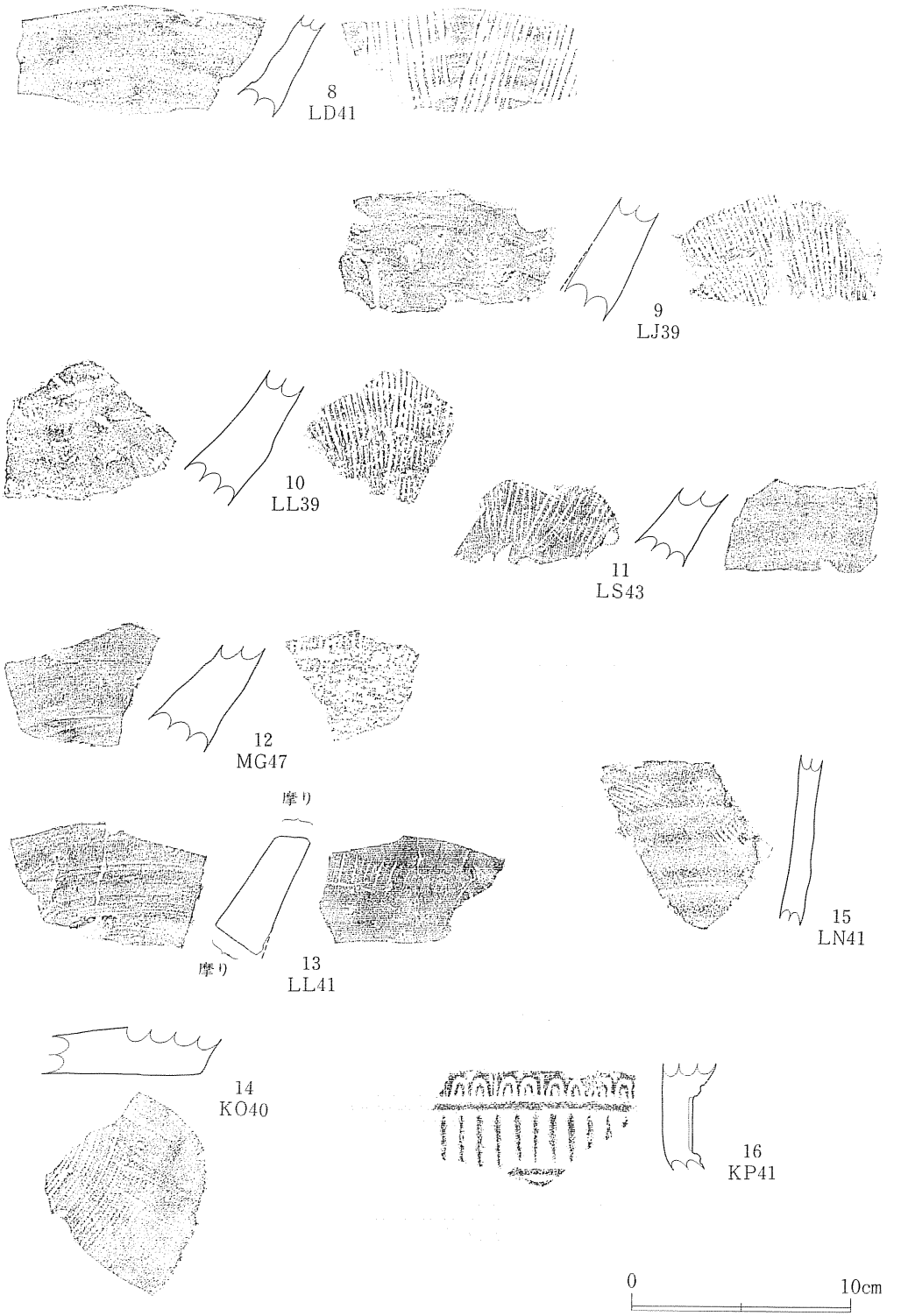
第35図12は文久永寶で、量目は2.86ｇである。



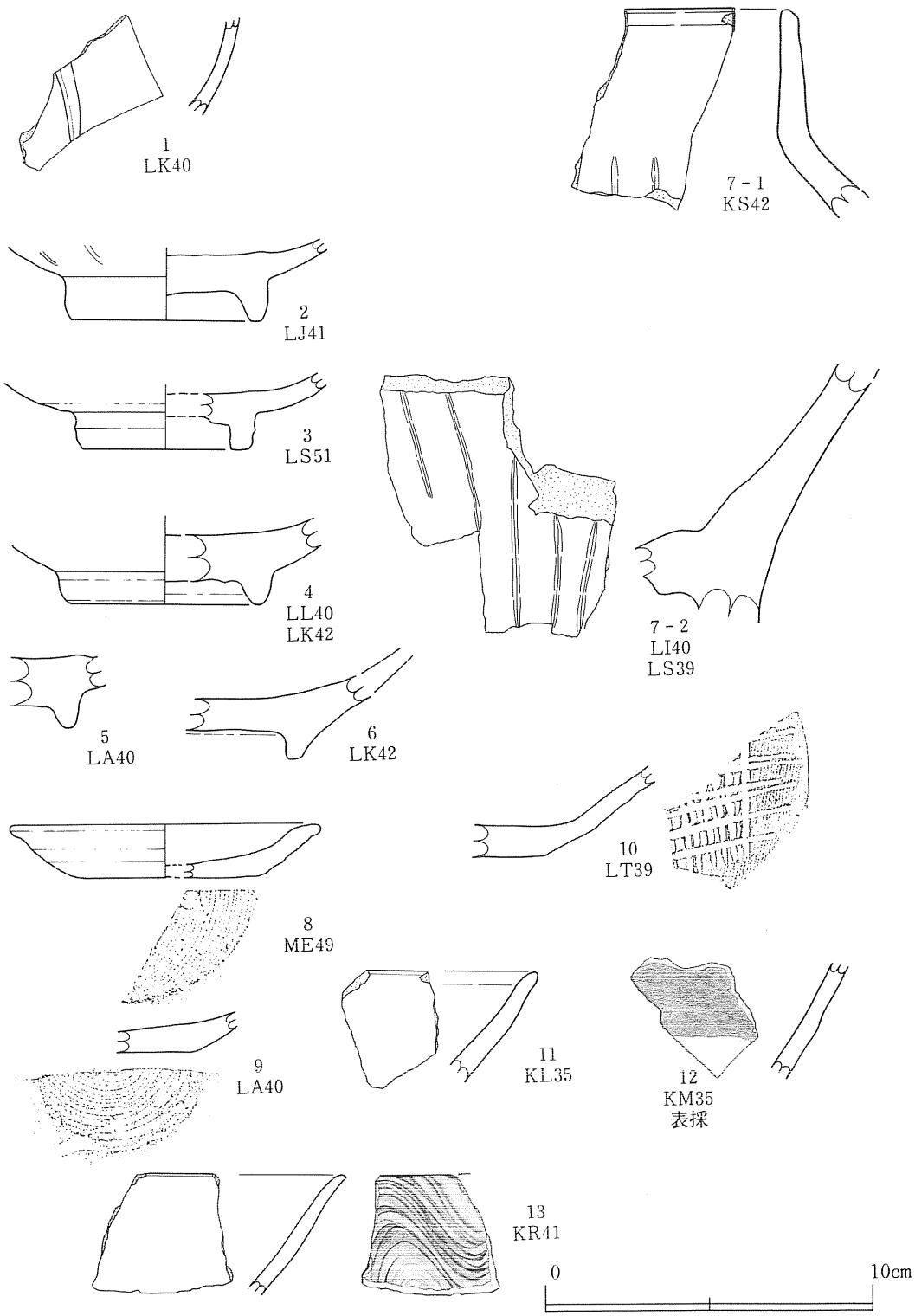
第31図　中世の陶器（１）



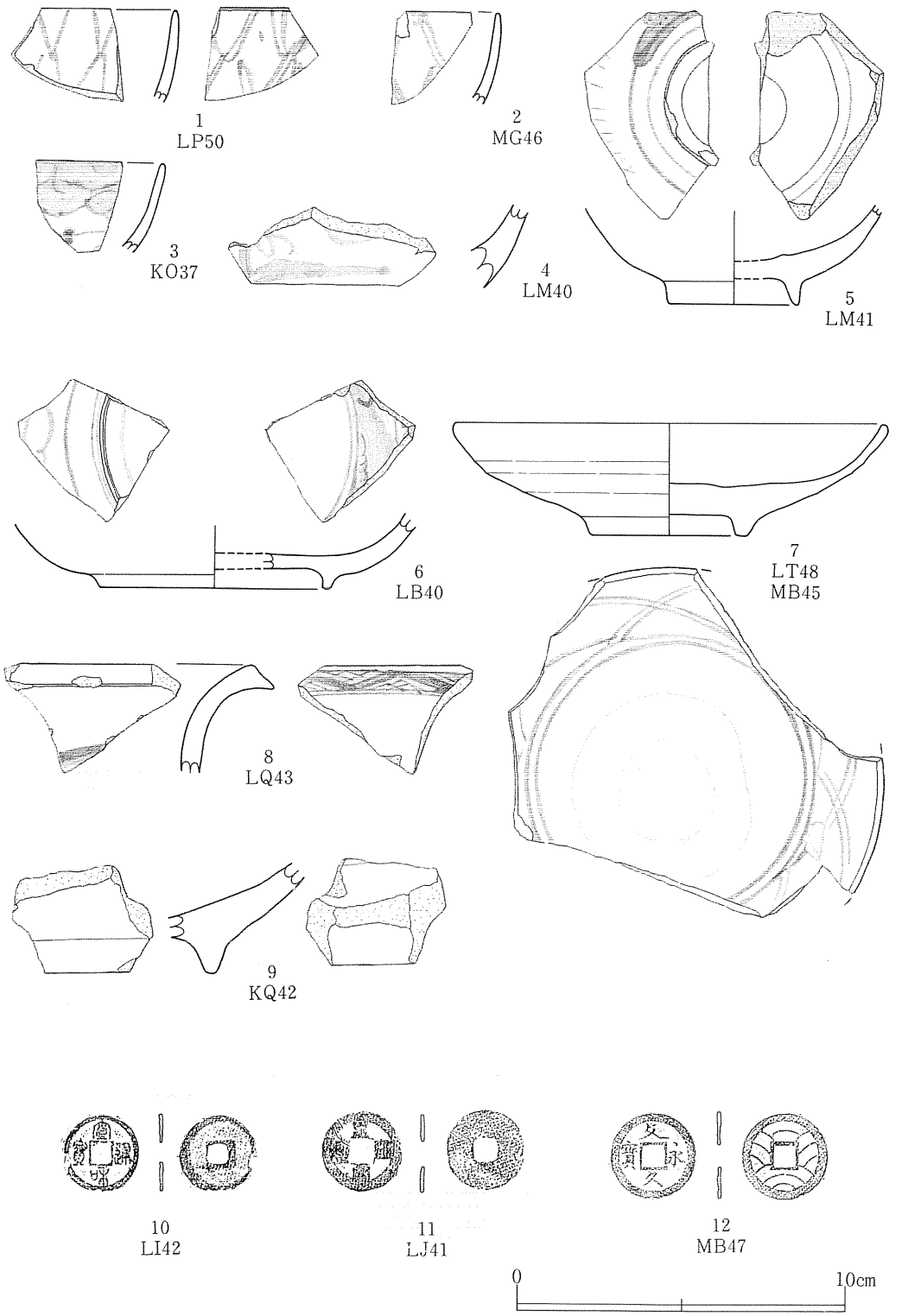
第32図　中世の陶器（２）


8
LD41
9
LJ39
10
LL39
11
LS43
12
MG47
摩り
摩り
13
LL41
15
LN41
14
KO40
16
KP41
0
10cm

第33図　中世の陶器（３）



第34図　中近世の陶磁器



第35図　近世の磁器・中近世の銭貨

第５章　まとめ

第１節　縄文時代後続期の土器群について

第４章第１節（１）に記した土器群は、壺形土器における刷毛目工具の連続圧痕文などの特徴から、いわゆる「遠賀川系土器」を含む土器群である。近年、秋田県内のこの種の土器群を出土する遺跡については、日本海沿岸経路を重視した上での東北弥生時代社会最古集落とまで言われるようになっている。(註９)

確かに、東北地方北部地域にあって本遺跡の位置する八郎潟沿岸部は、籾痕土器を検出した井川町新間遺跡(註10)や、男鹿市三十刈Ⅰ遺跡(註11)、炭化米を出土した若美町横長根Ａ遺跡(註12)を擁し、早くに初期稲作の伝わった地域である。本遺跡の西約１㎞に位置する家の上遺跡でも籾痕土器が確認されている。(註13)しかしながら、このような稲作痕跡の一面のみでこの地域を含む東北北部縄文時代終末期後の社会を評価し、その文化内容を律することは、前代からの伝統のもと、より北方の地域との関係も併せて培われる該地域先史社会の多様性を覆ってしまうことになりかねない。特に重要なのはそうした評価がある閉鎖空間を仮想することで可能となることである。そもそも、「遠賀川系土器」の名そのものが初期稲作の代名詞のようなもので、開放系であるべき先史文化を年代的・空間的に規定する土器型式ではありえない。

本書ではその意味で当該期の遺物群を「縄文時代後続期」という扱いで記述した。

出土した遺物は第４章冒頭に記したように、すべて館の上館第Ⅰ郭上面からの転落遺物と考えられる。平成５年度の調査で、館の上館第Ⅳ郭およびその南西側の台地上面で土坑墓58基、壺棺22基からなる墓域が確認されており、第Ⅰ郭上にも古代・中世以前にこの時期の居住空間が営まれていたものと考えられる。

遺物群の各論的評価は平成5年度調査分の報告で改めておこなわなければならないが、とりあえずここでは縄文時代直後の土器について、周辺諸遺跡出土資料との関係でその位置づけを簡単に記しておきたい。

出土した土器には大洞Ａ’式にあたるものも含まれている。(註14)浅鉢形土器の第６図１～５、鉢形土器の第８図23がそれである。本遺跡の北８㎞に位置する寒川Ⅰ遺跡では、幾分細目の沈線によって多段化した変形工字文を描く浅鉢および鉢形土器が出土している。(註15)大洞Ａ’式よりもわずかに新しいこの寒川Ⅰ遺跡の土器には、第11図63～65、67～71にあるような口縁部の短い甕形土器が伴っている。この種の甕形土器では刷毛目調整が施されることはほとんどなく、寒川Ⅰ遺跡の場合にはごく少数横位の刷毛目調整が施されるだけである。寒川Ⅰ遺跡の甕形土器では口縁下の屈曲部に沈線を巡らす例の割合が、本遺跡に比べ総体として低いという違いがあ

るが、この種の土器が刷毛目が多用される以前の大洞Ａ’式に近い関係をもつものといえるであろう。

本遺跡では第10図52～59のような、口縁部に縦位の刷毛目痕を残す甕形土器が認められる。類似の土器は横長根Ａ遺跡や、男鹿市大倉遺跡[註16]に多く、第６図８～12、第７図13～18のような細く鋭い描線による変形工字文、平行沈線文を施す浅鉢形土器や、第９図42～47のような広口壺との中間的な形態の甕形土器を伴っている。寒川Ⅰ遺跡出土土器群よりは新しくおかれる土器である。第13図99～第16図100に示した広口壺はその半数が内外面のいずれか、あるいは両面に刷毛目調整の痕跡を残す。秋田県内の事例では横長根Ａ遺跡第1号住居址出土資料や、秋田市地蔵田Ｂ遺跡土器棺資料[註17]、湯ノ沢Ａ遺跡第1号竪穴状遺構および土器棺資料[註18]が著名である。地蔵田Ｂ遺跡、湯ノ沢Ａ遺跡出土資料には独立した鋸歯状ないしＸ字状区画の磨消縄文を施す例も含まれ、時期幅がやや広い。本遺跡出土の広口壺には１点の磨消縄文を施した資料（第14図115）が含まれるが、同じ文様は横長根Ａ遺跡第１号住居址出土壺の体上半にもとられ、地蔵田Ｂ遺跡、湯ノ沢Ａ遺跡の独立区画の磨消縄文よりも古手におかれる。大半の無文あるいは平行沈線のみの壺形土器も刷毛目多用の点から、総体として第10図52～59のような甕形土器に伴うものと考えられる。寒川Ⅰ遺跡出土土器群に後続し、横長根Ａ遺跡や、地蔵田Ｂ遺跡、湯ノ沢Ａ遺跡の古い部分の一部と併行する時期の資料としてとらえたい。

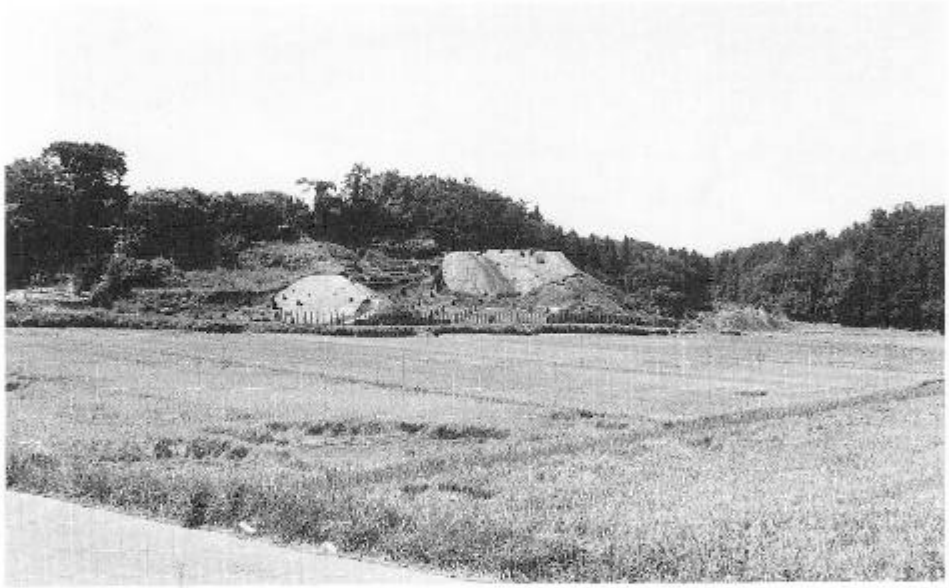
第２節　中世の遺構について

本遺跡帯郭上面に確認された６条の溝跡は、館の上館第Ⅰ郭の造成・改築に伴って作り替えがなされたものと判断され、その延長は第Ⅰ郭と第Ⅱ郭の間を区切る空堀へと続くと推定された。中世城館の周囲を巡る段築が、調査の結果、狭い堀あるいは溝と地山削出しの土塁とで構成されている例が知られており[註19]、本遺跡の溝跡も基本的に同様の構造をもつ。特徴的なのはSD13、SD14のような斜面へ向かう屈曲部をもつことで、これなどは溝跡が単に第Ⅰ郭の周囲を区画するだけではなく、戦時側妨のための折邪[註20]のような施設であったことも考えさせる。

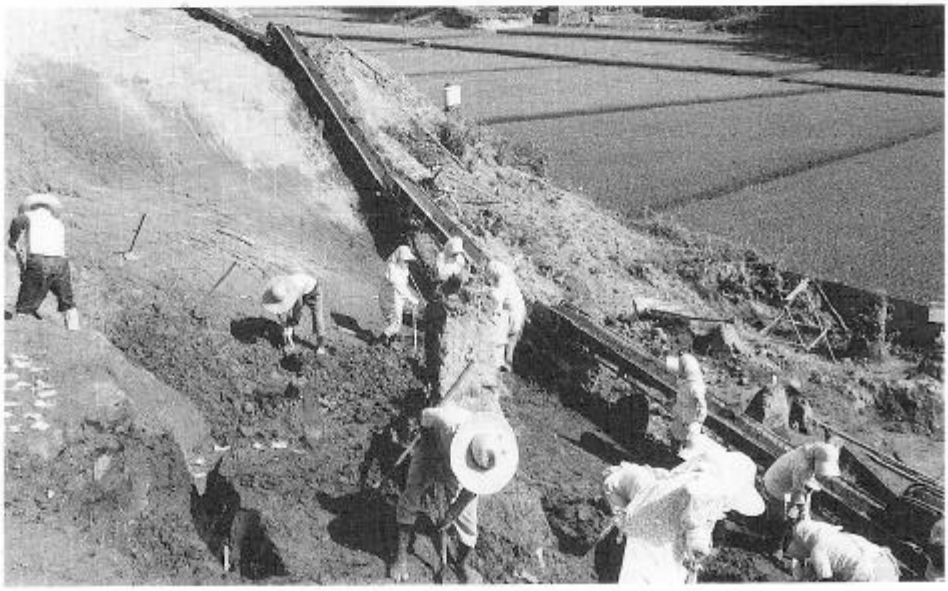
また、帯郭西肩部分に確認されたSK01は地下式坑と判断された。県内の中世城館での類似の遺構は確認されていないが、千葉県四街道市池ノ尻城址[註21]では類似の遺構が12基確認され、報告者の大橋康二氏によって「地下式土倉」の呼び名と、貯蔵・蓄財の機能が考えられている。本遺跡の事例は出土遺物もなく、その正確な時期・機能とも不明である。県内および隣県での類例が増えることに期待したい。

※　（註）は図版頁末尾に記載

1　調査前遺跡全景
（東→西）

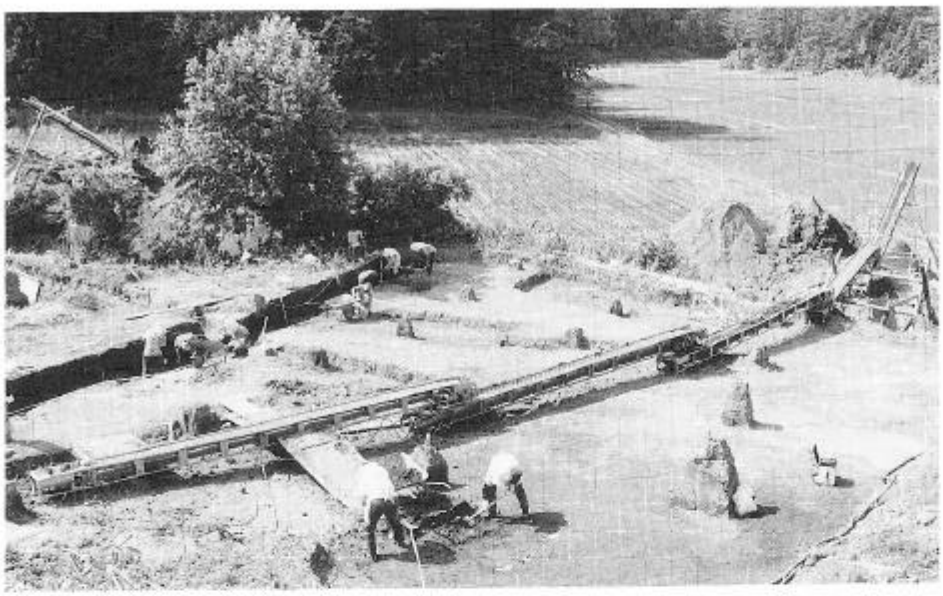


2　調査後遺跡全景
（東→西）



3　東側斜面での
調査状況

図版 2

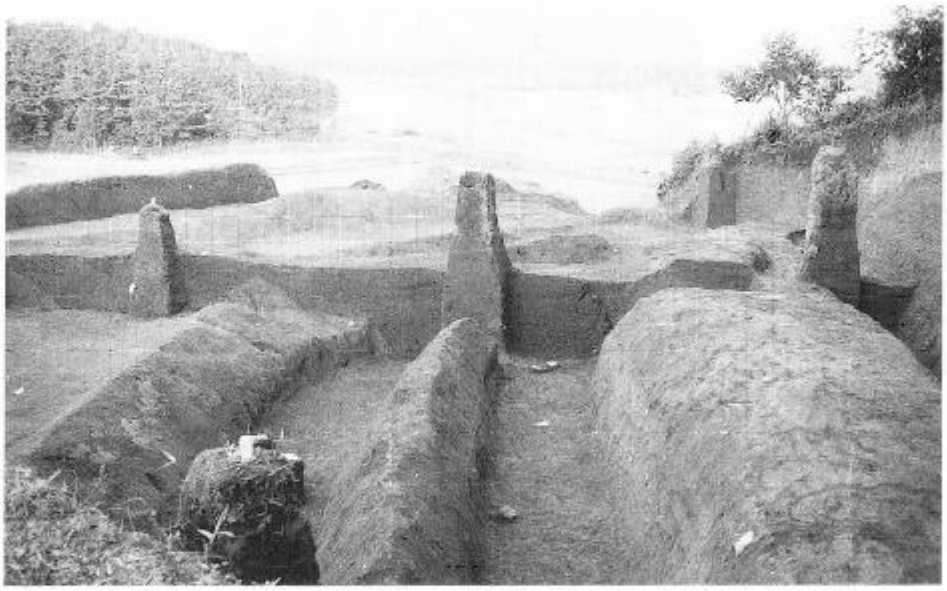


1　西側斜面下での
調査状況

2　東側斜面下
完掘状態（西→東）

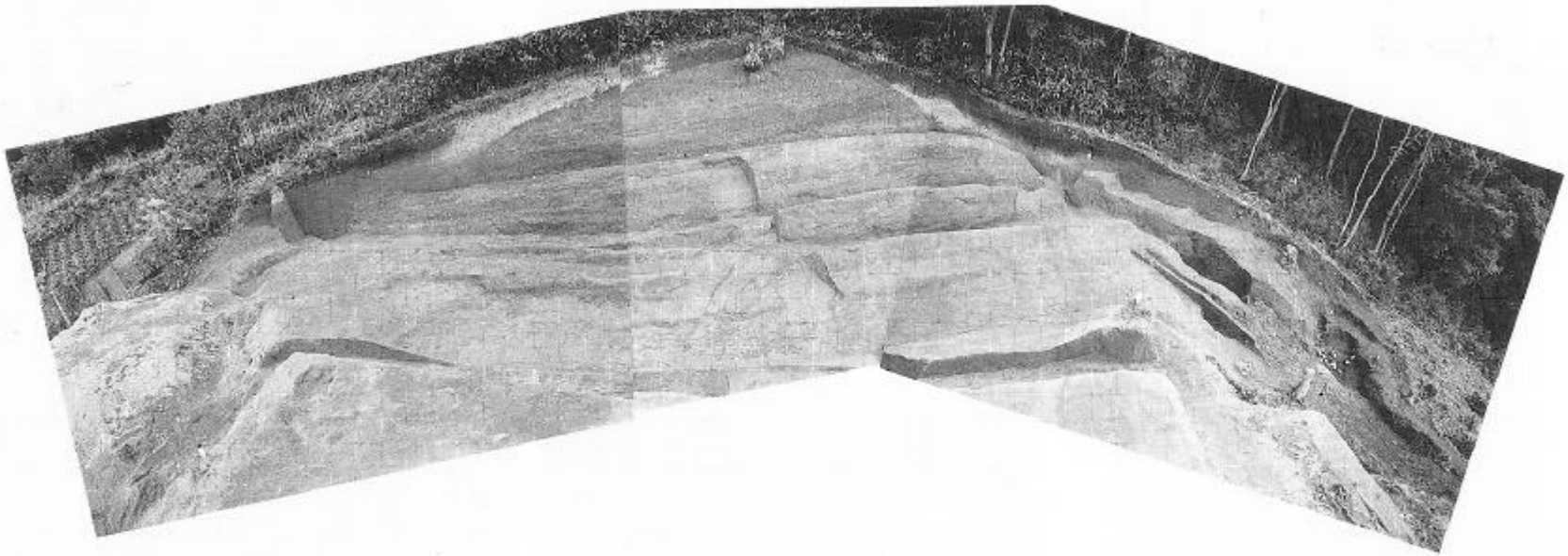
3　西側斜面下
完掘状態（東→西）

1　帯郭上面溝跡
SD10,SD11
土層断面（西→東）



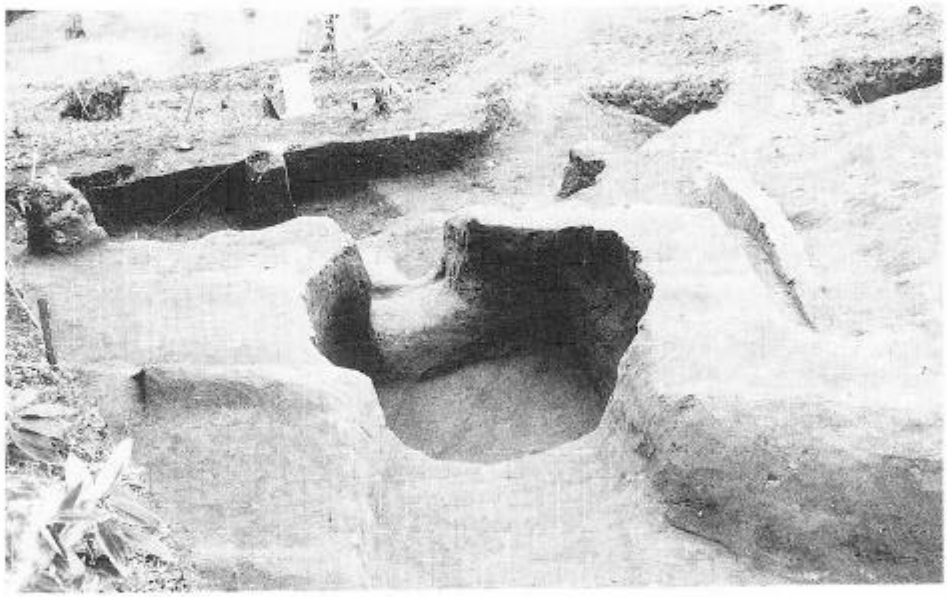
2　帯郭上面溝跡
SD10～SD15
重複状態（西→東）

3　帯郭上面溝跡
SD10～SD15
完掘状態（西→東）



帯郭上面溝跡
SD10～SD15
完掘状態（北→南）

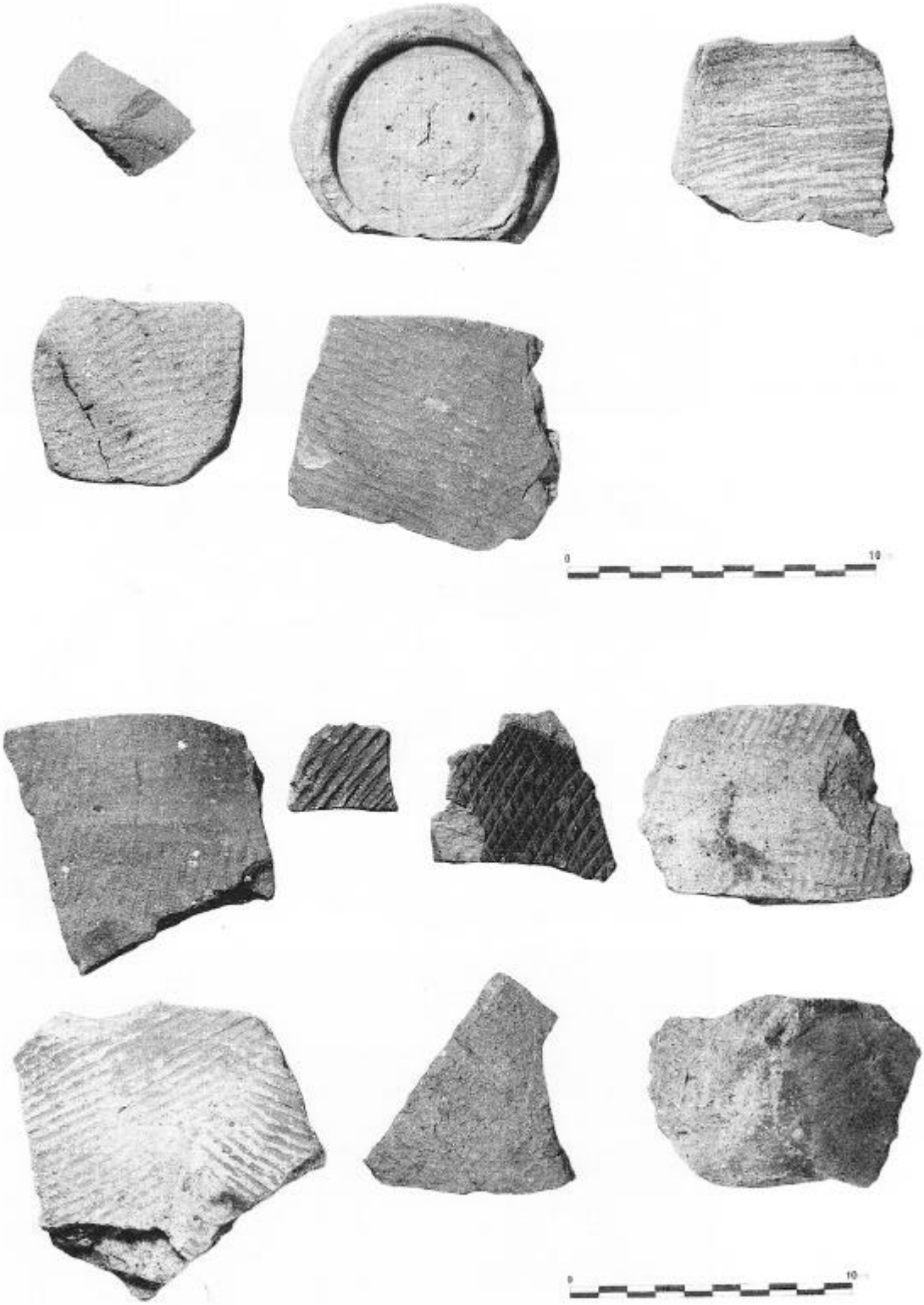
1　東側斜面
土層堆積状態
（分析試料採取箇所）



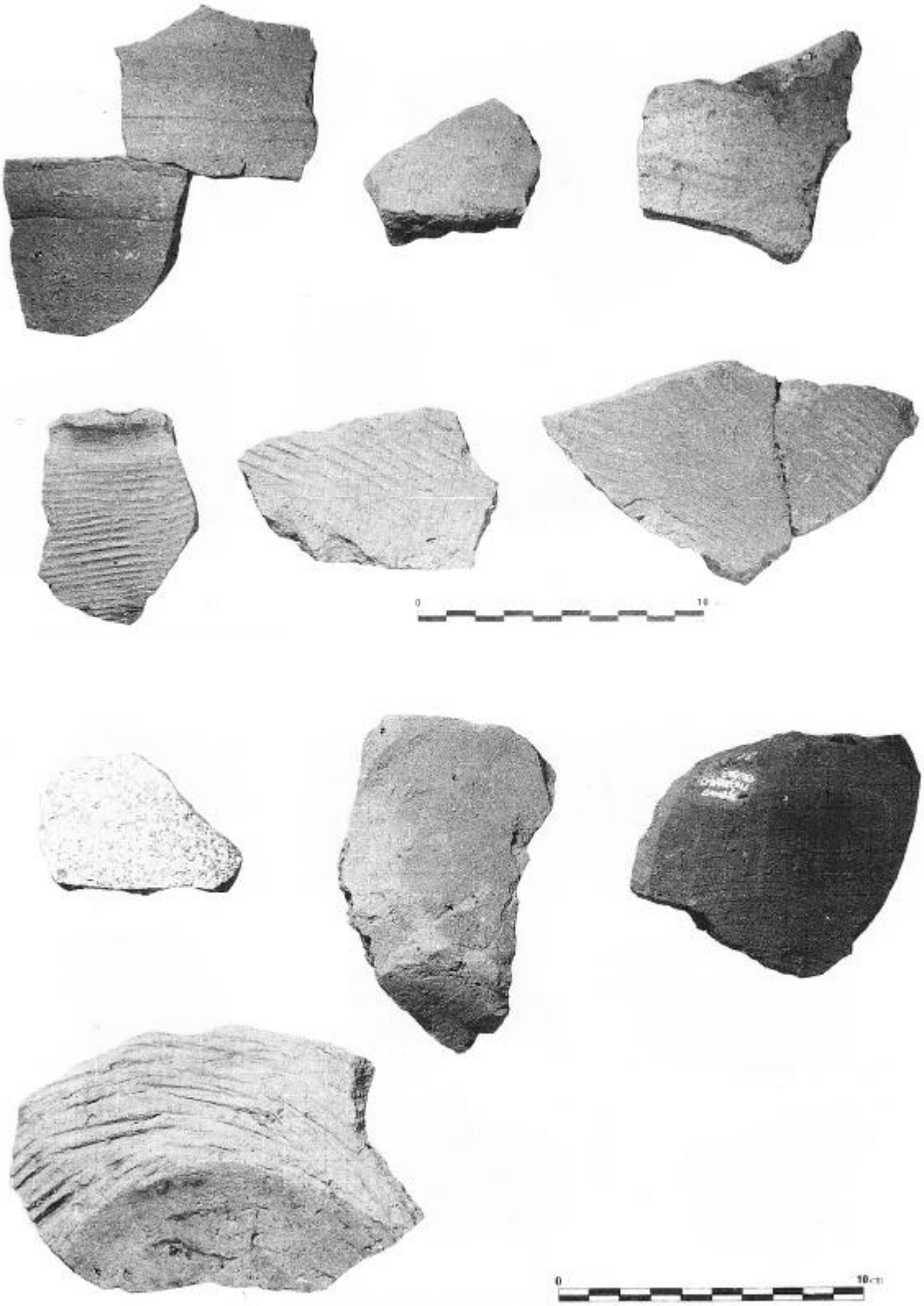
2　帯郭西側肩部
SK01完掘状態
（東→西）

3　帯郭西側肩部
SK01完掘状態
（南→北）

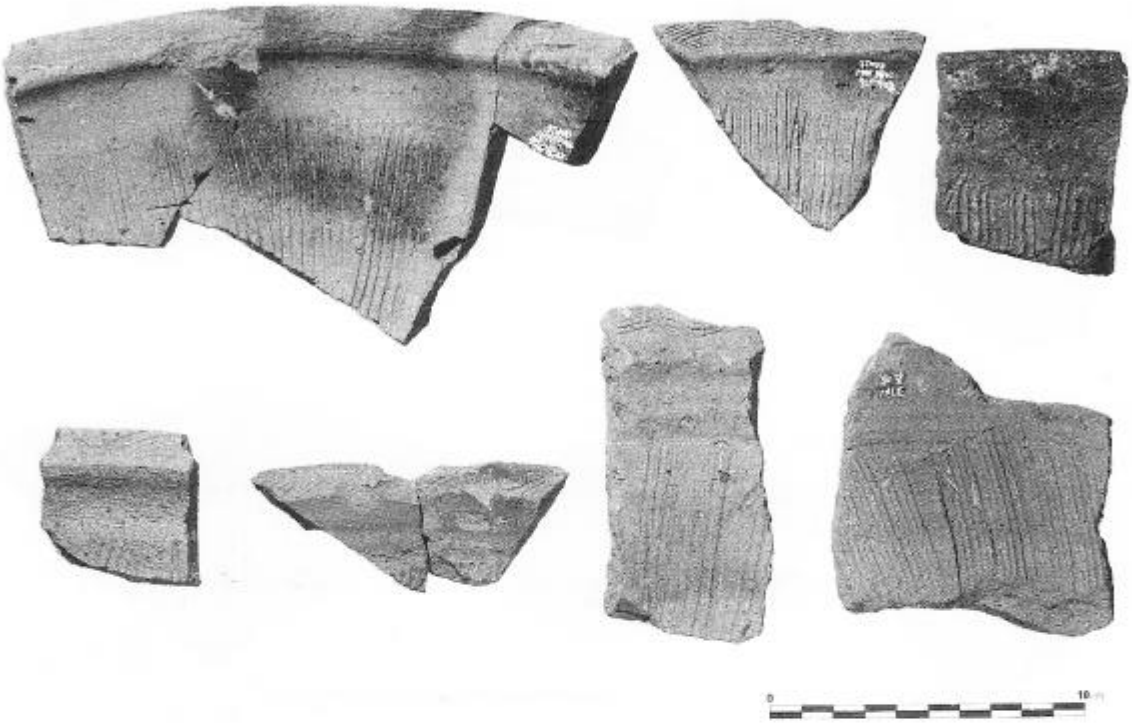
図版6

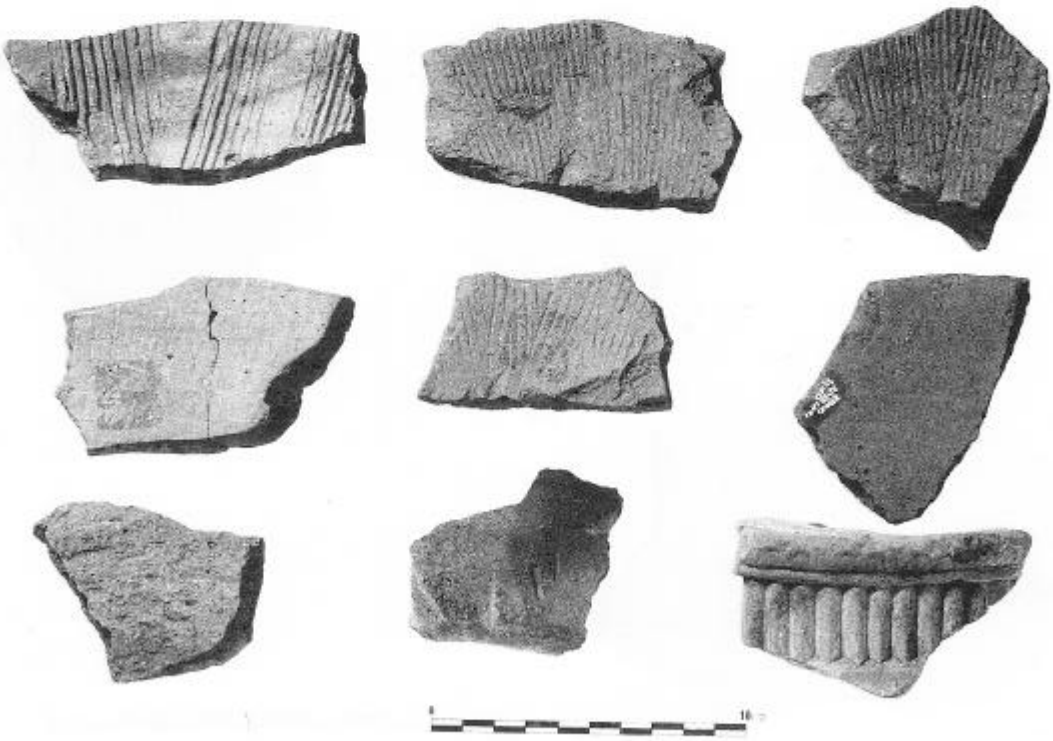


古代の土器

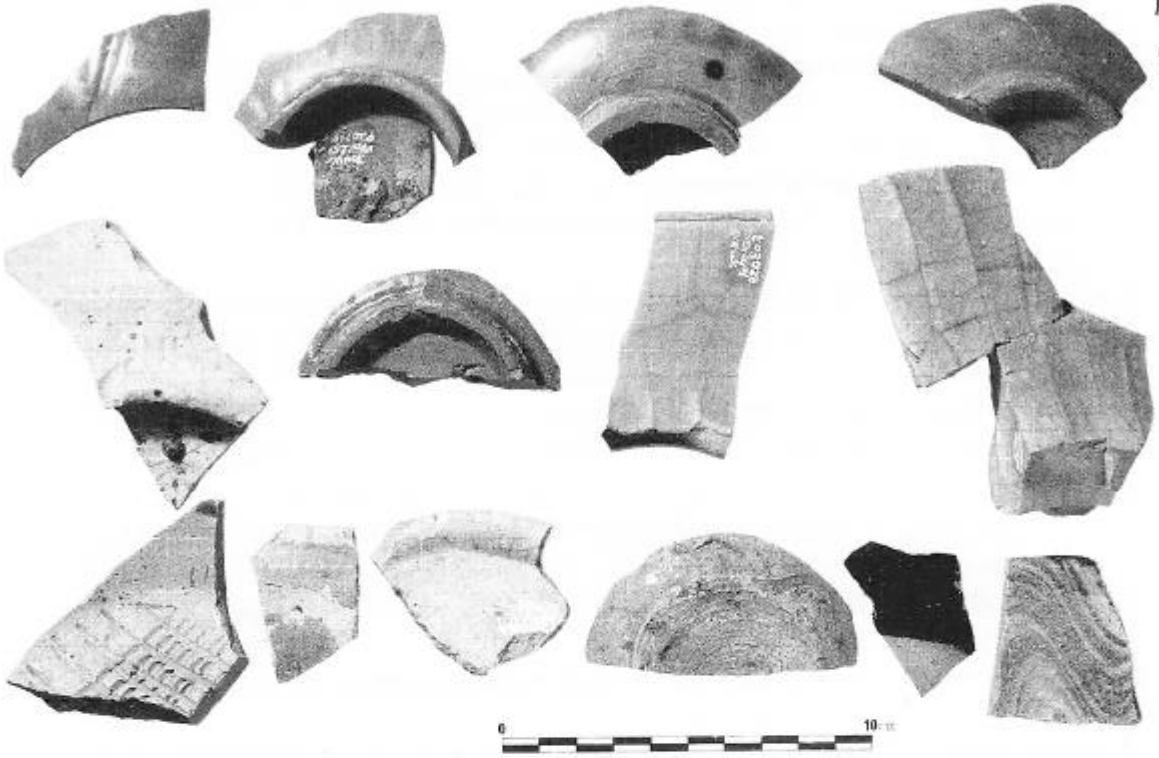


中世の土器（1）

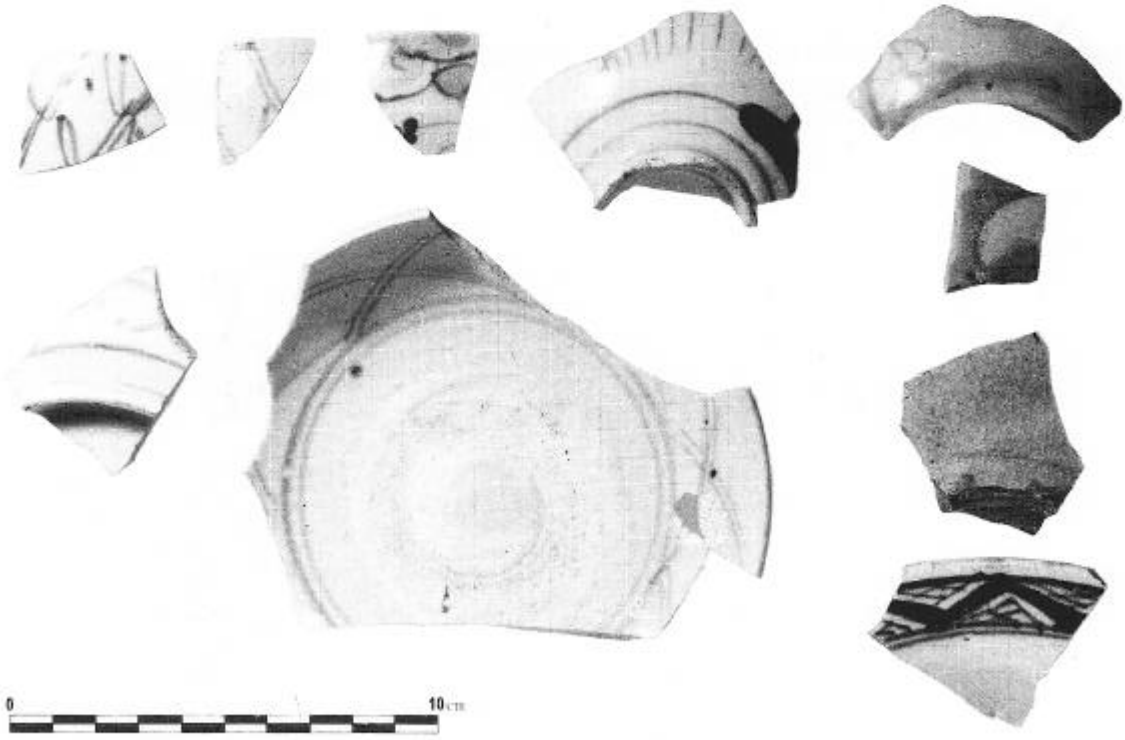




中世の土器（2）



中世の陶磁器



近世の磁器

(註３)13の断面が摩られており、破片を砥石に転用したと思われる。須恵器にもみられることから、転用の時期を近世以降に想定したい。
(註４)『珠洲の名陶』珠洲市立珠洲焼資料館（1989）の編年表を参考にした。
(註５)手あぶりの年代については、八戸市根城出土資料を参考にした。
『根城－本丸の発掘調査－』八戸市教育委員会（1993）
(註６)製作年代については、愛知県陶磁資料館井上喜久夫氏のご教示による。
(註７)産地及び製作年代については、愛知県陶磁資料館井上喜久夫氏のご教示による。
(註８)(註７)に同じ。
(註９)須藤隆「４弥生社会の成立と展開」『新版 古代の日本 ９東北・北海道』 1992(平成4年)
(註10)小武海松四郎『籾痕土器をともなう秋田県南秋田郡井川町新間遺跡遺物について』 1977(昭和52年)
(註11)秋田県教育委員会『三十刈Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 1984(昭和59年)
(註12)若美町教育委員会『横長根Ａ遺跡』 1984(昭和59年)
(註13)児玉準「家の上遺跡調査報告」『秋田県埋蔵文化財センター年報』３ 1985(昭和60年)
(註14)山内清男「日本遠古の文化」『ドルメン』１－４～９，２－２ 1932(昭和７年)
(註15)秋田県教育委員会『一般国道７号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ』
1988(昭和63年)
(註16)児玉準「男鹿市大倉遺跡出土の弥生時代遺物について」『研究紀要』第２号 秋田県埋蔵文化財センター 1987(昭和62年)
(註17)秋田市教育委員会「湯ノ沢Ａ遺跡」『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』
1984(昭和59年)
(註18)秋田市教育委員会「地蔵田Ｂ遺跡」『秋田臨空港新都市開発関係埋蔵文化財発掘調査報告書』
1986(昭和61年)
(註19)秋田県教育委員会『西山地区農免農道整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ－高瀬館跡－』
1987(昭和62年)
(註20)小室栄一『中世城郭の研究』 1975(昭和50年) 新人物往来社
(註21)中野遺跡調査団『下総国四街道地域の遺跡調査報告書－池ノ尻館址・戸崎館址・前広遺跡－』
1986(昭和61年)